家庭雜誌

第貳拾壹號

愛度き新年　心新たなれば快活なり、快活なれば幸福なり、笑ふ門には福來る

千代田の宮　天に榮光あり、地に平和あり、

遠寺の鐘　雪柯一掃、暮色落つ、遠寺の鐘の渡るなり、

籬の菊　籬下の秋色、霜に傲る一枝、彼女が芳潔なる生涯は、彼花の芳潔なる生涯に似たり、

何處に？　可愛なる兒、可憐なる母、悠々たる世途限りなし、

女子の言葉　人を動かす春色多きと須ゐす、其繁からんよりは寧ろ稀なれ、

歐洲美談　彼の年少を興すべし、好個の美話又佳談

恭賀新禧

婦女雜誌

毎月二回 一日十五日發行

定價 一册金六錢●六册前金三拾四錢●十二册（六ヶ月分）前金六拾五錢●二十四册（一ヶ年分）前金壹圓二拾五錢●郵税一册金一錢

家庭教育の良師となり、婦女社會の好友となり、淑姫を育し、賢妻を生し、明治の新日本に、藹々たる新天地を開かんとするものは婦女雜誌なり。親切適實なる『論說』、優美高學なる『史談』あり、愉快婉美の『文苑』あり、精妙高雅の『小說』あり、禮式衛生衣食育兒の諸項を教ふるに『家庭』欄を以てし、香花茶譜音樂裁縫その他百般の技能は『手藝』欄之を盡せり、『學術』は以て諸般の科學藝術を講し、『遊談』は以て種々有益にして妙味ある談柄を設す、『詞藻』は妙齡子女が才藻を練成するの遊戯苑に供し、『流行案内』は社會日進の情況を知るの博物場たり、本誌が如何に舊來の陳套を脫して、愉快なる新空氣を吞吐するかを見られよ。

幼年雜誌

毎月二回定價三錢郵税壹錢

高等尋常小學幼稚園兒童が精神修養の大倉庫、智識練磨の大資糧たるは本誌なり、其科目は歷史地理修身科學文章遊戯に至る迄、網羅する所三十餘種、毎號明治文壇の諸名家が神來の筆、艶明美麗なる挿畫は、特に本誌が文學美術の趣味饒多なる處なり、

日本之少年

毎月二回定價八錢郵税壹錢

本誌は[illegible]說の科學、粹英の文學を集めて、中學以上の少年が才藻精神を修養せしめんとする者、文壇名家の天葩、泰西學藝の神美、壯麗なる評論、富贍なる逸話、和漢西洋の文物技藝一切を網羅して、日本少年界前途の一大松火たらんとす、

文藝共進會

毎月一回定價六錢郵税壹錢

太平謳歌の餘音を永うし、茲に文藝の粹美を發揮せんとて、本誌新たに生る、其網羅する所、詩歌俳諧小說傳記戲文月旦落語古今奇人傳藝人逸話等、明治文壇才名の士が錦心繡腸を鬪はす處正に是れ文園の一大美觀、社會の一大紺波なり、

學生筆戰場

毎月一回定價六錢郵税壹錢

これ從來の共進會と合して膨脹せる文章專門雜誌なり、古今名文の解剖、內外文人の逸話、或は文法、或は時事論文なかゝげて、文思を富贍ならしめ、江湖幾万少年の文章は、丁寧に删潤批評し、毎號懸賞文を募集して、大に才思を發揮せしむ、

日本商業雜誌

毎月二回定價八錢郵税壹錢

昂低常なく浮沈定まらず、轉瞬頃刻の間變化千萬する商業界の活勢を洞看し、經濟社會の形勢を指導し、常に天下知名の學者實業家が大長策大議論を掲げて、普く實業家の顧問たらんとす、機慧の眼孔、銳利の彩筆眞に實業界の燈明臺、

日本農業新誌

毎月一回定價八錢郵税壹錢

本誌の本領は、學理と實驗と相待ち以て、農界の眞相を發し、農業の振興を策り、農術の改良を講じ、農界の保護者となり、農界の機關となるにあり、記事有益にして興味長し、眞に農界の一大雜誌なり、

日本大家論集

毎月一回定價拾錢郵税壹錢五厘

社會の新潮流を寫さんが爲めに、更に範圍を政治上にも擴張せり、朝野名士が意匠慘憺の經綸、古今碩儒が博識深奥の學說を網羅し、又教育の一欄を新設し、教育海の新現象を知らしめんとす、風雲電雷、光彩陸離、社會の万象點々指目すべし、

日本之法律

毎月一回定價拾錢郵税壹錢五厘

英米獨佛あらゆる法律學の粹英蘊奥を叩きて、眞理の探險者となり、人生の保護者となる、其載する所普通判決法の外、更に行政法判決例あり、論斷痛快、卓識明晰、老吏の如く、名醫の如し、本誌は眞に是れ行政司法に志す人の最良師友也、

發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

家庭雜誌第貳拾壹號

（明治二十七年一月十日發兌）

社説

愛度き新年

（健全なる家庭）



愛度き新年は來れり、何故に愛度き乎、愛度しと思ふは、則ち最も愛度きものにあらずや。

『元日や神代の事もおもはるゝ』ゆら〳〵と輝き渡れる朝日に向ひ、新たなる顏を以て、新たなる年を迎れは、此身は恰も清淨なる、新鮮なる世界に入りたる心地こそすれ。

新たなるは、進歩の始めなり。一の新年は、則ち人の再生の時と知らすや。復活の時と知らすや。年と共に生れ更り、年と倶に新たなり。斯くして進歩も來るなれ、斯くして上達も來るなれ。而して幸福は最も多く來るなれ。それ新年は各人各個の誕生日と思へは、斯く迄愛度き日は、亦た何の時にかあらむ。祝せよや、喜へよや、愛度しと思ふは、則ち最も愛度き所以にあらずや。

人生の恐ろしき大敵は、退屈にあり、倦厭にあり。同しき仕事を繰り返せは退屈し、變化なけれは倦厭す。退屈すれは、人心何となく不活潑となり、倦厭すれは、人心何となく不愉快となる。不平も此より來り、失望も此より來り、窮愁も此より來る。個人にして此の如くなれは、個人の光明沒し、家庭にして此の如くなれは、家庭の光明沒す。光明なきの家庭は、不健全なる家庭也。

扨も難有きかな、新年は萬里同風、四海平等、千戸萬門

德富猪一郎著

吉田松陰

既刊

定價金五拾錢

郵稅六錢

◎題して『吉田松陰』と云ふも、其實は維新革命前史論たり。德川幕府は『何故』に顚覆したる乎、『如何にして』顚覆したる乎、本書は幾分か說明したりと信ず。

◎松平越中守、水野越前守、阿部伊勢守、井伊直弼、寛政の內を本としたる改革、天保の外を主としたる改革、弘化嘉永の變通的政略、安政の復古的政略、其の人物、其の事業、擧げて此の中に存す。

◎藤田東湖、佐久間象山、横井小楠、敵愾的精神、國防的經綸、開國的識見、尊王攘夷、開港佐幕、公武合躰、當時の巨人、當時の活題目、擧げて此の中に存す。

◎若し夫れ本題の主人公たる吉田松陰に到りては、著者滿腹精神の注傾する處。其の時勢、其の境遇、其の血統は、遂に彼が如き人物を作りたるを說き。更らに家庭に於ける彼れ、天下の士としての彼れ、革命家としての彼れ、敎育家としての彼れ、其他總ての彼れ、描き來りて紙上に血あり、聲あるや否やを知らざれども決して藁人形、土偶の類にあらざる可し。

◎嘗て『國民之友』に掲げたるものを增加する十の七八、删るもの十の一二、本來の面目一新したるを覺ふ。松陰の妹婿にして、其の親友たる揖取男爵曰く『事實御考據の詳密なるは、喙を容るゝ所無之』と、其の孟浪杜撰にあらざるは、幾分か之を知るに足らむ。

◎本書は更らに吉田松陰の肖像、久保田米僊氏の實寫せる松陰神社、松陰墳墓の圖を添ふ。又た踏海失敗の禍案たりし佐久間象山の松陰を送る詩。及び松陰東北日記。松陰より横井小楠に與ふる書簡。長州の先輩村田清風の詩。何れも石版刷にて、其の眞蹟を寫したるものを附載す。快心洞目すれば、當時の形勢歷々として眼中にあり、維新革命前の先進偉人、冉々として人に逼るを覺ふ。

發行所　民友社　東京市京橋區日吉町四番地

賣捌所　東京○上田屋○東京堂○東海堂○大坂吉岡梅原中村○名古屋川瀨○博多積善館○森岡○熊本長崎○好文堂

議會解散 總選擧

五十部以上一纏め購求の諸君へは特別大割引す

解散は突として來れり何故の解散乎政府は第五議會を以て國民意志を代表せずとして解散せし乎解散果して正當の理由を有せる乎國民は須らく之を知らざる可からず否是非共知るを要す

政府對民間黨の關係は隱々の裏に局面を一變せり然り新吏黨なる一團塊は俄かに成立せり國民は須らく第四議會以來の政界略歷を知らざる可からず否是非共知るを要す

第五議會の批判は黒白紛出天下將さに彼等の口舌に迷はんとす然り迷はさるゝものあらんとす國民は須らく第五議會の經過を知らざる可からず否是非共知るを要す曰く官紀振肅曰く星議長問題曰く千島艦事件曰く條約勵行案曰く公約履行

自由黨の近狀を詳にするは撰擧民の最も必要とする所ろ何となれば彼れは新吏黨なり故に彼れは撰擧場裏民黨正面の敵たる可ければ

民黨の政綱を讀むものは表裏隱顯の政界に立ちて毅然として動かず惑はざるの識見を得るを要す然り民黨の政綱は純民黨運動の大主腦を説明して餘さゝれば也

如何なる代議士を撰擇すべき乎撰擧人の知る可きは此事也然り國民は眞に此事を知るを要す

（以上黒圏を附せし丈けの目錄を有する本書を全國の撰擧者就中演説者諸君に推選すること然り）

定價十二錢
郵稅二錢
本月中旬發行

發行所
東京市京橋區日吉町四番地
民友社

⊕特色……金丸販賣ノ銃器ハ實用裝飾共ニ完備セル輕便無比眞正ノ良器タリ

恭賀新年

日本一手特約輸入



生命財産ヲ安全ニ護ルニ必要ナル護身用ピストル銃ハ弊店ノ日本一手特約輸入ニシテ彼ノ世上ニ在リフレタル危險極ル普通ノ粗惡品トハ異リ一種特別ナル新形ニシテ機械ノ構造ハ堅牢無比其外部ノ裝飾ハ銀色燦爛トシテ頗ル美麗ナルノミナラズ錆ヲ生スル憂ナク旅行携帶等ニハ安全ニシテ最モ輕便ナルヲ以テ完全無缺ノ護身器ト夙ニ歐米諸國ニ聲譽ヲ博シタル米國有名ノ「ハールパート、プロス」社其他十數社ノ製造品ノ内精好ナル新形ノミ四十三種ヲ撰擇シ其價格ノ如キハ一挺價金二圓五拾錢ヨリ金貳拾五圓迄ニシテ該社同樣他ニ比類ナキ大廉價確實ヲ旨トシ懇篤ニ販賣致候間御購求之程希上候

●銃砲各種雛形精圖取扱說明付正價報告書二冊(百四十餘頁)ハ御申込次第無代價郵呈ス

●米國紐育ハルパート、プロース銃砲商會日本一手特約販賣

●同スミス、ウエッソン製銃會社特約販賣

●同ハーリングトン製銃會社日本一手特約委託販賣

生命財産保護之最良器

銃砲火藥輸入販賣免許商

横濱市本町二丁目廿一番地(電話百五十五番)

金丸謙次郎

是レマテ弊店販賣護身用ピストル銃ノ爲メ生命或ハ財産ノ安全ヲ得ラレシ諸彦ハ全國各地ニ於テ今ヤ殆ンド千ヲ以テ數フルニ至レリ就中有名ナル東京市會議員檜山鐵三郎氏ノ如キハ(事實ハ客年三月九日各新聞紙上ニアリ)背後ヨリ不意ニ拔刀ノ暴漢四名ニ切付ラレシ際一挺ノ護身銃ヲ以テ四回マテ連發シテ遂ニ彼等ヲ追散シ其生命ヲ全フスルヿヲ得ラレシハ弊店ピストル銃ノ生命保護ヲ托スルニ足ル精巧堅牢品タル好適例ナリ彼ノ外部ノミヲ飾リ機械ノ不完全極ル粗製品タリシナレバ何ンゾ克ク其防禦ノ効ヲ成スヿヲ得ン故ニ世上ニ在リ觸レタル粗惡恃ムニ足ラザル危險品ニ瞞着セラルヽヿナク堅牢確實ニシテ完全ナル銃器ヲ撰擇購求アランヿヲ

⊕特色……金丸販賣ノ銃器ハ如何ナル遠隔ノ地ニテモ手續最モ簡易ニ買取得ラル

婦人矯風雜誌

明治廿七年一月二日發兌

一部代價金四錢

○婦人矯風雜誌は發行以來非常の喝采を博して、玆に第三號を發兌す。

○是れ全く婦人の力を以て成る雜誌にして、日本全國各地に散在せる、禁酒矯風主義の各婦人會の、聯合して出版せるものなり。

○記する處は、家庭教育、衛生、文學其他一般の風俗の矯正を計るにあり。

○本號には、新年を祝するため『家庭小話』と題する面白き附錄をそへ、正月爐邊の話柄に供す。

○殊に本號には、日本女流第一の書家にして米國大博覽會にて非常の喝采を博したる野口小蘋女史の筆になる美麗なる鶯宿梅の圖あり。

○久保田米僊氏の門下の一人なる、婦人の手になる高雅なる富士の圖あり

◎社說には新らしき年◎慈善は誰れの爲めぞと題する論文あり◎人身賣買の慘狀と題する、我國の現に行わるゝ、醜風の、最も大なるものをかゝげ◎雜報には、生理學上より酒を論じ◎上杉鷹山公の廢娼論あり◎近世界に於ける、婦人の發明力と題するは、婦人が如何に文明の勢を助長せるかを悉しく書し、其他、一讀して感化せしむるクラッカイ夫人の傳◎及び我國婦人、道德の成り行きに關する、大切なる雜報◎改革家の本領と題する、増野悅興氏の演說等あり。

◎婦人男子に關わらず、世の矯風に志あり、家庭にて讀むを得べき淸潔にして、面白き雜誌を求めらるゝ人々は、必ず一讀を要する雜誌なり。

發行所　上二番町三十一番地女子學院內　**婦人矯風雜誌社**

賣捌所　京橋區出雲町警醒社　神田神保町帝國堂　神田神保町女學雜誌書店

松村介石先生新著

婦人の友

定價廿五錢　郵稅四錢

本書は女生が一生の方向を尋ねる緖編より筆を起し、美人論にて終ふ。論ずるところ廿有餘題。凡そ女學生とし、妻とし、母とし、敎師とし、記者とし、看護婦とし、獨身者とし、事業家として、學得修養すべき件々網羅して遺さず、要は婦人をして、萬界を通じて理想的たらしむるに在り。議論着々實際を穿つ。目下女界濛々霧深し、此書實に羅針盤たるべし

發兌元　東京新橋出雲町　**警醒社書店**

◎**速記法**　自宅獨習生**募集**　月謝二十錢　二ヶ月卒業

規則書入用の者は郵券二錢を投ずべし

◎東京下谷區徒町二丁目三十一番地　**速記學專修所**

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　垣田純翊

編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十七年一月十日發行

家庭雜誌第貳拾壹號

目錄


米僊



家庭雜誌第貳拾壹號

（明治二十七年一月十日發兌）

社説

愛度き新年

（健全なる家庭）

愛度き新年は來れり、何故に愛度き乎、愛度しと思ふは、則ち最も愛度きものにあらずや。



『元日や神代の事もおもはるゝ』ゆら〳〵と輝き渡れる朝日に向ひ、新たなる顏を以て、新たなる年を迎れは、此身は恰も淸淨なる、新鮮なる世界に入りたる心地こそすれ。

新たなるは、進歩の始めなり。一の新年は、則ち人の再生の時と知らすや。復活の時と知らすや。年と共に生れ更り、年と倶に新たなり。斯くして進歩も來るなれ、斯くして上達も來るなれ。而して幸福は最も多く來るなれ。それ新年は各人各個の誕生日と思へは、斯く迄愛度き日は、亦た何の時にかあらむ。祝せよや、喜へよや、愛度しと思ふは、則ち最も愛度き所以にあらずや。

人生の恐ろしき大敵は、退屈にあり、倦厭にあり。同しき仕事を繰り返せは退屈し、變化なけれは倦厭す。退屈すれは、人心何となく不活潑となり、倦厭すれは、人心何となく不愉快となる。不平も此より來り、失望も此より來り、窮愁も此より來る。個人にして此の如くなれは、個人の光明沒し、家庭にして此の如くなれは、家庭の光明沒す。光明なきの家庭は、不健全なる家庭也。

扨も難有きかな、新年は萬里同風、四海平等、千戶萬門

を見舞ひ、喜ばしき音信を總ての家庭に贈ることや。三尺の牀も、洒掃して梅花の瓶を安置すれば、何となく氣新らしく、一椀の雜煮も、滿家相對して喫すれば、何となく心勇み、羽子板の響きは、坐ろに少女の心を惹き、紙鳶の音は、遙かに小童の魂を半天の空に舞はしむ。

新年の新なるは、年の新たなるか爲めのみならず、年と倶に人の心の新たなるにあり。再言すれば新たなるは、進歩の始めなり。新なるは、活潑なるの源なり。新たなるは、快活なるの基ひなり。

諺に曰く笑ふ門には福來ると。大なる眞理此の中に存す。何故に笑ふ門には福來ると問ふ勿れ、快活なるものは、總てのものを同化して快活となすにあらずや。火勢の熾なるや、總てのもの皆な燃料たらざるはなし。靑松葉さへも、靑艸さへも、濕り勝ちなる薪さへも。乃ち水さへも火勢の炎々たるや、却て其の炎々を激するの媒となるにあらずや。福豈に獨り笑ふ門にのみ來らんや。但だ笑ふ門に於ては、總てのものを同化して、福となさすんば休まざる也。ミルトンの言葉に、極樂も地獄も皆な人の心に在りとは、則ち此の意味と知る可し。心快活なれば、極樂來り、心不快活なれば地獄來る。彼れより來るにあらず、我れより招く也。吾人は新年と倶に、總ての家庭に極樂の來らんことを祈る也、極樂を來たさんと欲せば、皆な舊年をして舊物を葬らしめ、新らしき心を以て新年を迎へよかし。心新たなれば快活なり、快活なれば幸福也。

若しそれ年來れども未だ新たなるを覺へず抔と、イヤに澄し込んで、苦勞の問屋となる人には、到底幾百年待てばとて、福ひは來るものにあらざる也。若し笑ふ門に福來らは、泣く門には禍ひ來る可し。泣きつゝ、打ち濕りつゝ、苦情謂ひつゝ、顏を蹙め、心を痛ましめつゝ、以て福の來らんことを祈るは、恰も林に入りて

鯉を漁せんとするの類ひ也。鯉は淵にこそあれ、林には居らぬ也。

世に健全なる家庭とは、其の家風の何となく優悠として鷹揚に、光明にして曇りなく、快活清新の空氣鬱勃たる中に、老幼男女皆な悦び勇みて、各その職分を樂み、和康樂易にして、相ひ暮らすを云ふ也。則ち新年は最も多くの福ひを齎らして、斯る家庭を見舞ふ也。而して斯る家庭とならんと欲せば、願くは新たらしき心を以て新年を迎へよや。

史談

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）三

急湍の上に淀みあり、尤も險しく終る可きローラン夫人の生涯はいとも平和に始まりぬ。

フィリポン孃ローラン夫人となりて二年、擧けし一女の已に物言ひ習ふ頃、夫ローラン里昂市の製造業監査官に遷り、一家里昂近くのヴィルラフランクの市に移りぬ。ローランの學識人物は此地方に於ても大に尊敬せられ、ローラン亦里昂の衰頽せる製造業恢復の策を講じ商工業上の論文を公にし、此地方の錚々たる有志家として名聲日に揚れり。而してローラン夫人は夫の事業に於て片時も不可欠の幇助者たり、夫の書齋に在て筆記書寫添削注意に多忙なるの外、幼女の養育、家事の料理に閑暇少なく、稀に暇あれば、かねて好む博物學植物學などの講談を聞き、妻として母として尤も摸範的生涯を送りぬ。ヴィルラフランクより四五哩離れてクロスと云へる里にローランの所有にかゝる田舍家ありて、ローラン一家は年の大半を此處に送りぬ。此處にありてはローラン夫人も全く百姓の妻となれり。葡萄の收穫、砂糖漬の世話、花園の支配、近在病家の

見舞、晴日の散歩、雪夜の讀書、家族近隣よりは愛敬せられ、夫を助け女を愛して日又日、樂しく過ぎぬ。此際ローラン夫人其友に書を寄せて其日々の生涯を報ぜる中に左の句あり、曰ふ、此書を認め候折ふし窓外には雪チラ〳〵降り居、煖爐には火熾に燃へ、爐近く坐して夫は書き物致し、女は編物致し、而して妾はおり〳〵筆を停めては夫と語り、女の編物を監督いたし候」と。要するにローラン夫人の一生に於て尤も樂しき時期は、此四五年の間なりき。

然れども運命はローラン夫人の平和なる家庭に天年を終ふるを許さゞるなり。佛蘭西の歷史はローラン夫人の名を其卷中に大書特筆せずんば休せざるなり。舞臺は開けぬ、革命の舞臺は開けぬ、地方小官の妻をして赫々の光を千載に放たしむ可き佛國大革命の舞臺は開けぬ。

ローラン已に里昂に移りて地方有志家の名次第に揚るや、同地方に於ける然る可き有爲の士は多く其友となり、當時巴里の一新聞記者にして熱心なる政弊革新家たる將來ヂロンヂスト派の首領ブリッソオの如きもローランの書を讀みて書翰を寄せて交を締し、斯くて巴里の空氣は此等の導管によりて平素共和主義を懷けるローラン夫妻に傳はり、時勢いよ〳〵急にしてローラン夫妻の心次第に躍りはじめぬ。

左る程に佛國は路易十四、十五兩朝に亂播せる禍種已に熟して溫柔の路易十六世はまさに其父祖の餘殃を刈る可き命運となり、火山大破裂の前此處に一縷の煙見へ彼處に陰々の響聞ふる如く、佛國到る處はや大亂の萠し見え來りぬ。新王の溫和は此破裂の勢を和ぐる能はずして却て之を激しぬ。賢宰相ネッカアは禍を未發に制せむとして能はずして退きぬ。巴里は次第に燃へ立ちぬ。國王の優柔、內廷奸臣の擧動、改革の因循、不景氣、饑饉、人民の忍耐を試む可きもの重なり

〳〵て千七百八十九年バスチール牢獄破壊の凱歌と共に革命は初聲を擧げたり。

バスチール牢獄破壊の凱歌はローラン夫人が革命の戰場に出陣の喇叭なりき。此時に到るまで夫人は局外より時勢を見て、何事も思はしく運ばざるを憾みぬ。チッカアの擧動も、國會の擧動も、夫人に一の滿足を與へず。夫人は唯「亞米利加を祝し、バビロン河畔に坐して哭し、時節を待より外はあらず」と、嘆息せり。バスチール牢獄の陷るや、夫人は踴躍して起ちぬ。革命已に生れたり、平素の夢想を實行す可き機會今を措て亦何時かある、今は唯革命を生育し、息の續かん限り平生の主義を説敎す可きのみ。ローラン夫妻即ち革命の傳道師となり、あらゆる手段を利用して革命の思想を弘布せり。ローランは里昴倶樂部に入り、非常に盡力し、里昴に於ては革命黨はローラン黨と稱せらる〻に到りぬ。ローラン夫人は手に入る限りの革命的小冊子を近所近在に霰の如く撒き散らし、「人の權理」を印刷したる懷中手巾を配りあるきぬ。友人ブリッソーは巴里に「愛國新聞」を起し、友人シャムバニーは里昴に「里昴日報」を起し、革命の氣運を皷すれば、ローラン夫人亦淋漓の筆を揮つてしば〳〵兩新聞に寄稿をなしぬ。

革命起つて十八ヶ月間、ローラン夫妻は革命論者の尤も急進なる者なりき。ローラン夫人は唯其理想を目がけて一直線に進まんとせり。騷擾一揆、夫人は是を以て人民天賦の權とし、寧ろ其の足らざるを憾みぬ。夫人は革命の進歩を手ぬるしと思ひぬ。バスチールの陷りて二週の後、ローラン夫人は巴里の友人ボスクに書を寄せて曰く、君等巴里の革命家は小兒のみ、君等の熱心は唯藁火のみ」と。



科學

冬の生命（中）



若し夫れ苔の生涯に就ては更に面白きものあり、苔の緑なる色がかび草の灰色に比して鮮やかなるが如く其の生涯もまた幾層の面白味あり。

諸君若し面白くして複雜なる彼等の生涯を知らんと欲せば、先づ緑苔の一片を取つて仔細に之を吟味せよ。彼等の集まつて群をなすや、其の軟くして厚きこと上等なる段通も及ばぬ織地の如くに感せらるゝも、其の一莖を取つて之を引けば恰かも糸巻より糸を引くが如く容易に、少しも他を害することなく個々別々に引き話すを得べし。此の麗はしき群を組み成す苔の中には一本の莖を葉もて包み巻けるあり、數本の枝に分れたるに葉の繁り生ひたるなり、其の形には種々の別あれど、如何なる小さきもの細きもの、容易に見分け難きものにても、孰れも相應の根を有し葉を有し獨立して生存し得るものにあらざるはなし。最も大なるものは時として最も小さきものの結合より來る。彼等の強き結合力は時として世界の最も誇れるものをして色を失はしむる程の美景壯觀を作り出すこともなきにあらねども、其の一個々々を引き離せば、如何に細微なる生存物なるよ。即ち莖に比すれば細き絹絲も其の細きを稱するに足らず、其の葉は細き筆の穗先の如く小さく柔らかくして透明なり。彼等の一個々々はかくも細微なれども最も密に集まり重なりては厚く柔らく彈力ある緑の敷物となつて我等を園の中、森の下に迎ふ。結合は難き事なり、彼等は各々獨立の生命を有ちなか

ら、如何にしてかくまでも強き結合をなす乎。其故は彼等の繁殖甚だ速やかにして新生の莖常に日光を充分に受け得る地位に延び出づるによるものありと云へども、重なる所以は、彼等の莖は常に全く分離せず、其の發生の時に於て同一の根より出で來るにあり。

新しき苔の生育しつゝある森の中に入り、注意を加へて地の面を視察すれば、速やかに生長しつゝある苔の下に、池の水に浮べる綠色の垢に甚だよく似たるもののあるを見出すべし。顯微鏡の力を假り更に注意を加へて視察すれば、此の垢の如く海綿の如きものは、結ぼれたる綠色の絲筋の群なることを知るべし、而して此の絲筋は、細胞の列なりて組成したるものにして、彼方此方に蕾の生ひ立てるを見るべし。



これ即ち『プロトネマ』と稱せらるゝものにして、苔の祖先なり。其の形を取つて發生するや、直ちに生長を始め、甚だ速やかに延び廣がり、總ての細胞皆な力を合せて水を吸ひ空氣を吸ひ芽を出し、之に莖を與へ根を與へ、生長せしめ膨脹せしめ、次で葉を出して繁り重なり滑らかなる苔となる。かく生長する間に、最初の絲筋は其の得たる滋養物を悉く莖の爲めに獻じ、彼等の生育の確かになりたるを見て死す。かくの如くして同一の根より出でたる無數の莖は強き結合の中に獨立の生活を營む。

生活は難き事なり、此等の細微なる莖は、營養の母なる絲筋を失ひたる後、如何にして獨立の生活を營み得る乎。彼等は根を有すれども、其の力は弱くして彼の植物に於けるか如く、全躰の爲めに營養分を吸ふに足らず。されば彼等の生活し得るは、只だ總ての分子の力を合せて働らくによるのみ。前にも說けるが如く苔の全躰はかの草の綠色細胞の如き柔らかき細胞を以

て組織せらる。此等の細胞は他の高等植物の葉に於けるが如く厚き皮を以て包まれ居らず、皆な別々に其の營養分たる空氣と水とを吸ひ得る力を與へられ、之をなすに適當なる地位に置かれたり。

彼等の集まつて葉をなすや、恰かも單細胞植物の水に浮ぶか如く、卵形の細胞、各個別々の働をなし得る餘地を存して集まり、中間



苔の葉（顯微鏡にて見たる）

にある細長きもの丶力によりて互に結び付けらる。其の莖を組成するものもまた同じ。此の如く苔を組成する細胞は單細胞植物の如く皆な一人前の仕事をなし、獨立の生活を保ち、而も單細胞植物の如く孤立の生涯を送らず、結合して根を有するが故に、其の利を享けて上に向ひて生長することを得、かくて充分に日光を吸收することを得る也。

苔を組成する各細胞は皆な獨立の生活を有つ、故に彼等は如何に切斷せらるゝもよく其の生命を失はず、如何なる部分よりもよく芽を出し、絲筋の塊となり、直ちに根を下し、莖を生し、葉を出し、根より根を下し莖より莖を生し、葉より葉を出し、毫末の塵より出て丶廣き森の下蔭を蔽ふに至る、而かも最も美はしき最も柔らかき敷物を以て、而も美はしきもの丶乏しき冬の日に於て。

苔の子供とも云ふべく、親とも云ふべき綠色の絲筋は、莖の生育確かなるに至つて枯死し、富饒なる肥料となる、故に彼等は此の肥料によりて最も健全に最も美麗に繁殖することを得、而も美はしきもの丶乏しき瘠地に於て。



水中の生存競爭

小童若しくは阿孃が何か見物に行かん事を願ひて聞かれず、却て厭やな課業の復習を命ぜられし時、室の隅にてぶつ〳〵怒つて、疊の埃をひねつて居る時、若しその胸板を硝子と取り更へて、胸の中をすつかり見通す事を得たらんには、そのむや〳〵としたる胸には『ア、私が鳥か魚であつたら、すきな所をかつてに遊んで、此樣ないやな勉强はしなくても能いに』と、人間外の世界をうらやんで居る處がすつかり顯わるゝならん。然れども魚も鳥も、決して氣儘計りをなして、一生を送る事の出來ざるのみか、油斷をすれば、何時强よき者に餌にせられて、生きて居られぬかも知れぬ、恐ろしき生涯を度りつゝあるなり。鳥の事は後廻しにして先づ魚の世界を一見せんに水の中には美麗なる世界あり、山もあれば、川もあり。木もあれば、花もあり。我が世界と少して變りし處はあらず。人間が毎日彼處此處を走つて衣食をなす如く、魚もじつとしては何も食せられず、又うつかり食すると、人間の釣針に掛るの恐あるが故常に注意して、智慧一ぱいを働かして、毎日水中の山やら、川の中を歩き、何を食するものゝなき時も、錢を出だして購なふ事を得ざるが故に、毎日己が力の限りを盡して、或は友人と歩るき、或は一人にて歩るき、うばも小守もなければ、生れ立てよりして、自分で自分の生活をせざるべからざる苦しき生涯を有せり。

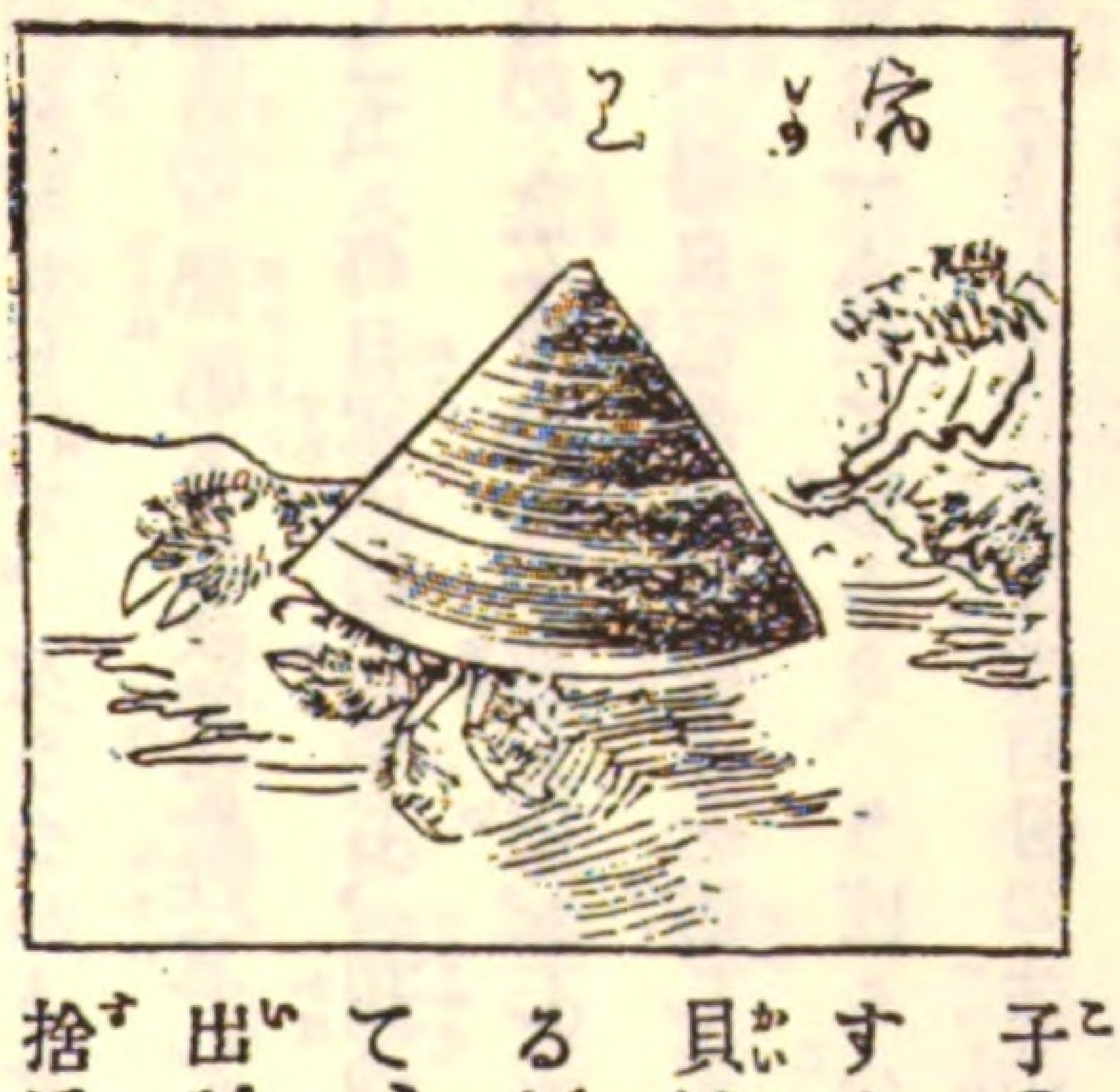
然し又た氣樂の方より云へば、隨分氣樂なり、水上を走せつゝある船が誤つて破れ、人間の食物が魚の世界に入るや、挨拶もなく禮も云わず、何時にてもせつせと食し、會々人間の屍の沈み來るが如き事あらば、これぞ棚から牡丹餅の落ちし如く、人間の世界にて云へば、雁か鴨が、獨りにて落ち來りしが如く、近所隣の

者と寄り合つて、懇親會を開らき、食し終ば自然の布きたる温かきふとんの中に、明る迄休み、こゝの砂の夜具が寒くば、彼處の藻草の夜具と更へ、この藻がいやならば、彼處の岩の間に眠り、衣物の洗濯もいらねば、食物の料理の煩ひもなく、目當り次第の食物を食して飽きたれば休み、饑うれば求め、此の住家にあけば遠き海に引き、新らしき適當の住家を求め、それも好かねば、一生旅行してもし氣候さへ適するを得ば日本より米國、米國より南極、南極より北極迄、食料をも携へずして無賃の旅行を爲すを得べし。我等が炬燵を擁するこの寒天に、魚は如何なれば冷めたき水中に住みけん、さぞ寒むからんと心配する時、魚は却て笑らへり。風の吹き荒て、砂の飛び、雪の降り、時に生命さへ失なふに至り恐ろしくして寒き世界に住める人間は、如何に愚なるよと。

水中の動物は住家を造るの必要なきかはりには、己に適したる住家なき時も、之を造るとを得ざるが故に、不自由を忍ばざるべからず。その最も住家に困難らしく見ゆるは、宿かりなり。

宿かり

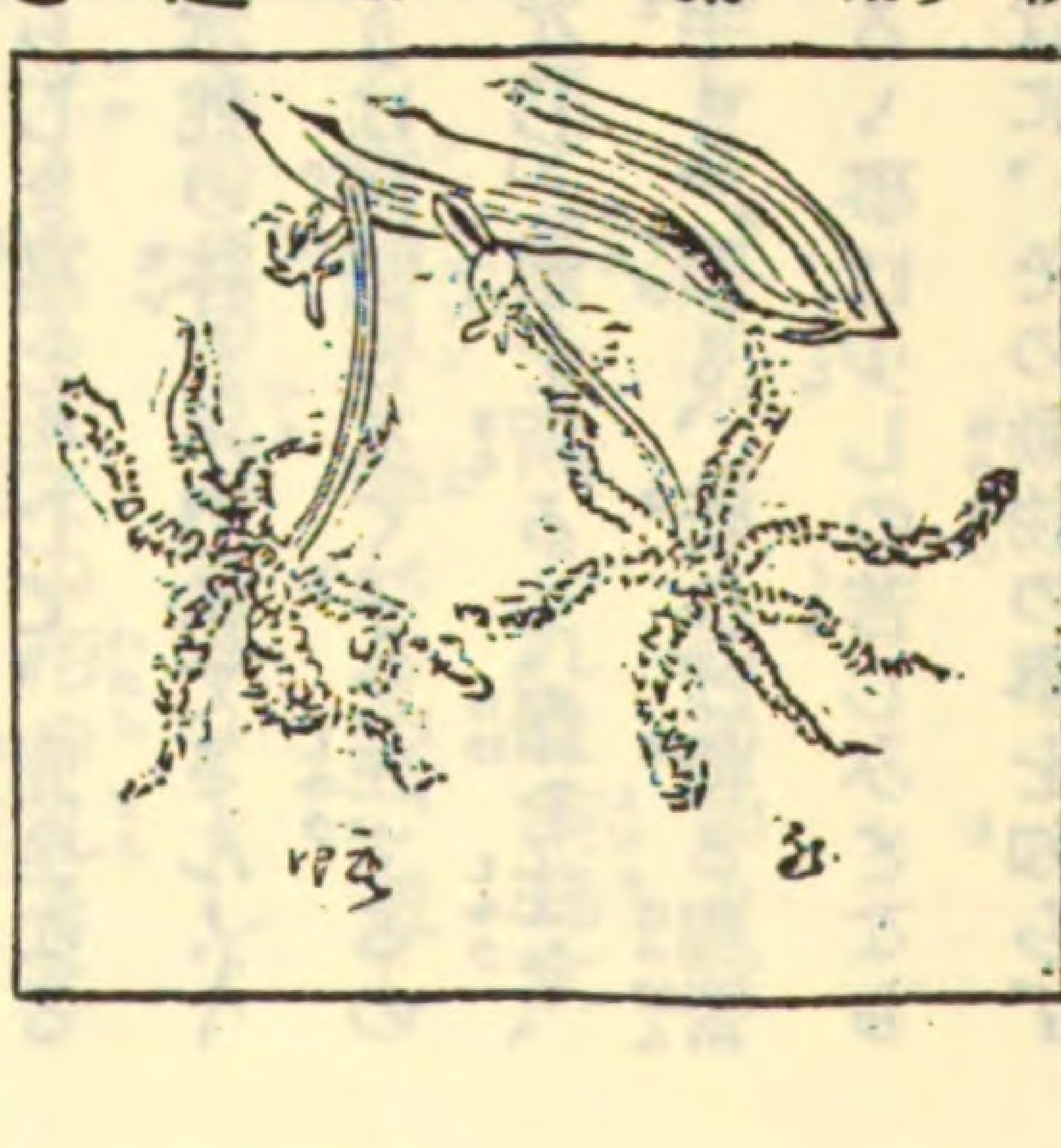
宿かりは何れの海邊にも、多く見る處の蟹にして、我等が海水浴に行く時、背に貝を負ひたる蟹の、海邊をはい廻れるは度々見る處なり。その赤坊の時は、螺の子の如き形を爲せるが成長するに及びても、その背の貝は其躰に應じて成長せざるが故に、處々を馳せ廻りて、己れに適したる貝を見出だし、見當れば背の貝を捨てゝ平氣の顏にて他の貝に入りて住ふなり。我等が借家を探がすに、兎角適當なる家少なきが如く、宿かりも己れの尾を挿みて試む



るに、或は大に過ぎ、或は小に過ぎて、丁度適當したる貝を見出すは容易にあらず。二個の家無し蟹が一つの溜りに出合ひて、一つの貝を互に爭ふ位ひ、面白くおかしきものはあらず。毛のはへたる小さき剪刀を出し、下駄直しの用ゆる錐の如き足を以て、互ひに大戰爭を始め生命のために住所を要する事は忘れて躰の破るゝも、腹わたの出づるも知らずして、互に戰爭し、憐れ一邊の死に果つる點は、爭鬪を止めず。勝ちたる蟹は、その塲にて敵の死躰を舌打ち鳴らして食し終り、さて新らしき宿に入り込み、一度入りては人の手もて引き出ださんとしても中々出でず、頭と尾と半分に碎かるにも尙ほ出でず、此處に身の今一層長ずる迄は、安全に生活を爲すなり。時に貝を有しながら、二個集りて爭鬪をなすとあり。こは互に敵をその貝より引き出して、已が食となさんが爲なり。海邊に行き給へる人は、その二三個をひろひ、席上にて、互ひの喧嘩を見るも亦た面白し。此は三四日水上にありても、尙ほ依然として生存するを得べし。

水蛇

下等動物の中に、水蛇と云へる實に奇々妙々なるものあり。これは千七百〇三年に始めて發見せられたりしが、その躰の大さは大差ありて少しも一定せず。通常池或は溝等の眞水の中の藻等の吸ひ付きて、用事のなき時は、長き一本の棒となる。口は多くの鬚の卷き込みたる眞中にありて、餌を取る術の早き事、さながら猫の鼠を捕ゆるに異ならず。捕へられたる虫等は、又立ろに死するを常とす。餘りに其の殺し樣の早ければ、或る人一種の毒を有せるにはあらずやと疑ふに至れり。その繁殖の法に至りては、



實に不思議と云ふべきものあり。

夏の頃に至れば、瘤の如き、腫物の如きもの、幾ともなく水蛇の躰の表面に出來ると、見る中にずん〳〵と長く丸くなりて、二日も立たば先きの瘤は、各々純然たる一個の水蛇と生長し、手當り次第近邊の植物に取り付きて、母躰と同じく、或は手を擴げずして食を求め、或は長く棒になりて、少しも異なる處なき動物の生活となす。

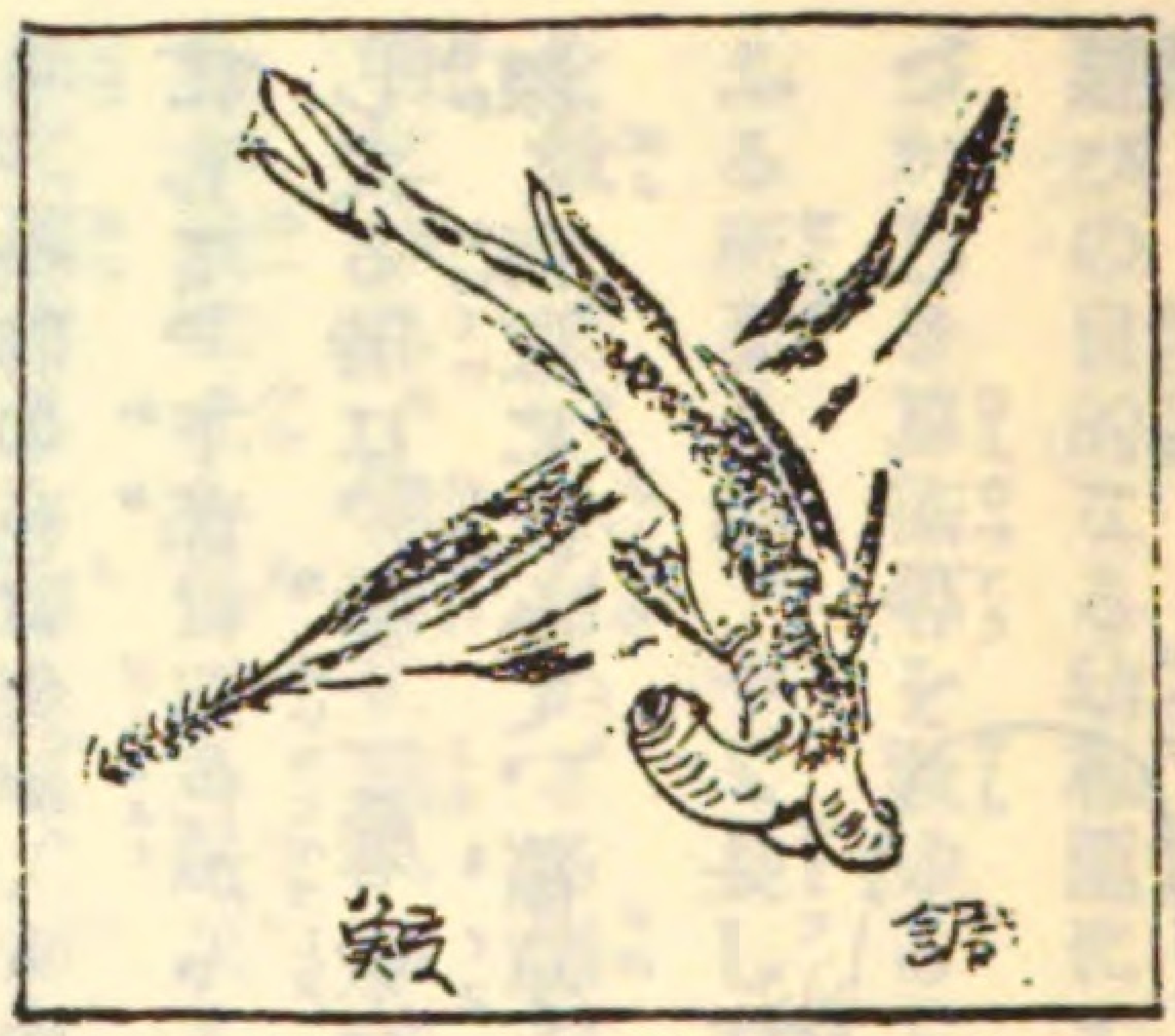
温かき時候にはその生長非常に速やかにして、見る間に、子は孫を生じ、孫は子を生じ、又た子を生じて、數日の中に一つのもの數十となり。それさへ已に不思議なれど、手製の繁殖法に至りては、實に天地間の絶妙技術之れに過ぐるものなし。

今一個の水蛇を取りて、兩手にて引きさかんに、右の手にあるもの、左の手にあるもの、各々完全なる一つの水蛇となりて、生活を始む。二個位は何の物かは、たとへ之を四十個となすも、五十個と砕くも、一切は完全なる一個の動物となりて、何の不自由なく生活を始む。又た一匹の頭を切りて、他の一匹の頭に付くるに、二匹の頭は一匹となりて仲能く生活し、又切られたる尾は、見る間に新らしき尾を生じて、完全なる一匹となる。若し一匹の水蛇の躰を小刀にてさん〳〵に疵付くれば、その處よりは幾個となく子を生ずるのみにして、何の苦しみもなし。鬚を斬るも、鬚を生じ、口を斬るも、口を生し、手も、頸も、斬れば斬る程繁殖するの助となり、斬らるゝ事は少しの苦しみとならずして、反て繁殖するが故に、その動物の事を知らずして、之を滅せんと欲して、之を斬るが如きことあらば、これぞ毛を吹きて疵を求むるのみ、反て多數となるに至るとは、如何に奇態なる動物ならずや。

鋸鮫

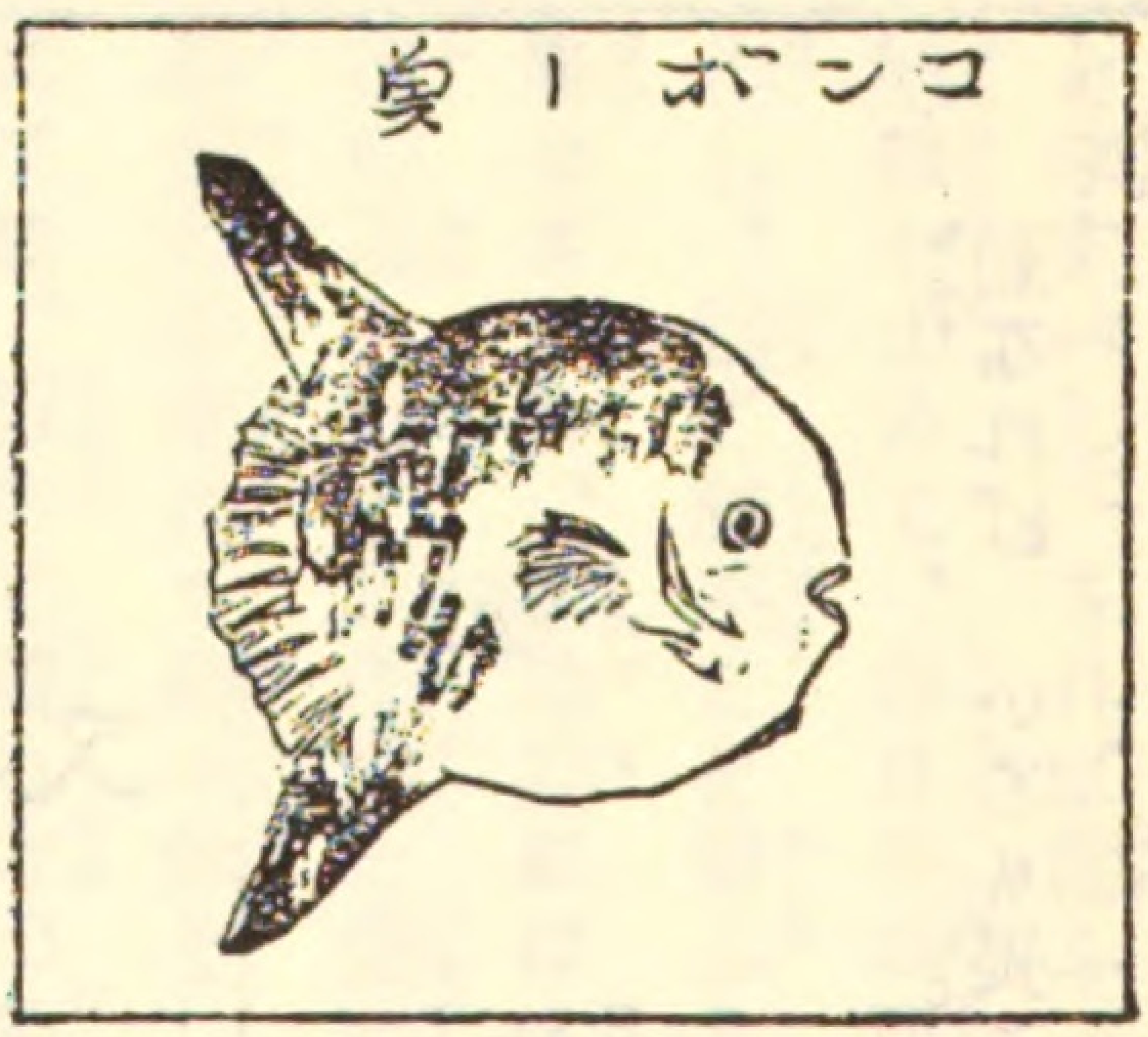
鋸鮫は聞くも恐ろしく海中の焔魔とも云ふへき怪魚

なり。之はふかに似たる猛悪なる魚にして、灰色の躰に黒色の頭を有し、微細工の如き丸き鱗を有し、躰の長は實に一丈八尺餘のもの少なからず。圖に見る如く鋸の如き無數の鋭とき、齒は脊の中央の骨より並びて生じたるが、この魚勇悍なる魚にして、鯨の如き大魚をも少しも恐れずして、突進し、大なる魚の群集せる中央に至りて、その鋸を振り廻す時は、如何なる魚と雖も、一撃の下に微塵となりて死する也。又たその頭の下部には、奇妙なる器械ありて、石にても、貝にても、砕かんと欲する物を見れば、その器械にて打ち砕きて飲むに、咽を通る迄には美事粉々になりて胃に下るなり。南極北極の氷の中にも、炎天焼くが如き赤道直下熱海中にも、温度にかまわず生存する魚類は、多くはあらず。鋸鮫のみは如何なる熱度にも、如何なる冷度にも、少しもかまわず生存繁殖せり。海中の怪物は獨り此魚のみに止まらず、されば、弱きものは何時、強者の食とならんも計り知るべからざれば、常に戰々競々として日を送るぞ憐れなり。



翻車魚

形の醜くしてその容のおかしき、コンボー魚の如きは殆ど稀なり、これは英語にて大陽魚と呼べるが、蓋しその皮の色のつや／＼しく光りたるとその形の丸きとに由りて、名づけるなり。此魚は温たかき海中に多く生殖し、その肉の白くして美味なると、その油の大口魚の如く、多量なるにより、



漁師の好んで捕ふる處なるが。時には溫かき海上に死せるが如くして、横向となりて、浮み流るゝことあり て、漁師の易すく捕ふることを得ることもあれども、時には鯨を捕ふる時に用ゆるモリを投げて、之を捕へんとするも、その力の強くして屢々漁師を驚かしむることあり。全躰の色は黒がゝりたる鳶色にして、上部は黒色にして、下部は銀色かゝりたる灰色なり。此魚の成長したる時は、疊一疊敷位の大となるが、荒波の時は深く海底に沈みて、藻草を食し生活すと云ふ。



文藝

鶯宿梅

花のや主人

勅なれば　いとも畏こし。

鶯の
なれにし宿の　香をとめて、
ふりにし昔　しのびつゝ、
賤が門邊に　來啼くなり。
賤が簷端に　來啼くなり。
梅の花　散りにし跡も、
久方の　春の光の　殘るらし。

家政

小兒教育の注意

遊びの目的なる幼稚園にて、意味も解からぬ唱歌、むづかしき算術等を敎ゆるとは、已に心ある人々の憂ふる所なるが、やゝ長したる男女の子に過度なる學問を敎へて、心付かざる者はなほ甚だ多し。これは文明につれ、開化に隨かひ、學問の種類も多く、度も進むが故に止を得ざる結果とは云ひながら、一生の幸不幸に關するを知らば、如何にも注意すべき問題と云ふべし。

危險なる結果は、實に過度の勉强より起る。危險とは即ち心中には、未熟にして不消化なる思想を得、肉身上には、最も感じ易き鋭敏なる小兒の腦中に、亂れたる、繁雜なる勉强をなさしむるにより、腦の過勞を來し、或は運動の不足より胃病を起す。

元來小兒は敎へらるゝ上は、之を忘れざらんとを欲し、全じ組の者に劣らざらんとを望み、父母も又た之を勵ますか故に、狹き腦は之がためにかきまわされ、思想も之がために亂るゝは止むを得ざる結果なり。

或る醫學士は云へり、女子十四歲より十五歲の間は、最もその發達上に注意を要する時にして、此間に過勞の學問をなして、健康を害する時は、實に一生の不幸を來すべし。されば能ふべくはその一年間は、學課の勉强を止めて、每日平均三四時間は乾燥なる廣野に散步し、腦と神系とを養ふを大切とす。若し全く勉强を廢せざるも、此時期には大に學課を減じて、學校の往復の道を行くに運動を促がすは勿論なれども、勉强の時間の中間にも時々休ましむべし。米國の私立學校等にては、習字と讀み方の外には、三課の種類の學問の外は爲すべからずてう古き規則に隨ひて之を實行せる

もの多しと聞きけるが、之は善き規則なり。我國の或る學校にては、幾何、代數、經濟學、畫學、歷史、敎育、地理、生理、位は一時に學ばしむるとあり。殊に婦人は修業の年限短かくして、學ぶ所廣きが故に、男子の六七科を學ぶ間に、婦人は簿記、裁縫、唱歌、英習字、若しくは茶の湯、生花等に至るまで一時に攻るが如くして學ぶが故に、一週間に一回、或は二回位の度數を以て學ぶ者さへ出で來りて、その腦中の混雜云ふべからず。故に女學生の顏色は、大てい靑ざめて、腦病ならざれば胃病の者多し。勿論運動を勸めざるにあらざれども、或る國王が人民の饑へたるを見て何故に彼等は米を食はざると云ひしが如く、運動に十分の時間を與へずして、運動をすゝむるも詮なきとなり。』勉强は一課を修めざればとて、一生の片輪とはならざれども、腦を痛め、胃をそこなふ時は、一生の不幸、一生の不具者となる。眞に智育の發達を望む人々は、殊更躰育に心を注ぐ事肝要なり。

◎躰育にはまた注意を要する事は、辨當の事なり。或る家の小兒は、當年六才になれるが、前年より幼稚園に通へるも、辨當を食する時は直ちに胃を害し、三日と續けて行く時なしと云へり。强き者には害の目に見ゆと少なしと雖も、その害する所は矢張仝しきなり。學校に寄宿するもの、或は家に近き人には、溫かくして滋養ある食物を食するを得べきも、程隔たりたる所より通學する人々は、鷄卵にても半熟なるは、道にて溢るゝの恐れあれば、不消化と知りつゝも、堅く茹ざるべからず。之に加ふるに飯はぼろ〳〵としてこわく、且つ冷めたくして、其結果は、顏色惡しく、病身となる。故に眞に敎育を重ずる學校等は、學校の食料を安くして、通學生に分ち、自宅持參の辨當と價異ならざる、滋養物を與ふることを勸むるをよしとす。

◎智育躰育元より大切なり、されど德育の大切なるに

は若かざるべし。德育なき人は、幹の曲りくねりたる名木の如く、たとへ幹は健康に生長し、枝は智慧を出して、太陽の光線を吸ひて成長はなすと雖も、折角の名木を細工にも用ゆる能わず、空しく火中するに至る、人にして德なき者もまた然り。學問は秀で、躰は壯健なりと雖も、その人物の信じ得べからざるがために、名木の働きを爲さしむる能はず、遂に好地位を得ずして、一生を空しく怨みの内に終るに至るべし。

◎今日の家庭にて憂ふべき一の傾きあり。こは敎育なき父母の間に生れたる子女が、敎育を受くるに隨がひ、父母を以て談ずるに足らざるものとなして、相手となさず。父母も己が子供は賢きものと思ひ、所謂お言葉御尤にて、思ふがまゝに育つるが故に、父母の威信、輕くなりて、父母の言葉に從はざるのみか、己が考へ通りを行ふが故に、遂に過つたる道に落ちることあり。たとひ高尚なる敎育なき父母と雖も、子供が父母に隨ふ間は、大なる過ちはなけれども、之を離れて氣儘をなす時は、もはやその軌道よりはづれたるなり。殊に女子が父母を蔑ろにして氣儘になりたる時は、殆ど鹽の味を失ひたるが如く、太陽の光を失ないたる如く、何の使ひ道もなきに至る。

世の父母は子供の事のみを心配すれども、子供に對する親の心得も中々肝要なる事也。

一家の平和は誰の破る所ぞ

一人の不平家家にある時は、十人の家族共に不平となり、一人の癇癪持ち家に住まば、家內擧つて不愉快となる、不平癇癪は傳染病の如く、人より人に傳わるものにして、此く不平の傳わる如く平和快樂も亦た傳わるなり、故に心中平和なる人の邊に居る時は、己れも心平和になり、知らざる間にその感化を受くべし、去れば

一家を平和にし、一年間を幸福に過ごさんと欲せば、われ癇癪不平をおさへて起さゝるを要す、癇癪も不平も、己れ自分の心を制するにあらざれば、人より如何とも成し得べきものにあらず、又た自分にておさゆるにあらざれば、たとひ人なき世界に移住するとも、不幸はつねに身に隨ふなり、『ことさらに世はすてずとも、靜かなる心の奥を隠れ家として』とある人は云ひけるが、徳を修むるにはことさら奥山に入るに及ばず、ことさらに世をすつるにも及ばず、靜づかに心をおさへて、所謂心中の戰爭に打ち勝つにあり、左の談を讀む時は、不平は如何にして起るか、如何にして治むるかを知るを得べし、

癇癪老人

或る處に癇癪の老人ありて、朝起き出づるより下女の雨戸の明け樣がやかましゝと怒り始じめてより、食事の加減のよし惡しより、火鉢の火の入れ樣、掃除の仕方妻君の返事の聲、息子の笑ひ樣迄見ると、觸ると、怒りの種子ならざるはなく、事々に頬を火にし聲を荒らぐるが故に老人の留守の時は、家の内何となくのどかになりて、笑ひの聲も聞こゆれど、老人の歸るを合圖に皆の眉はひそみ、家内恰かも五月雨時のしめりの如く、不愉快にして面白くなくなり、家に出入の小者まで、臺所へ入り來るも先づ小聲にてごいん居は御内ですかと聞きて、後内へ入り來るに至れり、隠居に對面あたりとて、別に叱からるゝ事を爲せしにもあらず、又た必ず叱からるゝとも定まらねども又何か小言の出でわせぬかと、氣かゝりにてかくは問ふなり、

さて此の老人は自分もその原因は分からねども、何となく不平に堪へざれば、こは全く浮世の交際をなすが故なりと思ひて、この世を避くるにあらざれば、到底

この不平はおさへ得ぬことと思ひつめ或る日一個の竈と、數俵の米と、茶碗土瓶各々一個づゝを携へて程隔たゝりたる山家に隱遁せり、或る日土瓶を携へて谷川に行き水を汲みけるに、道にて躓ずき水を溢しければ、老人は少しく癇にさわりしかど、再び川に行きて水を汲みけるに又た過つて之を覆へせしかば、兼ねての癇癪はくわつと起き、土瓶を取つて地に擲打てぞ破しけり、さて水入れを破りければ、老人その日より再び浮世に歸らざるべからざる事となりしが、つら／＼思へらく我が不平は浮世の交際のためなりと思ひしに、かく山中に住ひしもなほ怒る樣ならば、怒は全く我の心の中にありと、それより家に歸りてより、全く怒らざることゝなれりとぞ、

長壽を欲する人あらば

消化食慾を感ぜしめ、氣力をおとろへしめ、頭をにぶくするの名法は、長き眠にあり。長壽の藥は新聞に時々見るとあれども、必ずきゝめある眞藥にして、無代價にして且つ何れの僻地にても買ひ得べき藥は、多くはなし、早や起き、早や寐ぞ、その藥なる。これは決して空論にあらず。古しへより長壽の原因を取り調べしに、早や寐、早や起きに由らざるはなし。

ジョルヂ三世と云ふ英國の王は、或る時多くの醫者を一人づゝ召びて、如何にせば長いきをなし得べきやと、獨り／＼に問ひけるに、各々の答は皆早起早寐にありしと。

英國のシヤンタムと云ふ人がその子に遺せる敎訓に云ひける樣『余は汝の寐所の壁と、汝の臥床に書かんとする事あり、そは汝もし早起をなすにあらざれば、何事にも成就する事なし。汝もし汝の勉強時間を別に定めをかざるが如き事あるか、或は勉強時間を人に妨げらるゝ事ある時は、汝の握りたる大切なる一日は、汝

の手より逃げたると同じくして不利益、不愉快は、自から招く所とならん』と。

頰青くして病身なる人は、藥屋へ行く前に、早や起をなして、日當りよき原野を運動すべし。食事は之れよりすゝみ、頭はこれより快よく氣分はこれよりよからん。世話しきをかこつ人は先づ早起を試みよ。最も働くによき意外の時間は眠むりて知らざりし時間の中より出で來りて、汝の事業を助すけん。

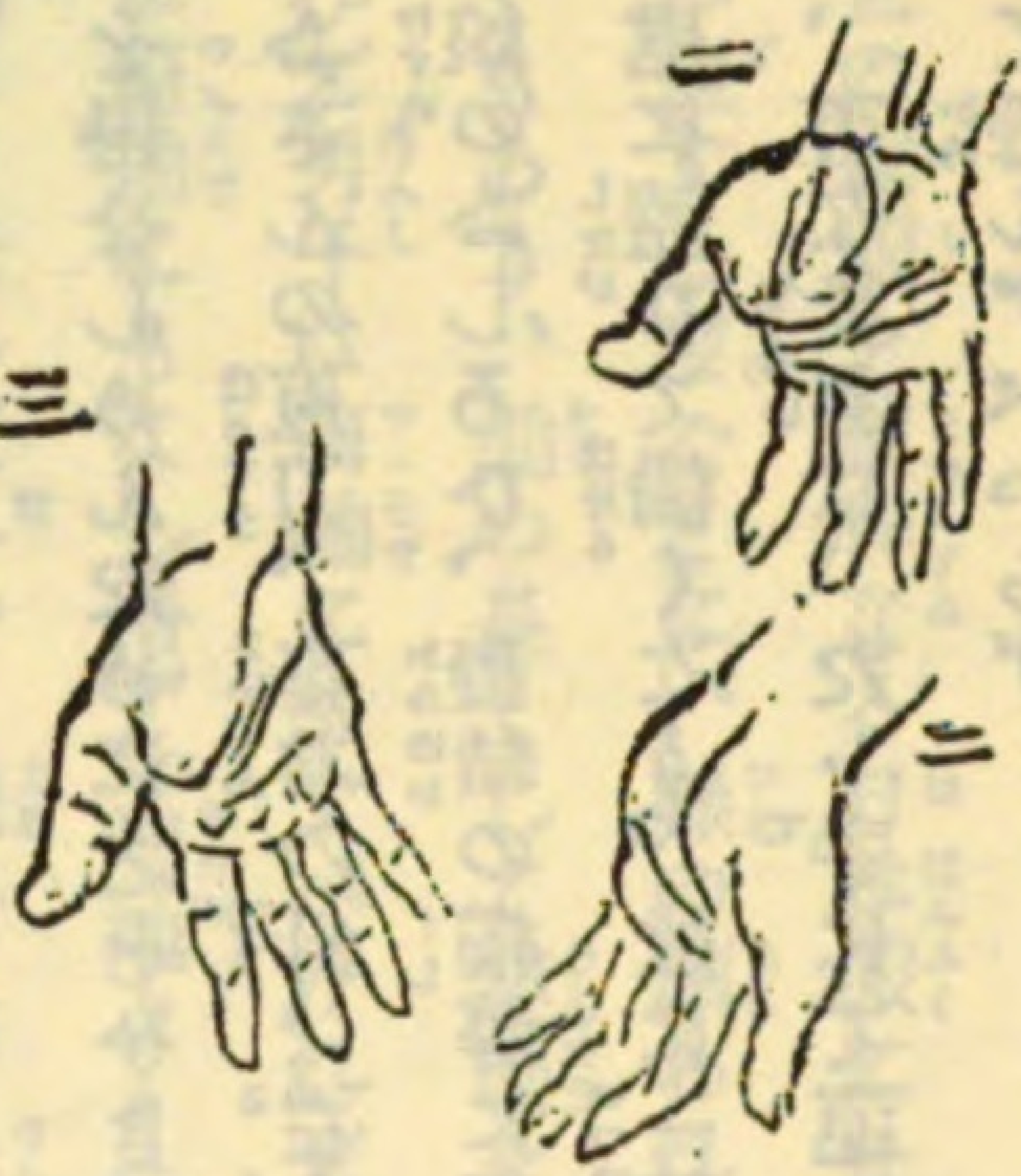
今朝六時に起き出づる姉と、八時に起くる妹とを比らべんに、その人四十年生存すると假定せば、姉は妹より二萬九千時間、即ち三年と一百二十六時間の利益あり。妹は姉より三年と一百二十六時間の損あり。兩方差し引く時は姉は妹より十年の利益をなすの勘定なり。

世話しき人が、もし十年の長日月を不意に得たりと假定せよ、彼の事業は如何計り安樂に爲し得べき。もし生活に困難なる人が、十年の日月を得たらんには、幾許の手仕事は財政を助すけしぞ。學生が十年を得たらんには、幾冊の書を讀み得べき、もし著述家、改革家、宗敎家等が、各々十年を得たらんには彼等の事業は延び、彼等の喜びは如何ならん。之を思へば僅かの怠惰根生のため貴重なる日々の些時を、無益に失なふべきにあらざるなり。

手の話

熟つら四肢の用を考ゆるに目は他より物の形の入り來りて始めてその用をなし、耳は音のありて後之を聞きわけ、鼻はたゞ外物の通り路たるに過ぎずして、體の働きは多くは消極的なる中に、手のみは獨り積極的にして、頭の掻ゆき時は之を掻きて力をそへ、腹のすきたる時は進んで食を造りて與へ己が欲せざるものは之

を防ぎ、殊に盲者の手、唖者の手、聾者の手に至りては、手は耳、目口の三役を兼務、耳は聞くまじと思ふ物にても防ぐとあたはず、鼻も度々臭氣を臭がざるべからざるの不幸に落ち入るとあり、獨り手のみぞ之と異りたり。若し盲者にして手を失いたらば、その不幸



如何に甚だしき、彼は手あるがために見へざれども、その妻の顔、小供の丈け等に至る迄、見るが如く之を知れり、彼は手あるがために、琴を鳴らし、三味線をひき、按摩を取りて生活をなす。盲唖學院に行ける人は、如何に手が聾を助けたるかを知り給ふべし。彼が畫を畫き、裁縫をなし、自由に働きて殆ど不足なからしむる者は、全く手あるがためのみ。只に聾盲のみならず耳聞へず、目見へず、足立たず、口言ふ能ずしても、尚ほ二本の手にて人と語り、己れの欲するものを取り、己れの欲せざるものは之を防ぐを得るは、唯だその耳目口鼻の役を兼務するが故なり。通常の人の手を取り去らば、その不自由一と甚だし、もし演説家より手を取り去らば、演説は人の眠を呼ぶの睡眠薬に落ちん。もし妻君より手を取り去らば、愛らしき小供を抱くの樂なけん。巡査より手を取り去らば、盗賊は白晝に横行せん。學生にても、老人にても、下女にても、職人にても、手ありてこそ何事もなして、社會も進歩するなり。手なくして顯微鏡作られざりしならんには、天文學は如何なるすがたなるや。手によりて花を折らざれば、植物學者は如何になすべき。口の食物に於ける、醫師の調藥に於ける、一として手の助を受けざるはなし、故に手は四躰の兄弟の中にて、その首領として立

つべき者なり。

かくの如くんば智慧と才とを助くるのみならず、人の愛と勇氣は殆ど手にありと云ふを得べし。之に力を與ゆれば、手は躰のために戰ひ、之に鋤を投ずれば、手は躰のために耕がやし、之に琴を授くる時は、手は慰を得せしめんために之をひき、筆生の筆、小女の球、おさんの庖刀、妻君の針、左官のこて、學生の書物、娘のおしろひ、髮結の櫛等に至る迄、手は躰の欲する處に隨ひて働くなり。故に一軒の家の中、一村、一國、否な世界は、たゞ手にて運るなり。手の觀察は決して輕んずべからず

第一人の手はその大さを異にする樣に見ゆれども、丸き球等を握て之を計る時は、手の擴さは恰と等しき者なり。色白く骨細くして、肉に富める小さき手は、貴族的の手なるが如く、人は各々その手によりてその性質と職業等とを知るを得べし。智慧のある人、理學者等心を多く用ゆる種類の人は、第一圖の如く手の恰好よく、手の中のすじ調子能く、拇指の長く、人さし指の始めの節に達し、皮滑にして指柔らかく、物を捉るに確かりと物にそうて握るを得べく、精密なる、細工物等を爲すに適せり。

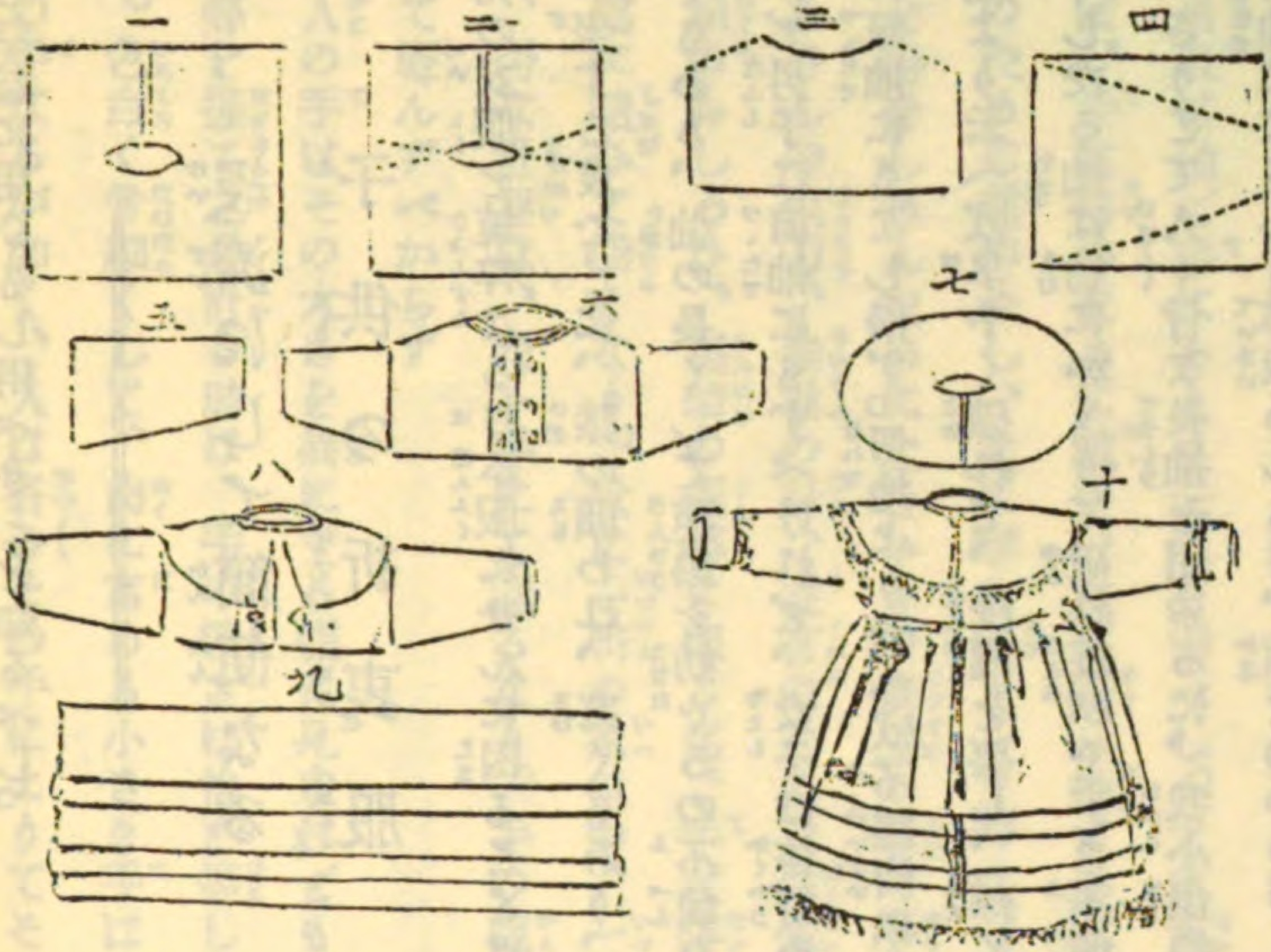
第二は怠惰なる勞働者の手なり。その厚く、鈍ぶく、手の平の筋深くして、拇指堅く、手を廣げんに拇指自由に廣がらず。小さき者を握らんとしても、確つかりと握る能わざると、恰もその腦髓の明白に物を握る能わざるが如し、

次ぎに狂人の手は、三圖に見る如く、手のすじの定まらず、上下左右に向かつたる事、その心の轉意なるを顯わせり。猿が人間に如何に似たりとて、その手を比較せば、その智慧の度を顯わせり。病氣の時、熱の有無を計るも手なり、遠方の親に音信を通ずる手なり、人を殺すも手なり、一本の手が如何に種々なる働をな

すかを見る時は、如何に我等が一本の手を有益に用ひ、もし無益に用ひもし得べきとを知るべし。

經濟にして簡便なる 子供の折衷服

小兒の衣服を純粹なる日本服にせんに困ることは、子供が坐する度ごとに、膝の顯われ、寒くもあり、見苦しくもあり、袖の長くして運動を妨ぐるの不便あり。去れど男子は筒袖にもすべけれど、女子は格好あしき故に筒袖にもなし得ず。切地より云へば不經濟にして、手間より云へば早やく穢れて、洗濯を要し、殊にぶら〳〵したる袖は物にかゝりて破れ綻びやすき不便利あり。さりとて人々皆な長袖を用ゆるに、我小供のみ獨り筒袖になさんも躰裁あしゝと、顏をしかめつゝ、春の洗濯をなし、夏の縫ひかへをなしつゝ、少なからぬ手間をかくるは一般の風なり。又た純粹なる洋服は小供の躰に合せて切を裁斷するが故に、日に〳〵成長する小供の衣服としては、三月も着れば小さくなり、小さくなりたりとて裁斷したる衣服を繼合するは良き衣物を疵物とするの恐れあり、又た例ひ少しく大きく裁ちたるにせよ、洗濯をなすに、裁ち目ほぐれて不便なれば、之れも又た妻君の苦む所也。殊に洋服の裁ち方は非常に面倒にして、自分には出來ず、洋服屋に斷たしむる時は、斷ち代計り一圓餘を費さゞるべからず。まして通常の家にては常服となして用ゆるを得ず。彼にしても、此にしても、一利一害あれども、玆に示す所の折衷服は、記者の實驗する所にて、和洋兩服の長所を取りて、短所を去り、最も經濟にして、最も便利は、格好躰裁共によくして、温かく、切の入用少なくして、且つ粗末の物にて、美麗なる衣服を作り得べく、子供の服には最も適當の服なるべしと信ず。之を作る



には先づ第一圖の如く、襟かたを明けたる切を以て第二圖の如く肩をそぎて、縫ふ時は、第三圖の如き形の者を得べし、之を上と呼ぶ。之より更らに第四圖の如き切を縫ひて第五圖の袖を作り、先に作りたる上に着くれば、六圖を得べし

次ぎに七圖の如き切を六圖の襟の所に縫付くれば、八圖の如きものとなる。その襟のとじ目はシャツの襟等の如く別に細き切れにて、之を覆ふべし。この七圖はたゞ飾りのために用ゆるものにして、之れを付けざれば格好あしゝ。又た巾廣の切なれば、ぼたんの所を折り返し、巾せまきものは別の細き切をはぐべし。

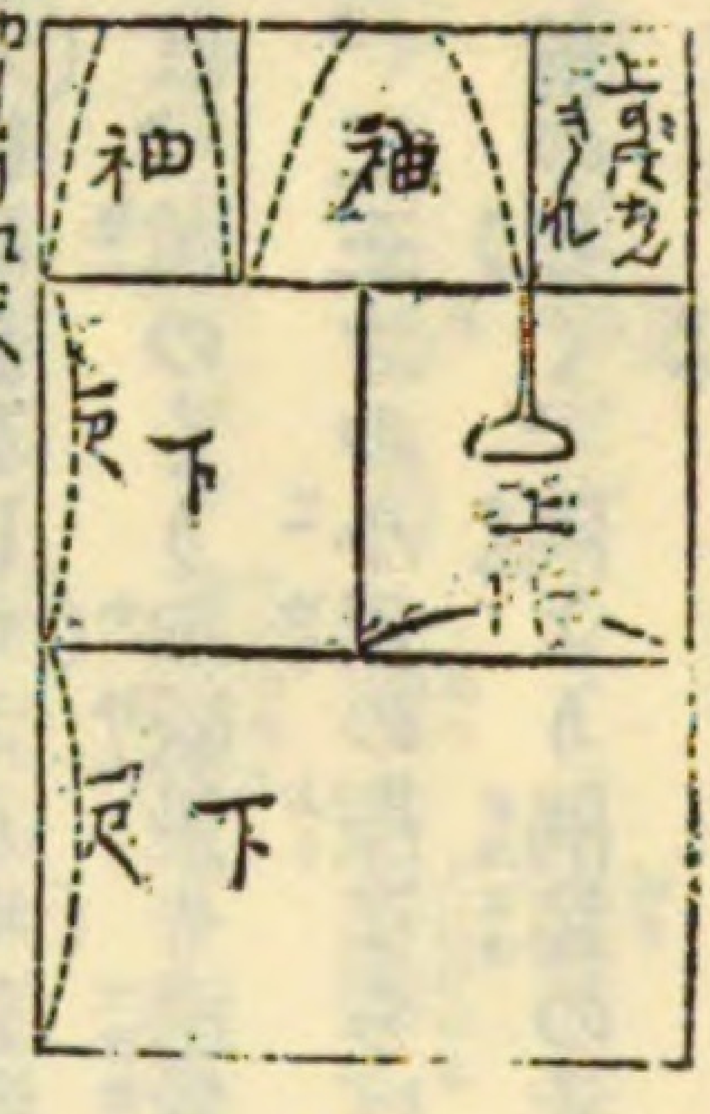
寸法は年齢によりて一定せざれども、一ッ身を着る位の子供なれば、上の巾七八寸にて、上の丈け一尺、袖丈けは各々五寸、はゞは四寸許り、肩のかざり付共切なりでよけれども、八寸四分位を要す。

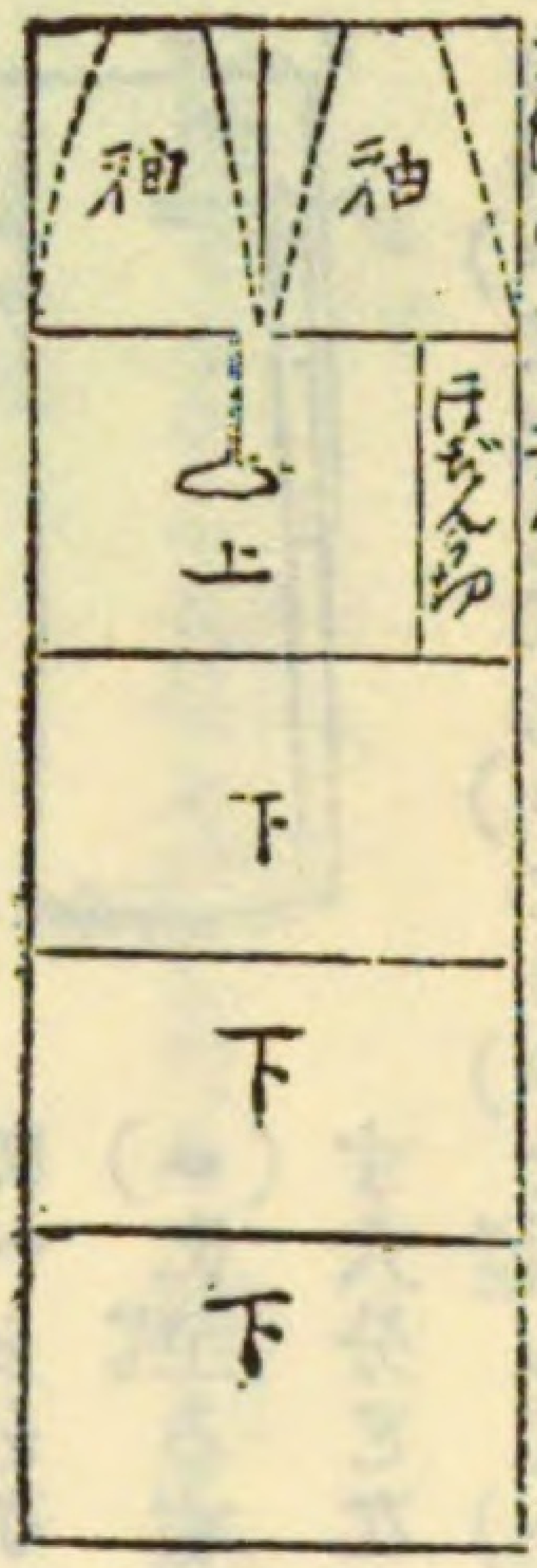
かく上の全く出來上りたる後、下を作るべし。下は巾

を三尺四五寸餘につぎて、丈け一尺二三寸となして婦人の腰巻の如く、巾廣きものを作り、丈けに應じて九圖の如く外部にひだを二三段に作り、之を上のはいに合せて十圖の如く、縫ひ合せなば、可愛らしき衣服を得べし。

肩は手の大さに應じてあげをなすべし。

此の服の積り方

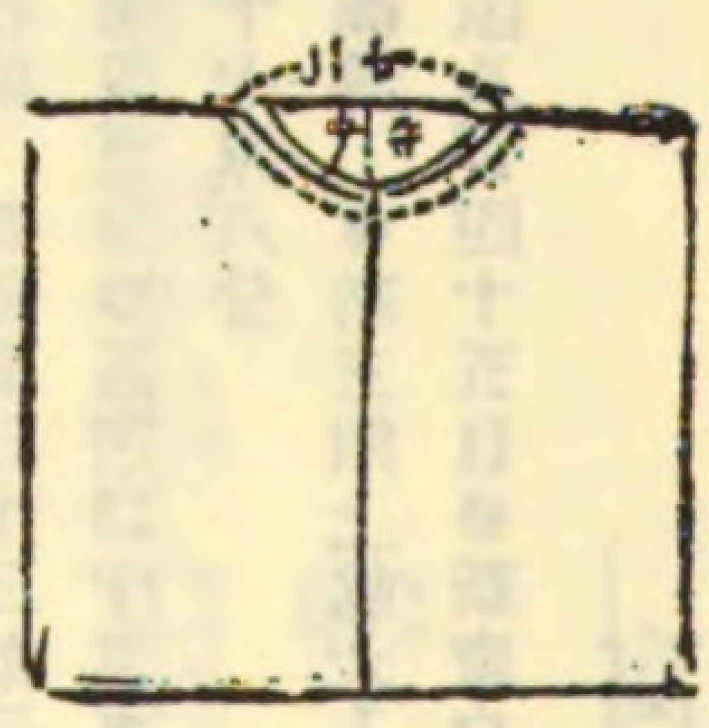




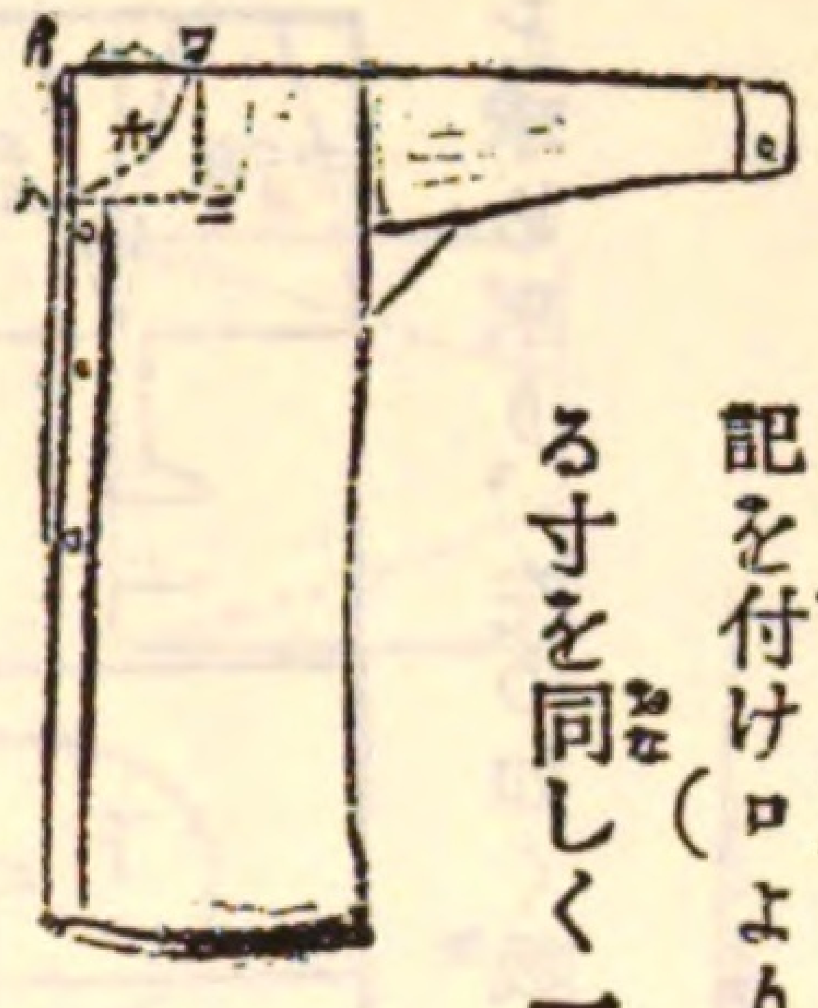
今三寸位の子供のために此の服を作らんと欲せば、大巾物ならば二尺五寸、木綿巾ならば五尺を求め來り、左の如く裁つべし。

シャツ洋服襟肩の明け方

シャツ洋服は、襟の明け方によりて、或は喉をしむるが如きものとなり、或は胸の明過ぎて寒きものとなるを以て、通常人々の困る所なり、或る人は左の一圖の如くきめて、大人のシャツを斷つ人あり。されと之れは後の肩あき二寸前下り二寸五分と定まつたるのみにして、くり加減は已が熟練によるものなれば、或はくり過ぐることとあり、或は足らざるとありて、一枚毎に一定せず。



左に示めせるは佛蘭西にて行なはるゝ法にして、我國にても此の頃一般に洋服屋にて用ゆる法なりと云ふ。その裁ち好きことと前圖の比にあらず。即はち通常の大人のシャツは、圖中イの背縫の所より緯に二つに折りて通常の(イ)の所より(ロ)を(ハ)迄を各一寸七分として



記を付け（ロ）より（ニ）に至る寸と（ハ）より（ニ）に至る寸を同しく一寸七分にして圖の如く四角にへらをなしさて（イ）より（ニ）に至る寸を計る時は四寸六分となる、此の三つ一の所（ホ）に記をなし（ロ）より（ホ）を通して（ハ）の所までへらをなさば、前のくり加減最も適當して、着て心持最ともよし。二三才の小供の服ならば、一寸二分位の角になし、前の如く、隅より隅迄の寸の三分の一の所にてへらをなして裁すべし。

日用品物價

◎白米（國に付）　一等米九升三合●二等米九升五合●三等米九升七合●四等米九升八合●五等米一斗三合

◎雜穀　●本貫大麥三斗一升●臨塲大麥三斗二升五合●裸麥二斗二升五合●相州小麥一斗七升四合●船橋小麥一斗八升五合●肥後上小麥一斗八升三合●常州小麥一斗九升●下總小麥一斗八升八合●千葉小麥一斗八升五合●札入竹林麥一斗六升八合竝一斗八升五合●上割麥一斗八升●竝二斗●南京大豆一斗八升九合●南京青大豆一斗九升四合●八戸大豆一斗九升二合●粕壁薄色小豆一斗三升一合●室蘭小豆一斗二升八合●室蘭黑豆一斗六升●目無白さ一斗●本石大豆一斗九升二合●南部大豆一斗九升五合●吟小豆一斗三升三合●地廻竝小豆一斗四升●當金々時一斗五升五合●佐野搗栗一斗四升●中手小豆一斗四升五合●本塲逸摩金時一斗三升●銚子隱元九升●庄内平豆一斗七升五合●常州小川小豆一斗三升八合●本塲平豆一斗六升五合●川越豌豆一斗六升七合●鶉隱元豆一斗四升八合●吉原大豆一斗七升五合

◎鹽　●赤穗三俵九分五厘●大鹽幷八家四俵五厘●本齋五俵八分●新齋六俵九分

◎砂糖　●稀車三十三匁三分●同次三十三匁九分●台安十八匁三分より十七匁五分●呂宗二十匁九分より段々二十匁●初雪二十八匁七分●天光二十七匁八分

◎繰綿　●新三州上銘大入七百八十目●新三州文庫八百五十目●新遠州文庫八百四十五目●新唐白上綿八百七十目●新唐赤大德一貫四百十目

雜録

遺珠顆々

○自由の爲に生きむ　ローラン夫人

我等は自由の爲めに死するを要せず、我等は更に爲す可き事あり、我等は須らく自由の基礎を建てんか爲めに生きざる可からず

○老少　ウアットレー

老ひて若からんことを欲せは宜しく若ふして老成なる可し

○死者活語

誤謬は書庫に留し眞理は人心に留す　ゲーテ

姉妹

みや子

一人の少女が走り來て、

妹『一寸姉さん、いゝ話があるのよ！まさかあの人があんな事をするとは思はなかつたの』。

姉『ア、お待ち。お前に其話を聽く前に尋ねたい事があるよ。マア其話はほんとうかへ？

妹『それはほんとうでしやう？エ、ほんとうですとも』。

姉『そんなら其事を話したら、其人に對して深切でしやうか？

妹は暫時考へて、

妹『あんまり深切じやアないの。よい事ではないもの』。

姉『話す必要があるの？』

妹『イ、エ、話したつてやくには立ちはしません』。

姉『では其話は聽きますまい』。

寓言

蟬と蟻

蟬の怠惰者は夏中ミン〱と鳴イて居たので寒イ朔風がヒユー〱と吹く時候となッたが夏の中肝腎の稼業は其方退けにしてミン〱と鳴暮らしたので米櫃が空虚になり小さな虫の片塊一ッ無イ始末にて鼻の下の建立に差問へましたから蟬の奴さん隣家の蟻の許にノコ〱遣ッて參りまして私は本年飢饉に際會しましたがコノ分では乾干になる計りですが來年の收穫迄には元金は申すに及ばず利息を添へて相違なく返濟するから

夫迄の生命繼ぎに何程か穀物を貸して呉れと蟻に賴みました併し蟻は貸嫌ひの方でムィますが是れは極些細な缺點でムィます　蟻「蟬さん和郎さんは熱ィ時候には何を爲て暮らしてましたへ　蟬「まァオ聽きなさい蟻さん私は夏の中は晝夜間斷なしに唱歌を謳て居ましたよ」蟻「オヤ〳〵和郎さんは唱歌を謳て居ましたか夫れは誠にオ結搆でムィますチヤナンダ今度はお舞蹈なさいな

二頭の騾

一頭は大麥を積み一頭は鹽の税金を積ンだ二頭の騾が一緒に道中しましたが税金を積ンでる方の騾は結搆な荷を背負ッて居るので肩身が廣く背の痛いも苦にならずコレ見よがしに足並も凛々しくチリン〳〵と鈴を鳴らして居りましたが突然行方に野盗が現はれましたが野盗共は黄金が欲しィのですから大麥を積ンでる方の騾には目も懸けず鹽の税金を積ンでる方の騾に飛掛り轡を取ッて抑留めました騾は必死となッ其身を防ィで居る中に敵の毒刄に數ケ所の重傷を負ひ悲鳴を發げましたがホッと溜息吐き「最初の約束では斯樣ナ目に遭ふ筈ではなィが私の後からトボ〳〵と尾イて來る私の相棒は無難で私一人此處に倒れて死ンで仕舞ふと云ふは何たる因果ナとだらう」大麥を積ンでる騾は負傷者に向ひ「オィ相棒上等役を有ッてるのは每も宜いと許りはない奴さ若し和郎が私の樣に水車場の用を達してなら豈夫左樣なミジメは見なんだらうよ」

狼と犬

一疋の狼が在りましたが犬共が能く門を守ッて居るので骨と皮ばかりになりましたコノ狼一日家人の油斷を見澄まして逃出しました肥太ッた艶々しい强くッて美ィ大きな家犬に邂逅しました鬪爭を仕掛けて敵手を寸断々々にするのは狼の十八番でムィますが何

分にも對手の家犬は勇しく自分の一身を防衛ぐとの出來る骨格逞しき門を守る一疋の大きな家犬でムイました其處で狼は態と身を卑下して家犬の傍近く進寄り談話の端緒を切りました而して狼が感じ入ッて居ります家犬の肥太ッた立派な躰格に付てチヤホヤと賞讃しましたが其時家犬の申しますには「私の樣に肥太りたくば山の中を立退イてお仕舞ひなさい惡いとは申しません山の中に住ンで居る和郎さんの同胞をゴ覽なさイな見る影もない哀れな有樣で大の吝嗇家でヤクザな餓鬼共ヨりで唯乾干になッて斃るより外はない境遇である何故なれば片時も安心するとがない結搆なロハのゴ馳走に有附けやしません始終ミヂメなとヨりでしやうだからね惡イとは言はないから私の後に尾イてお來なさい屹度運命が好くなるからさ」「チヤア何ですか如何なとを爲れば左樣ナに運命が好くなるのですか」「何アに何も爲なくツても宜イ位なものです唯杖を持ツて居る人や乞食を驅逐り家内の人達に呈媚して甘く主人に取入れば宜イのです左樣すれば此方で大騷を志ないでも先方からチヤンと雛鷄の骨や鳩の骨やなんど澤山な殘物が下ります」斯く狼は未だ見ぬ先の幸福を兎や角と想像左樣ナにも優しくして呉れるものかと有難涙に呉れましたが家犬の後に尾イて歩イて居ります中に狼は見るともなしに不圖家犬の頸の邊が禿げてるのが目に止りました「オヤ〳〵和郎さんの頸は禿げてるが一躰夫りやマア如何したものだ」「何アに何ンでもありやしないや」「何ンでもないと」「何アに瑣細なとさ」「ダッテマア如何したんだね」「何アに多分私の頸玉に結着けてある頸環の故でしよう」「何ンだとチヤア何かね和郎さんは和郎さんの行き度イと思ふ所へ駈けて行くとは出來ンのかね」「左樣サ毎でもと云ふ寸法には行かんのさ」「併し左樣ナとは如何でも宜イヂヤアないか」「私はチットモ御馳走なんぞに有附き度くはないや

而して其様な思ひして財寶一個欲しくはないや」斯く言ひて狼は逸散に逃去りました

盗賊と驢馬

二人の盗賊が盗取した一頭の驢馬のヿで喧嘩して居りました一方は驢馬を手許に飼ッて置き度と申し一方は賣却度イと申して相互に己が田へ水を引き鐵拳の雨霰を降らして遣る遣らぬと争ッて居る隙を狙ッて第三人目の盗賊がマンマと首尾能く驢馬を攫ッて行きました驢馬は時としては一の哀れな州郡でムイます盗賊は某々の王侯でムイますトランシルヴアニー土耳其匈牙利の様に吾人は二人の替りに三人の盗賊に出會しましたコノ三人は一個の州郡を取らんと争ッて居る隙を狙ッて第四人目の盗賊現はれ出で驢馬は到頭コノ者の手に落ちました

死と薄命者

一人の薄命者がありましたが毎日死を呼ンで救助を要めて申シますには「オー死よ何ンとマア汝さんは私の目に能く見えるだろう早くお入來よ早く來て私の薄命な生涯を引取ッてお呉れよ」其處で死は薄命者の許へ參りますれば人一人助けるヿと思ひましたのでノコ／＼と薄命者の許へ遣ッて參りまして門邊に音問れました奥へ通りました正躰を現はしました、其時薄命者は叫出しました「オヽ私は何を見るヿだらう早く誰ぞ來て彼の物躰を引退けてお呉れ何ンと彼は醜インだらうオー私は恐怖ッて身の毛が彌立ッて來た傍へ寄ッては不可ンオー死よオー死よ此處を立去れー一粹人がムイましたが述懐して申しますには「予は甘じて不具者となり蹇人となり痛風病者となり腕無とならん予れ生活す予れは是にて滿足すオー死よオー死よ決して來るなかれ」と

時事一斑

新年

幸福なる新年はまたもや明治廿七年てふ名刺を通じて我儕が門邊に來れり。吾人は其滿面の笑を含みつゝ阿兒の紙鳶を趁ひ又阿孃の羽子を趁ひて來れる彼に、彼か樂しき贈物を深く感謝するなり。嗚呼、世の淸き家庭に坐せる幸多き讀者よ、彼は讀者に何等の樂事をば贈りたりや。孟子は云ひき『君子有二三樂一、父母倶存、兄弟無レ故、一樂也。仰不レ愧レ於レ天、俯不レ怍レ於レ人、二樂也。得二天下英才一而敎二育之一、三樂也』と。

明治廿七年

來れ、明治廿七年！『冬過ぎて春來るらし、朝日さす春日の山に霞たなびく』。

吾人は此の多望なる年を讀者と共に多望に過ごさんと期す。

衆議院解散

停會の後に解散ありき。帝國議會は曩に一週日間停會せられて開會すること一日、再ひ十四日間の停會となり、其翌舊臘三十日更に衆議院解散の詔勅下れり。

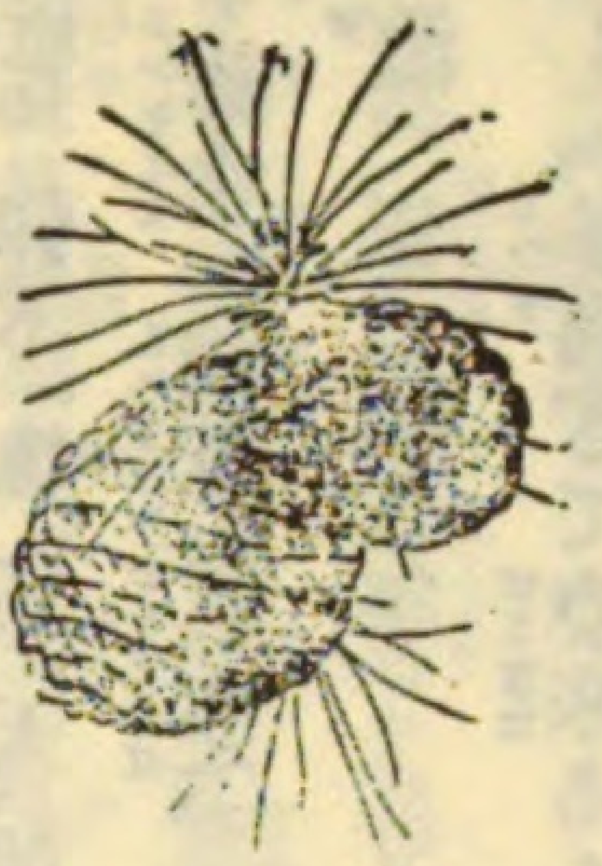
總撰擧

去れば總撰擧の時は今年も亦春と倶に來るべし。國民として最もよく國民の意向を代表すべき代議士を擧ぐるは國民の最も榮譽とする義務にあらずや。

相馬の怪獄

新年の筆始めに書くも忌はしき相馬の怪獄は、客年十二月廿五日に錦織剛淸岡野寛後藤新平山口淳平沼專藏帆足清華其他の人々皆有罪なりと豫審法庭に認められぬ。





幸福なる新年の地上に
來り降れることを慶び
且つ感謝す願くは讀者と共に多望
なる此の明治廿七年を祝せん

明治廿七年一月

國民新聞社員
民友社員
家庭雜誌社員

新年初賣小說

櫻癡居士新作書おろし
俠客春雨傘
實價卅錢 郵稅六錢
享保年間江戸で有名なる俠客曉雨が傳奇を絶妙の文章にて櫻癡居士の新作人情を盡したる近代無類の俠客小說

諸大家傑作
學園花壇
實價廿五錢 郵稅六錢

卷中目錄

織柿園主人著
山中源左衛門
實價金卅五錢 郵稅六錢

美術世界第廿五集
省亭花鳥
當卷にて完結
一冊金卅錢十冊金二圓八十錢郵稅一冊に付四錢宛●一卷より新版迄取揃御注文に應す

今朝智惠袋
實價廿錢 郵稅四錢

岡本昆石著 故鮮齋永濯畫
滑稽
瓜太郎物語 全二冊
半紙摺和製美製本
實價四十錢郵稅六錢

饗庭篁村著
有馬筆
實價卅錢 郵稅六錢

末廣鐵腸居士著 政治小說 南洋の大波瀾 實價四十五錢 郵稅六錢
宮崎三昧著 塙團右衛門 同卅錢 同六錢
鷗外漁史著 水沫集 同六十錢 同十六錢
紅葉山人著 三人妻 同五十錢 同八錢
浪六著 浪六漫筆 同三十錢 同六錢
櫻癡居士著 櫻癡放言 同三十錢 同六錢
仰天子作 蝦夷錦 同廿五錢 同四錢
坪内逍遙著 春廼家漫筆 同三十錢 同六錢
饗庭篁村著 凧の糸目 同二十錢 同四錢
萬[illegible]專賣特許 舶來智惠袋 同二十錢 同四錢
市川新藏作 木枯 同二十錢 同四錢
川上眉山人著 蔦紅葉 同二十錢 同四錢
眉山人 漣山人 萩桔梗 同二十錢 同四錢
蝸牛露伴著 葉末某 同廿五錢 同四錢

東京日本橋區 春陽堂 通四丁目角

家庭雜誌第貳拾壹號附錄
(明治二十七年一月十日發兌)

文藝



千代田の宮

佐々木信綱

わが大君のよろづ代を
ひとつ心にいはふなる
わが國民のこゝろならむ
千代田の宮の松が枝に
ふく朝風のおときよし

ときはかきはに動なく
くもるときなき日本の
國のすがたや示すらむ
高く聳ゆる富士の嶺に
のぼる朝日のかげ清し



遠寺の鐘

残月樓主人

うしろの岡にみつふたつ
むれゆく鴉もましろなり
門田のおもにのこりたつ
かゝしの袖もましろなり
世は白たへになりはてぬ
山もはやしも田もはたも
ひとしき色にうづもれぬ
もりもやしろも草も木も。
うちつどひつゝ雪ぼとけ
つくりし里のうなゐ子も
たへぬ寒さのわびしさに
おのが家路にかへりけむ
たゞ門のべに尾をふりて
遊びむつれてよろこべる
こ犬のほかにかげもなし
ほかには見ゆる影もなし。
ならぶ家居もとざしはて
ゆきゝの人のこゑもせで
ものしづかなるこの朝け
をり〳〵音のきこゆるは

枝たわみたふまつがえを
志づれておつる雪ならむ
まだうらわかきわか竹の
雪に折れふすおとならむ。
をりしも小田のほそ道を
ふみなづみ來る人のかげ
なかばは雪にうづもれて
笠をもさゝでたゞひとり
かしらにつもる志ら雪を
拂ひもやらでたゞひとり
かすかに殘るわらぐつの
跡をたど〳〵たどりつゝ
足はこゞえて手はひえて
身に志みとほる風さへも
知らでやあらむ知らざらむ
ちかづき來たる人のかげ。
『いかにかせまし堪がたや
思へばゆかしのかの人よ
かばかり我をなやませで
つれなかれかし我にしも
強面かりせばなか〳〵に
かばかりものは思はじを
あくまで我を志たへども
あくまでわれは思へども
請へども請へどひたすらに
ゆるしたまはぬちゝと母
ひとなみならぬ人ゆゑに
いとゞあはれのます物を
幼なきよりのいひなづけ
よしや其身はくちなしの

花さかずとていまさらに
いかでか人をわするべき
宿世さだまるえにしをば
絶ちたまふかやちゝと母
かたじけなしと思へども
おもへばうらめし父と母
あはれゆかしのかの人や
あはれかの人なくもがな
かの人なくばいかでわれ
かばかり闇にまどふべき
あまりに人を戀ひわびて
こゝろは闇にかきくれて
物のあやめもわきがたし
あやめもわかず成にけり。
「おやと親とのちぎりしは
まだ生ひいでぬ前なりき
世にはをみなの多かるを
すぢめたゞしきわが家に
めとりがたし」と父はゝの
いさめたまへる言の葉を
思ひわかぬにあらねども
道理知らぬにあらねども
戀しきこゝろいかにせむ
此なつかしさいかにせむ。
あはれかばかり戀しきは
いひなづけぞと思ひつゝ
戀しきのみにあらぬなり
かのいとほしき心根の
戀しきのみにあらぬなり
かのゑまはしき顔ばせの
戀しきのみにあらぬなり
物のあやめもことわりも

わかぬは戀のこゝろなり
いかでかばかり戀しきと
こゝろにとへば我こゝろ
戀しきからにこひしきと
こたふる外はなかりけり。
おのが名譽を揚げむとて
あるは利益をもとむとて
我こゝろにもあらぬ世を
すごせる人もありときく
憂世のさまのをかしさよ。
あつくたゞしきわが戀を
わらはゞはらへ世の人よ
けがれずきよきわが戀を
狂ひたりともいはゞいへ
たゞ戀しさにみだれつゝ
くるひはせぬを我こゝろ。

あなわが胸のくるしさよ
あぢきなき世に今はしも
かひもなき世に今はしも
のぞみの糸は絶えはてぬ
あなしたはしのかの人よ
かの人われをくるはすか
くるひやしけむ君ゆゑに
くるひやしけむ狂へるか
くるしき胸をかきさきて
のぞみなき世に投付けむ。
花はあらしにとくちれよ
月はくもまにとくいれよ
雨はふれ〱かぜすさべ
つもれよつもれつもれ雪
あはれからすのこゑ〱に
我をわらふかあざけるか

あれまた雪のちら〳〵と
あれ〳〵犬のころ〳〵と
それ〳〵そこにかの人の
袖の見ゆるはひら〳〵と
それ〳〵そこにかの人の
たもとはわれを招くらし』
ものぐるほしくうち仰ぎ
むなしき空によりすがり
すがらむとしてたち〳〵と
雪にまろびて起あがり
起き上りてはふしまろび
いつしか來けり妹のかど。
庭のかよひ路ふみわけて
音なふけはひさとりけむ

まどうちあけて少女子は
走りよりきてよりそひぬ。
この寒き日によくこそと
いはまほしげに打ゑめる
おもわまもりて門のべを
指さしながら『やよやきみ
そともにいでゝこの雪を
共にながめんいざ來よ』と
ひけばたもとをちゞめつゝ
ゆくは侘しといひげなり
いつにもあらずいらだちて
怒れるおもわつくりつゝ
『さらばたのまじ我ひとり
ゆきてぞ見ましこの雪を
つれなき人はたのまじ』と

たもと放ちていでゆけば
常にかはれるそのさまは
いかなる由のあるらむと
いぶかしげにはまもれども
思ふこゝろをいひがたき
我身のわびしさかこちつゝ
あへなき別れの悲しさに
あとをおひつゝゆく袖を
ちからのかぎり留むれば
『さらばいざ來よ面しろき
雪のけしきをいざともに』。
打つれだちて手をひきて
雪ふみわけてたどりゆく。
なほも少女はたへかねて
身を縮めつゝわなゝけば
そでもて肩をおほひつゝ
あとはかもなくたどり行く。
足はこゞえて手はひえて
すゝみかねつゝ顔見れば
『やよとくゆかむ面しろき
雪のけしきはかしこなり
河のわたりにゆきて見む
かの河そひにゆきて見む
水にふりつむ志らゆきの
泡ときえゆくおもしろさ』
さまに志らせて指ざして
唯たど／＼とすゝみゆく。
ゆきげの雲はかさなりて
まだくれがたき夕ぐれの
空はにはかにかきくもり
雪はいよ／＼ふりいでゝ

さえ增す風をたへがたみ
　行がてにしてたゞずめば
またしも人にひかれつゝ
　打よろぼひてたどりゆく。
河のほとりにとめくれば
　をさなきほどに打つれて
めだかきくひに來し頃は
　脛にもたらず見えしかど
みかさまされる昨日今日
　うづまく水のおとすごし。
『こゝのながめの面しろや
　早きながれのおもしろや
むかひの山のあのけしき
　こなたの杜のかのけしき』

きしのやなぎのしだ陰を
　賴むかげぞとやすらひて
をとめは人のいふまゝに
　雪をはらひてながむめり
雪うちはらひながむめり
　おもしろしとや寒しとや。
水にきえゆくしらゆきを
　しばし見つめて又さらに
少女のおもわ見まもりて
　『あはれわびしややよや君
などひと言もことばなき
　我はそれをもいとはねど
ゆるしたまはぬちゝと母
　かゝるわびしき憂世には

いきながらへて何かせむ
　たのしきくにはこの川の
底にあるらむもろともに
　いざ行てましいざゆかむ』。

心志りてやさとりてや
　顔をそむけて身じろげば
此世のかぎりの今だにも
『ものいはぬかや言いひね
せめてひと言ものいひね
　あなうらめしのこの君や
ともに死ぬるを厭ひてか
　よし〳〵さらば我ひとり
つれなき人はそこにたて
　われはゆかむ』と岸ちかく
進むたもとをおさへつゝ

　かた手は柳にとりすがり
いはまほしげにあせれども
　いひ難き身のいとほしや。

やう〳〵暗くなりゆきて
　あなた此方も見えわかず
山のふもとにたゞひとつ
　仄かに見ゆるともし火は
後世のやみをや照すらむ
　黄泉の道をやをしふらむ。
ときしも風のはら〳〵と
　やなぎの枝をうごかせば
おつるみ雪のつめたさに
　あはれ少女は手をはなす。
とらへし袖をはなされて
　よろめく足をすべらして

打つゝきつゝもろともに
あはれたちけり水けぶり。
月はかくれてはなちりて
きしべの人のかげきえぬ。

あとをうづめてふる雪は
ふりて積りてふりつみて
あたりは闇となりはてゝ
遠寺のかねのおとさむし。





籬の菊（湯地都尾子君略傳）

小中村義象



湯地都尾子君七十七歳の眞影

肥後國葦北郡佐敷の里に、湯地都尾子といふ人ありき。本姓は佐々氏、今の湯地丈雄氏の祖母なり。温順にして、貞節あり、容貌さへうるはしかりければ、その名、はやう遠近に聞え、十六の時、湯地氏には嫁かれたりき。夫龍彦氏は、もと熊本の藩士なりしが性放縦にして俠豪なるより、國禁にふれて今はこの里の浪人となりたるを、都尾子の親父には、反つて奇なるものとして、結縁せしめられしなり。

都尾子廿一の時、女子を生れき。千代子といふ。廿四の時、男子を生れき。暉狠といふ。後に丈右衛門と改めら

る。熊本にて近世の君子とよばれし先生なり。都尾子は、よく姑夫に事へて家を守られしが、中にもこの先生の幼時の教育こそ、その最も力をつくされし事にはあれ。そもそも藩の制として文武の兩道は、必ず兼ね修めずば、士の家を繼ぐこと能はざる事なりければ、今こそ浪人の身なれ、いかでこの子を世にまさる人となして、もとの祿に復させでやあるべきと、それのみ朝夕の物思ひにはせられたり。

この里に、上林某といふ儒者ありき。都尾子は、丈右衛門先生のやうやう六つ七つになれるを待ちて、そのもとに連れゆき、學問の事を依托せり、こは道のほど一里には足らざれども、田舍の山道とて、おそろしきところ多し。人とては柴苅る翁、馬草きる童の外には通ふものもなく、たゞ獸の足跡、あやしき鳥の聲のみ見聞かるゝを、都尾子には、いつもその子をわれよりは二三間もしくは五六間先に立てゝ、その跡より添ひ行かれぬ。

事ありて夜なとになる時は、おそろしさ、いよいよまさるに、都尾子には、わが子の魂をためさん心なれば、ますます遠ざかりて、見おくらせらる。

時雨ふりそゝきて、月影を暗き夜、母はその子を例のごとく先たてゝゆかするに、吹おろす風すさましくて、こよひのみは近くよりたまはれと請ふを、臆病なる事をいふ子かな、戰國の武士は、七つ八つのほどにて獨敵陣におくらるゝこともあり、汝がつねにいふ牛若丸は、小供の時より、鞍馬山おくにこもりて、劍法を學はれしぞかし、かばかりの處だに、おそろしと思ふは、

我子にあらずとおしやれば、子は涙を呑みて、やう〳〵たどりゆくに、おそろしさは髪の毛を後より引かるゝやうなり。かへらんかとは度々おもひしかど、母に叱らるゝことの猶悲しければ、また氣を勵しつゝ進み行きつ。母はこのさまを見やりて、或は悲しく或は嬉しくおもひをりしに、やゝ程經しとおもふころ、ザンブと音して迸る水、月かげに打きらめく。アハヤ我子……過てり……死せ：母：母が罪ぞと、石を投るやうに走りよれば、子は眼ひからし、脇指ぬきて、こゝの川邊にッゝ立ちたり。暉狼：母上：怪我はなきか、今瀬を逝しつるが悔しきことよといふ。母は手を拍つて、あつぱれ我子、士の子よと肩押し撫てつゝ、また本の道をいそがしやりぬ。かゝることと、この外にもいかに多かりけん。

年月はいたつらに過ゆきて、暉狼の學ひの道は一向にすゝまねば、母は寢食をも忘るゝまでに、その不才を歎き、かくてこの山里に朽ちはてなば、祖先に對して、何の面目かあらん、さはいへ、彼は我子なり、我子の敎育だに出來ざらば、母となりしかひやなからん、彼が不才は、我不才なりと、いよ〳〵氣を勵しつゝ、例の見おくりして後、窃に上林氏の庭の遣戸をくゞり、その籬のもとに立ちて聞けば、師は、聲高らかに論語の素讀を敎へらるゝなり。これよこれあることよと、打ちうなづきて、懐なる帖紙を取出で、矢立の筆にて、その音聲のまゝに假字にてかきとめけり。「まなんでときにこれをならふ、またよろこばしからずや」などかくに、我子のおぼえわるき處には、みつからそのしるしつけおかるゝなど用意至らぬくまなし。

あはれ春の朝も秋の夕も人を忍びて籬のもとにたゝずむ母の心すむ月もいかにかなしと見たまふらん庭の遣水はその心の清きをうつし籬の菊はその操の高きを慕ふに似たり。

この論語の聞書は全部揃ひて湯地家にありしが諸方より借る人多きためにちりちりになりしを丈右衛門先生一つに集めて表装



せんとせられしを、都尾子の强ひてとゞめられしかば、そのまゝにてありしが、今の丈雄氏明治三年に、遂に表装せられたり。その後また借る人多くて散りぼひたるも少からざれども明治十年までは猶學而の篇のかたはしは殘りたりき。さるを西南の亂の兵火にかゝりて、今はその切だになきといふ。いとくちをしき事なり。

又この圖案は、同十四年せめての心やりにとて、丈雄氏みづから、その道にくはしき人にはかりて繪かしめられしものなり。さるに此の事を聞傳ふる人やう／＼多く今は貞節をこのむ家の軸幅となりしも少からず。中にも黑川陸軍中將、乃木陸軍少將、春田憲兵大佐のごときは大に歎賞して人にも語られければ、陸軍部内には、この事を知る人も多きといふ。はじめ丈雄氏、學而の篇の斷片を表装して、軸幅とせられし時、熊本大夫長岡氏の夫人より

　　聞くまゝにかきなかしたる水莖の
　　　　あとこそ家のをしへなりけれ
　　敷島のやまとこゝろの色も香も
　　　　ふでにとめたるからのことのは

といふ二首の歌をおくられしとぞ。されば今丈雄氏の圖せる軸幅には、この歌をかゝれたり。

家にかへりては、裁縫のかたはら、我子にその學事の復習せさせ、おぼえあらざるところは、例

のかきとめし紙おしひろげて、懇にさし示されければ、さばかり心に染みざりしものと大に感してやう〳〵學業に志ふかく、遂にはその道に暗からぬ人とはなれりき。

撰んで仁に居らさらばいかで智を得んと、孔子のいはれしごとく、道のちまたのさま〳〵にわかれ、白き糸の黒くも赤くもそまりゆくは、げに住む里の風儀と朋友のよしあしとによるものなり。佐敷も熊本をはなれたる遠きまゝに村落の風儀として相集りては、放逸怠惰なる事にのみ貴き光陰を費し、たま〳〵學業に志を入るゝものは、反つてその無用なるを嗤り笑ふがごとき惡弊ありき。されば暉很氏も、ともすれば、さる遊戯にのみ誘はるゝことのあるを、母は屢々責められしかども聞入ず。ある日、ふかくおもふことやありけん、暉很来よとて、家の後なる山林につれゆきて、われ汝が爲に老のくりごとくりかへしいひしは、汝が家の行末榮えしめんとてなり。汝が父君のあらぬ事より、かゝる邊鄙の地にさすらへたまひしだに、家の汚れなるに、汝はその恥をそゝがんとは思はずや、いかでもとの祿に復し、よき人と世にいはせんとて、明くれ心をくるしめをるを、汝は母が思ひの千々の一つだに汲みしらずて、かくも教へに背くことよ。今は母子の縁もこれまでなり、われも生きじ、汝も世にながらへさせまじと息せきて、そのさゝれたる脇指ひきぬき、睨みつめて刺んとす。暉很は母が憤りの顔打守りつゝ、たゞ泣き沈むより外なし。やゝありて暫し待たせたまへ、かくまでに御心を痛めまゐらせし罪はげにさりところなし、みづから腹かききつてわびごとせん、その刀わたしたまは

れといふ。母打うなつきて、よくもいひしかな、いみじくもいひしかな、よし〳〵、おのれその腹預らんと、やがて短刀をもとのごとくに收めて、さま〴〵にいひきかせられき。

又常にいかめしき大太刀をその子に與へおきてをり〳〵これをはかせられしが、ある時、そをはきて熊本に往復せよといはれしに、いまだ腰よわくて遠路はき得べくもあらねば、かゝへながら往復せられきとぞ。この大太刀は、今九段坂遊就館に陳列せられたり。

かゝる事より暉猨氏の行狀やう〳〵あらたまりて、遂には土地の人にも仰がるゝに至れり」

貧賤も移すこと能はざるは、大丈夫も難しとするところなるを、湯地家は、浪人の身として、こゝに暮しゝこと殆と十三年、花紅葉のたのしみはいふべくもあらず、朝夕の烟さへ立かぬることも多かりしに、人に後指さゝるゝこともなく辛うして活計を立てしは、たゞ都尾子の力なり。さるは、みづから薪水の勞するはいふも更なり、賃仕事といふことして、かつ〳〵その食料をはさゝへしなり。これは何事も足らぬがちなる中にも、小供の敎育には深く心を用ゐて、我食をわかちても、辨當の不足なきやうに、束脩の禮を欠かぬやうにとつとめられたり。

かくまで辛苦に陷りし身に猶加はりしは、天保七年の饑饉なりき。さらぬだにいとくるしき世界なるに、かねて貧しき人は、いよ〳〵くるしく、今は殆と堪へ得べくもあらねば、都尾子は木の根草の葉をむしりなどして、その飢を凌がれけることもありき。このころ丈右衛門先生の母の恩を忘れぬためとて記しおかれしものあり。

一大豆飯
一どんぐり飯
一葛根團子
一米粉一杯小麥かす一杯糠一杯を合せ團子としてくふ
一床唐芋いつもは捨り候へども腐り入らぬ處をとりてたべる
一唐人飯とて米をいり水に一夜ばかりひらかし飯にたく
一あらめ飯
一くさぎの葉おふばこの葉をゆで飯に入るゝ
一麥飯なとは上ゝの品に候

右の品ゝに米を少し處ゝにつき候位に見へ申候事

右の仕合に御母樣の御働き一つにて世を渡り候前ゝよりの家具も漸く持届候も御母樣ならずして外人にては容易に出來がたき事と相考へ候事

この時雇ひおかれしとねといふ下女ありしが都尾子汝はわが家に居らずばかく苦しきめにはあはざらんを、はやくいづこへなりとも奉公かへせばいかにと度ゝいはれしかども聞入るゝけしきもなし。強ていはれしかば、かゝるうれしき御方につかへずして甘きもの食ひたりとも何の味ひか候べきと涙ながしていへば、そのまゝにつかわれきとぞ。德の及ぶとこ

ろをしるべし

かゝれば藩主細川侯より貧困のものに、救助米下さるゝ旨仰出されければ、湯地氏も無禄の事とてやかて出願せられしに備荒貯蓄の古籾なれば今は志らけて正實少きものながらこの家に賜はりしは、偶然にも他にくらべてはいと實入り多かりけり。されば土地の人々はこれ都尾子の徳天に達したるものと涙を流して感じあへりきとぞ。

沙中の玉もあらはるゝ習ひなれは、かゝる善行のいかで世に知られずであらん、いつとなく藩主の聰に達し同八年七月廿四日殿中に召出され、扶持米を賜はることゝなり、かつ熊本にかへり上るべき旨仰せことありけり。

一家のよろこびいふやうもなし。そのよろこびのほどもなく、同九年龍彦氏はまた罪祟りて、疑獄の身となりぬ。一家の歎きいふばかりなく、都尾子はその日より疊の上にだに坐せず、夜はことさらに板の間に臥せられたり。かゝること凡そ三年、檻中にて、龍彦氏病につかれしことありしが、丈右衛門先生は、これを聞きて、みづから入檻してそを看護せんよしを屢々願はれしかとも許されざりき。同十一年疑ひ晴れてやう／＼本の身となられしが、この間の母子の歎き見るに堪へざるほどなりきとぞ。

同十三年龍彦氏は身まかりぬ。この人その放縱俠豪なりしことは、前にも記したりしが、都尾子は一たびだにその意に逆らふことなく、たゞ諄々として事へられしを感ぜぬものはなか

りきとぞ。

翌年人々その節操孝養を申し立つるものなどありて、母子同日に左のごとく賞せられぬ。

丈右衛門母儀夫存生中事方宜敷死後追善茂厚且又姑江茂能事子供致育茂行屆候樣子委敷達二尊聽一奇特之儀被二思召上一候依レ之目錄之通被二下置一旨被二仰出一之以上

目錄

御紋附御小袖　一

湯地丈右衛門

右者父存生中事方宜敷死後追孝茂厚且又母幷祖母江茂能事候樣子委敷達二尊聽一尤之儀被二思召上一候此段可二申聞一旨被二仰出一候條丈右衛門江可レ被二申渡一候以上

天保十四年十一月十八日

この殊榮の恩寵に預かりしも都尾子には、この服つけては夫の不行狀おのづからあらはるゝものといひて、容易につけられざりきといふ。

はじめ都尾子の熊本にかへらんとせられし時、佐敷の里人は、おやに別るゝごとき心ちしてこゝかしこに招きて惜みかなしむ。かゝれば三か月ばかりは、その名殘にひきとゞめられ、辛うじて血の涙をしぼりあひてかへり上られき。其後二十三年を經てかの地に行かれしに、人々その袖にすがりて悅びあへりといふ。思へば怠惰疏暴なりし山里をして、かく温順柔和の

俗に化せしめしは全くこの人の力なり。いかで芳草の臟に壓せらるゝとのみいはん。

熊本にかへられては、藩中の噂はいよ〳〵高し、時に長岡監物(法號温良院維新後米田氏に復す。先年朝廷殊に正四位を賜らる。今の男爵の家なり。)賢太夫の聞えありしが、深く都尾子の節操を嘉みせられ、毎年米五俵つゝをおくり、又つねにその邸に招きて一家はいふまでもなくその家臣の女子どもをも集めしめて、都尾子に女の心得をはなしせしめられき。

安政三年、都尾子六十になられき。丈右衛門先生は、ならはしのまゝに賀莚を開かれたるに、長岡家よりは擧りて賀歌をおくられ、ことにみと子の方には(監物氏の姉君)老松白鶴の圖をゑかきておくられたり。また諸方よりおくりし歌いとをほかる中に、

雨をしのき風にたえにし宿の松　澤村則武
かねて千とせの色やみすらん

高砂の松とゝもにや影たかく　津田信知
みとりいろそふ千代の行末

行末をかけてちきらん玉のを　澤村尉助
なかきためしのやとの松かえ

このもとの道ゆき人もことふきて　高田利友
千年をまつのかけたのむなり

たくひなきみさをゝよもにあらはして　久野正熈
道あるみ世にあへる老松

など猶あれとさのみはかゝず。

丈右衛門先生は萬延元年四十三歳にて身まかれき。さばかり心をこめられし愛子を失はれし都尾子には、いかに歎かるゝならんと人々氣つかひあへるに、都尾子は、今出發せんとする時、みつから起てしばし待てとて、つか〳〵と進みより、棺の蓋をたゝきつゝ、丈右衛門よゝゝ汝は老母と子供とを遺していかに悲しくおもふらん、されど今はゆめ〳〵思ひをのこすことなかれ、汝か愛子の教育は、この老母か必引きうけんものぞなどいはるゝこといと切なるに滿坐の人々袖もしぼりあへぬまでなれば、席にありける高原淳次郎氏堪へかねて後よりいだきとめて強て本の座につかしめきといふ。この丈右衛門先生は藩立時習館の句讀師をつとめ、眞君子の名を得たりし人なり。故元田樞密顧問官の六友の一にて（六友とは長岡監物、下津休也、横井平四郎、荻覺兵衛、道家角左衛門、湯地君なり元田氏五樂園詩鈔にこの詩あり。）純乎眞君子、似茹秋實飮醇酒とまで賞せられたる人なり。これ全く都尾子の教育によれるならん。

明治十年西南の戰爭起りし時は、都尾子には、八十二歳の高きよはひに達せられたりしが彈丸をくゞり炎をさけて露宿せしことも數度なりしかども、すこしも氣象のおとろへしさま

も見えず、常に孫の二人(丈雄君恒雄君)の官軍にあると、甥の二人(佐々千城君友房君)の賊軍にあるとを氣にかけられたりしも、强ひてその正邪をいはず、忠戰の爲に死なんこそあらまほしけれとのみ語りをられきとぞ。

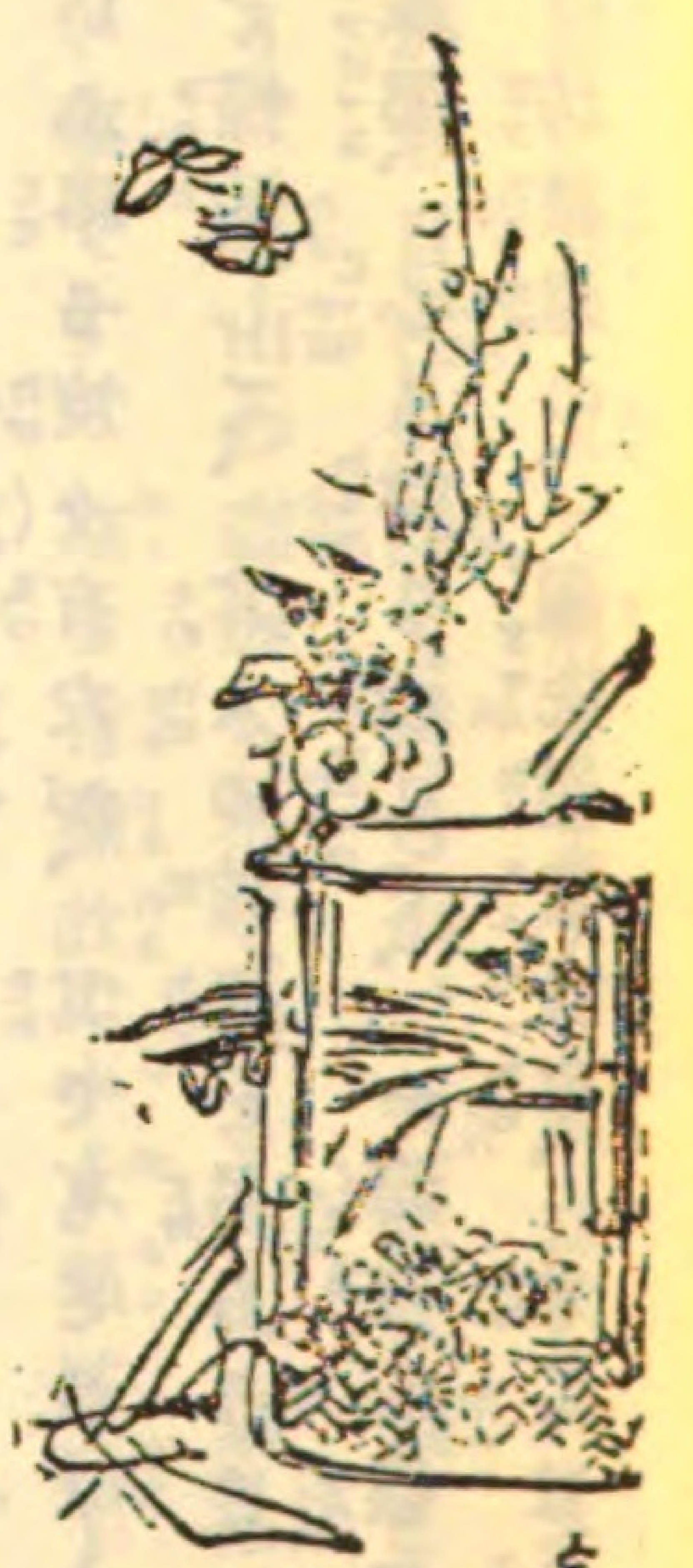
軍をさまりて丈雄君は、　愛知縣に奉職らせれしかば、こゝに上りたまはずやと申しおくられし時、都尾子には、汝が國の御爲に盡すに便よきところならば、いづこにても、いとはじといはれしかば、やがて連れ上られしといふ。さて幾ほどもなくて病の床につかれしかば、人々心のかぎり看病するを平生藥を厭はるゝにも似ず、足らぬばかりに飲みほされぬ。看病の人々あやしみ問へば、われ年おいて命をしむにはあらねど、はるばるこの國に連れ來てやがて死にたらんには、汝等の孝養あだになりていかばかりかくちをしくおもふらん、それがいとほしさに、苦き藥をものみて今暫し生きのびんとおもふなりといはれきとぞ。さはいへ、天命はいかにともしかたくて遂にその年の十二月十一日枯れゆく木の葉とゝもにこの世をさられしぞいともかなしきことなりけるやかて名古屋新出來町德源寺といふに、その作法して葬りぬ。法號を榮艮院松室貞操大姉といふ。あはれ籬の菊のその薫り高く佐敷の浦波ととこしへにその操を仰ぐものゝいつの世にか絕えざらん。

湯地都尾子君の善言美行は、これにて盡きたるにあらず、今はたゞ丈雄君に逢ひて、聞し事の重なるかずかずを記しゝのみ。猶をわりにかきあつめて一冊となし女子の鏡と、長く世

に仰き見しめんとす。

明治廿七年のはじめつかた　義象識す





何處に？

嵯峨のや主人

是程戀ひ慕ふ父様母様に、小太郎がお別れ申したのは、まだ東西も知らぬ昔の事、其故哀なる稚子は、お二人のお顔さへ覺えては居らぬ、又如何なる御身分のお人歟？其も知らぬ、又生て此世にお居での歟、其とも彼世の人となッてお仕舞ひの歟？其も知らぬ、唯小太郎が知て居るのは、彼が三歳の夏、山王様の祭禮の日、京橋と日本橋とに大喧嘩が有て、江戸中の騒ぎで有たが、其混雑の眞際中、彼は或商家の軒下に、父を慕ひ、母を戀ひ、乳母を呼んで泣て居たといふ事。其を祭見物に出掛けた此閻魔堂の爺様婆様が、通りかゝッて不愍に思ひ、幸ひ家にはかゝり子もないから、伴戻て育てやらう、と爺様が抱取れば、泣くのを婆様が傍からすかして、手車で伴て來られた此目黒村の祐天寺門前、其夜から婆様の皺びた懐に眠ッて、村端の店で買て來た飴お菓子をねぶる、其が朝四暮三の猿轡、つい居馴染で爺様婆様と慕へば、彼方もほん／＼の孫の様にいつく

しんで、貧しい中に、冬はつゞれの古綿子、夏は洗ひ晒した單物、熱くなく、寒くなく、育てられる中、春秋幾度敷行かひて、終に今年七歳の春を迎へたといふ事、是丈は彼の知て居る事です。

然して小太郎が三歳から七歳になる其間の生長の有様は、別段之といふて話す程の事もないが、まあかい摘んで記さうなら、爺様は其名を天人の力造と云て、若い時は、辻籠渡世で其處等中に飛歩き、江戸長、大金邊の本場を渡て、臨分腕を鳴したものだが、今では年を取て大に老込み、此様商賣は永くやるものでない、と發起して、故郷目黒村へ退ぞき、閻魔堂の堂守をする片手間は、朝から天秤を肩に當て、丹波酸漿や海酸漿や、と諸方を賣て歩くのが稼業。婆様は其名をお鐵と云て、生抜の江戸ッ子、若い時は茶屋女をしたものだが、力造の天人の花繍の稲背の所に、ぞッこん魂を打込で、とう〱落こちとなり、惚た同志親方の家の裏長屋に世帯を持ち、初鰹魚の味も味ひながら、引窓から細い煙を立てるのを樂しみ、痴話口舌の餘には、折々大喧嘩をやッて、近所合壁を驚かし、出るの引のといふ事も度々有たが、其でもとう〱添遂て、今では中の好い爺様婆様、萬人の人の石塔を掃治して、其人の菩提を吊らうといふのが、此婆様の心願、其故他呼んで萬人塚のお鐵婆、心も躰も頑丈で、一癖有る様に思はれるが、其實性質善良の者で、夫の留主は寺の坊様達の、濯洗濯賃仕事、兼ては此堂の堂守をしながら、樒の

花を墓參の人に賣て、細い煙で立て居ります。家はといふと疊は四疊半敷で有る計、片隅に爐が切て有て、上から自在が降て居るが、之には鍋と茶釜とが、時々ちやんばんに掛られて、其が竈の代り、裏山の森から拾て來る杉の葉枯枝を突くべて飯を焚く、實に貧家の暮しは造作もない事です、斯る有樣故、小太郎は殆んど捨育に育てられるのだが、幸ひ寺の坊樣がいとしがッて、左樣野放圖もなく遊んで居ては、行末碌な者にはならぬ、手習を敎てやらう、寺へ來といふに嬉しく、六歲の春から寺入して、いろは四十八文字も人並に覺え、都路は五十路餘りに三の宿、時得て咲や江戶の花、といふのをも習ふ仕合せ。寂然といふ上人の言はれるには、此お寺の開山祐天上人といふお方は、元は物覺のわるい方で有たが、不動尊を御信仰なすッて、三七二十一日の斷食、其滿願の朝、不動尊の長劍を呑むと夢みて、洞然として大悟徹底、終に天下の名僧とおなりなされたちや、お前も爺樣の繼嗣となッた所で、高が閻魔堂の堂守、其よりは圓頂黑衣に姿を變へ、佛の御弟子となッて、天晴名僧に出世しては如何ちや？と折々お勸めなさるので、彼も其氣になッて居ました。

然し彼は生長に從がッて、近所合壁の小兒と其身とを比較して、窃に怪んだ事が有ました。他の子は、或は正月と歟、初午と歟、或は盆と歟、祭禮と歟の物日は云ふに及ばず、たゞの日も、或は父に手を牽れ、或は兄弟を笠に着て、村一杯幅をきかすのに、予には

何故父様も母様もないのであらう？　何故村中一番の貧乏人、村中で一番勢のないは堂守といふ爺様婆様の外、力になる者がないので有らう？　父様母様は如何したのであらう？と斯思ッて或日婆様に其仔細を尋ねました。すると婆様のいふには、眞の所は、私等お前は私等二人の孫ではない、お前は三王様の祭禮の日、迷子になッて居たのを、私等二人が拾ふて來たので、お前の父様母様は何處の誰で有る事やら、今日まで少しも分らない。然し只後の爲めに、と貧苦の中にも大事にかけて、仕舞て置ものが一ツある、其は其時お前の着て居た衣服で、と古葛籠の底をはたいて取出したのは、丈夫の帷子、と緋博多の帶、と西陣織へ家の定紋の立葵を、黒く縫取らせた巾着、始て之を聞た小太郎の驚きは如何斗？今が今まで誠の爺様婆様とのみ思ッて、我儘一杯にして居たに、其が誠の爺婆でないとは。彼は此三品と婆様の貌とを、暫くの間は見比べて居たが、迂詐だあ、彼様迂詐を言て、拾ひ子の者歟、予が、拾子は厭だよ予は、と言て眞としませんでした。其も其筈で、穉心にも小耳に挾んで居る世間の話、繼子は大壯意地目られるものだといふのに、予は此様に可愛がられるのだもの、是が如何して拾子の者歟、と斯思つたからで有ませう？　然し婆様の懇々と拾子の因果を含めたので、終には全く左様歟なと信じ、唯何がなし悲しくなッて、婆様に取着て泣出しました。婆様も又泣出して、おゝさうと知ては悲しからう！　又兩親にも遇たからう！　然し何處に如何して居る事

やら、之を尋ねるのも雲を掴む樣なもの、何事も時節が來ねば、と諭さるゝに承知して、涙を袖で拭ながら、其時は得心して仕舞ッたが。さあ其からといふものは、他人の爺樣婆樣の情嬉しく、親知らぬ父樣母樣戀しく、今までは何も知らず、手習から歸りさへすれば、わッぱすッぱと遊んで居たものが、さうしては爺樣婆樣に何處歟濟ぬといふ樣な心も出て、俄におとなしくさへもなりました。又父母を慕ふの餘り、折々は小やかなる頭をかゝげ、可愛らしい目を下に向て、何處に如何してお居でなさる事やら、と物思に沈む樣な時も有ました。

斯る間に月日は早く經て、小太郎が七歳の暮も、今や終に間のない臘月半となッたが、一日斯いふ事が有ました。恰度其日は、朝から天も灰色に曇り、雪を催す野原の風、霜を吹て最寒むく、寺の坐敷に手習をして居る小太坊も、硯の水氷り、筆を持つ手の凍へるに弱り果て、幾度歟息を吹かけて居たが、其でも感心に八時迄辛坊して、持て往た丈の草紙は習ひ終り、おゝ寒む小寒むと呼びながら、ふるへあがッて我家へかけ戻りました。歸て見れば、爺樣は天氣がわるいので商賣は休んだが、庄屋樣へ傭はれて行たとて家には居らず、婆樣は寸白で下腹が痛いとて、古夜具を後から羽織は地爐の前に蹲踞り、枯枝打くべてあたッて居ます。小太坊は心配さうに其傍へ差寄り、不可ねへお婆樣、さすッてあげやう歟？なあに、さすッて貰はないでも宜が、小太坊や、私はお前の歸る

のを待て居たよ、今日は是此通り寒いから、晩には屹度雪であらうが、若雪だと當分焚附が拾へないから、さつきから往て、拾て來やうと思ふけれど、何分お婆樣は、お肚が痛くッて不可から、お前寒からうが拾ッて來ておくれな。あゝ宜とも拾ッて來てあげやうと、直立擧るを婆樣は止めて、まあさう急がずとも宜よ、一温温てからにしなよ、此寒いのに風でも引と不可から。あい其ではあたッてから行かう。と小太は婆樣の傍に腰を落し、兩足を地爐にさし入れて、股を廣げて當りかけます。婆樣は傍の焚附箱から、枯枝を握み出して打くべれば、ぱッと燃揚る火に小太坊は兩手をかざして温ります、婆樣は其の手首を握で見て、おゝ冷たい、此樣氷の樣な手をして居て、よくお前之で寒くないなう。憐むが如く言へば、小太坊は笑ひながら、寒いやあね、お寺の座敷は寒いのだもの。さうだッたらうなう、もッと此方へ寄んな、お婆樣の夜具をかけてやるから。と羽織て居る掻巻を、小太郎に半分かけてやり、彼の肩から自分の手を廻はして、抱へ込む樣にして温らせれば、小兒は血の氣の多いもの、況て今迄寒い所にかじかんで居て、今俄に火に温るなれば、元より小太りに太ッた小太坊、血脈を循環する血のめぐり早く、挿して居る手は薄紅の色を染めて、力瘤隆々と持上り、可愛らしい貌にも、幽に散す秋の薄紅葉、ふく〳〵とした頬の邊から、ぼちや〳〵とした二重腮にかけては、一際色深く、目の色冴て、逞しい姿、骨格、宛然坂田の金坊がおさな姿歟とも見えます。傍の婆

樣は藏人某の妻、其山姥のなれの果ではないが、然し眉には三冬の霜を戴き、額には皺海の波を寄せて、目の縁の皺緊く、躰の皮こわく、身の中骨立ちて、然も六十餘年の秋の霜、浮世の風波凌ぎ來た證據著るしく、口元の箝と緊締た所に、意思の强を示して居るは、流石に敬すべき所でもありませう歟？然し彼女を以て小太坊に比べると、小太坊は春を待つ間の花の蕾、婆樣は風を待つ間の萎れた花。一人の前には、浮世、生活、仕事、命、他の前には、墓場、老朽、退屈、死。一人は浮世の海へ乘出す人、一人は浮世の海より退隱する人、然し二人共今は浮世の戰場には遠い人です。然も二人は祖母でもあり孫でも有ると同時に、又中の宜い朋友でもあります。斯る例諸君は澤山に御覽でせう、如何に老嫗老翁とが、孫を相手に其日其日を樂しく送る歟を。是一は老嫗老翁の經驗を聞て、知らず〱浮世の生活を想像に畫き、他は其經驗を語て轉ばぬ先の杖となるので、然も其間には靜なる愛情が通て居て、靜なる家庭の樂を作ります。

今婆樣は孫の丈夫さうな風を樂しむ如く眺めつゝ、其身の骨立た腮を、孫のふさ〱と綠色の髮の毛に、さもいと惜し氣に押當て、扨靜にいふには、小太坊や、お前手習を精出して能しなよ、男は何になッても字が讀めなくては不可からなう。爺樣なんぞを見な、手習をした事が無から字が一ッ讀めやあしない、此間もお寺で火伏の御祈禱札を倒に張て笑はれたに。彼が眞の明盲目で、目が有ても節穴同然といふのだ。お前は彼樣になら

ない様に能精出しなよ。おゝ精出すとも、予は手習を精出して今に立派な人になッて、お爺様やお婆様に樂をさせるよ。彼は稚心にも婆様を慰める氣と見えて、可愛らしい事を言へば、婆様は嬉しさうに微笑ながら、何卒早く左様なてッくんなよ。世間の年寄は若い中骨を折ても、子といふ者が有るので、年を取てから樂をするが、我等二人は隨分若い中も骨を折たが、子がないので樂も出來ず、行末は如何しやうと苦にして居た所、ふとお前といふ者を育てるやうになッたのは、之は是天から授かッたのだ。さう思ッて小さい時から貧苦の中で、やッとまあ是迄にした其骨折、勿々仇や愚の事ではない、何卒其を忘れておくれでないよ。我等二人は外に身寄も親類も無躰、お前でも之れ大きくなッて、私等を養ッてくれないでは、お老爺様もお婆様も今に足腰がきかなくなッてから、如何する事も出來ないから。と憂を含んで物語れば、小太坊は爺様婆様の身の上哀に、之迄育てくれた海山の情身に染て嬉しく、顏をふり擧て婆様の方を見れば、老の目には涙の玉が漂ッて、今にも落やうとして居ます。小太坊は之を見て、婆様をいと惜む心愈々深く、耳に止まる老の言葉、思ひやれば更に悲しく、覺えず涙を溢して、大丈夫だよ、今に立派になッてお爺様やお婆様を樂にするから、お案じでないよ。言ッて涙を袖で横撫すれば、婆様は何にも言はず、覺えず緊縮と小太坊を抱へて、其で孝心を感謝する如く、ほろ〳〵と涙を落します。小太坊は氣の毒さうに婆様の方を見て、お婆様が

其樣事を言ふものだから、予は悲しくなッて來たあ、と頑是なく言ひ放ちて、どら其では予は往て挾附を探て來やう、と立にかゝれば、婆樣もかゝへる樣にして立せながら、其では寒からうが探て來ておくれ。なに寒いもの歟。と小太坊は元氣よく土間へ飛び降り、隅に置てある大きな目籠、二本の荒繩を通して背負ふ樣に出來て居るのを、いきなり引摑でよッこらさ、表へ飛出すと大きな聲で、主は政宗、私やさび刀、主は切ても私や切れぬう！と節面白く歌ふ麥歌の聲、物寂しい田舍の空氣を搖ッて、空高く聞えたが、やがて其聲も次第〳〵に遠去かッて、終に全く聞えなくなりました。

婆樣は暫時其歌に耳をかして居る樣で有たが、あゝ小兒といふ者は、頑是ない元氣の者だ、此寒いのも厭ひなく、歌を歌ッて出て往たが、可哀相に！是が世にある人の子なら、手習からでも歸て來れば、おゝ嘸寒かッたらう、早く炬燵へ温んな、御褒美に何をやらう、何が宜へなぞと荒い風にも當てず、大事に育てられるのだが、私等が樣な貧乏人の手で、育てられるのは彼子の不運だ。彼も着て居た着物で見る、と親は流石に困る人とも思はれぬが、如何なる過去の因緣で、私等二人に育てられる事歟、嘸兩親も探して居らう。彼も又今の中こそ頑是ないが、彼通の利口者で、私等二人にも孝行だから、行末大きくなッたら、嘸兩親にも遇ひたがるで有らう！可哀相に、彼樣目籠を背負て、乞食の樣に枯枝を拾に行のを、何とも思はぬ心の中、眞にまあいぢらしい！不便な—

と老の目から恩愛の熱き涙を溢しながら、種々の事思ひつゞけて居る時へ、遙の遠くで、節も哀な麥歌は、慥に小太坊の歌ふ聲。これさ土百姓斬るぞと云ふて、長い刀で威すのはおよし、胸にや目黑の不動尊、腕にや女のいれぼくろ！と歌ふ聲も次第次第に近くなッたが、小太は我家の前でぴたりと歌を止め、お婆樣採て來たよ、と外から聲かけて家へ這入れば、婆樣は障子を開て見て、お丶御苦勞〳〵、嘸寒かッたらう、早くあがッて温んなよと言ふ。小太坊は頭を揮て、うむ、予もう一度往て取て來る。なあにもう其で澤山だ、其丈有れば五六日はあるから。だッて雪がふると、彼處は日陰だから容易に解ないよ、もう一度往て取て來やう。さう歟、其では少し温て行なよ、寒いお目をして腹でも痛くすると不可から。なあに、温ッて居ると又往のは厭になる、序に採て來て仕舞はう。さう歟、御苦勞だなう！なあに、譯は有はしねへ。小太坊は目籠を引かつぐと元氣よく、表へ飛び出して麥歌高く、お前一個歟、連衆はない歟、連衆は後から籠で來る！歌ひながら往てしまひました。

婆樣は腹の痛いのも少し愈ので、掻捲をはね退けて立揚り、あゝ何もしない程退屈の事はない、どら繼物でもしやう歟。獨語を言ひながら小太坊の古足袋を取出し、其破を丹念につゞくり始めました。其より餘程經てからの事、爺樣は庄屋の仕事を終り、酒を馳走になッたとて、大壯な機嫌で歸て來たが、小太坊は以上經ても歸て來ません。爺樣は

地爐の前に大箕踞をかき、腮の髯をぼつ〳〵毛拔で拔て居たが婆樣に向て、小太の野郎は如何しやがッたのだらうなあ、大變に遲いぢやねへか？　さうだねへ、如何したのだらう？と二人は心配をして居たが、待ども待ども歸て來ません。爺樣は少し尖り聲で、手前又此寒いのに左樣幾度も焚附などを拾にやる事はねへや！　全體手前はそん氣だから不可、もう少しやさしくしろい、幾ら丈夫だッて七歲だ、彼樣抱量の無者を、此樣寒い日に外へ出して置て如何するのだ？　間拔奴！と我鳴を食はせれば、婆樣も少し膨れて、何も私はそん氣にしやァしないやね。私がお肚さへ痛くなければ、お前に言はれる迄はないよ。此樣寒い日に、何も焚附なぞを拾に、彼子を出しはしないやね、私が生憎お肚が痛いものだから、其で彼子をやッたのだあね。其も一度は宜と言ッたのだけれども、彼子が雪がふると容易に又拾へないから、と言ッて出てゆくのだもの、仕方がないではない歟？　其をよ、手前が叱ちかッてッも止めれば宜のに、好氣になッて出してやるから、間拔だといふのよ。はい〳〵大きに私が惡うございました。えゝいま〳〵しい！　小太坊も小太坊だ、早く歸てくれば宜のに、何をして居るのだらう？　又庄屋樣の所へでも這入て居るのではない歟？　彼子は眞成に偏な子だよ、此間も私に何をいふ歟と思ふと、斯うさ。お婆樣、庄屋樣の御新造は好人だねへ、私を大變に可愛がッてくれるよ、私の母樣も居ッたら彼樣人だらうと思ふよ、彼人の樣に可愛がッてくれるたら

うと思ふよ、彼人が私の母樣だと宜なあ、私は時々彼人は私の母樣ではない歟、母樣かも知れぬと思ふよ、と斯さ、とまくしかける樣にいふのは、多分小太坊が、自分達より眞の親の方を、餘計慕はせぬ歟といふひがみからで、其も畢竟は愛から、思へば無理ならぬ事です。爺樣は婆樣の話を聞て、小太坊の愛度氣なさを愛する如く、からくと高く打笑ッたが、今までの不機嫌の貌も直りて、左樣歟、可哀相に、幾ら頑是なくッても、彼でも親の事は思ふと見えるなあ。あゝさうらしいよ、此頃は何だ歟、時々ぼんやりと、一層考へて居る樣な事があるもの、佶度親の事を思ッて居るのだよ。さう歟、可哀相に！遇はしてもやりたいが、と言て何處を如何尋ねて宜歟、隨分人には多く賴んで置くが、元々雲を握む樣な尋ね者だからのう！ 其に又尋ね當てたら、佶度先の兩親が、小太は伴て行てしまふだらうし、是が又伴て往たッて、眞の親では仕方かなしのう、やらすばなるめえからのう！といふ其心可愛い小太を小離してやるのは厭だが、親が子を伴て行に不思議もなければ、やらぬ理にもなるまいし、義理と愛との結び目、誠に解くに解かれぬ所でせう！ 婆樣も點頭て、さうさねへ、若し見當ればやらずばなるまいが、と言て少さいから是迄にしたものを、今更やるのは厭だしねへ。其は伴て行く日にや、養育料と歟何と歟云て、金の少しも置てゆかうと思ふだらうけれど、此方と等は又慾德づくで育てたのではないから、若し又其樣事でもしやがッたら、金を親の貌へ叩き附て、

私は食附てゝもやるよ。さうなれば小太坊も緣切だ。と今小太坊を伴てゝも行歟の如く言へば、爺樣も心配さうな屈詫貌で、正可先の親だッて、左樣分らねへ人でもあるめへ。若又大變に分ッた人で、小太も伴てゆくが、お爺樣もお婆樣も一所に引取て往からお出でなさい、と言はねへものでもねへや。と言へば、婆樣は莞爾して、さうさ、左樣なれば又頂上だが、と言て其尾に附て引取られてゆくのも、氣の毒だねへ。其に又さうすると何だ歟慾德で彼子を世話した樣にも取れて、厭だねえ。左樣よのう、其も左樣だのう、如何したら宜んべいのう？と爺樣が言へば、婆樣は少し小膝を進めて、私の考では、斯したら宜らうと思ふよ、其は眞の親の事だから、小太坊はお前樣の方へあげる、あげるが其は名丈にして、私等も之迄に丹精して、此通り私等にも馴染み、私等も彼が居なくては寢覺がわるいから、何卒躰は何方へ置かして下され、と斯賴んで見たら如何であらう？と言へば爺樣は笑ひ出して、手前も隨分子供のいふ樣な事をいふ、其樣手前勝手を誰歟承知するもの歟、其に第一其では小太坊が可哀相だ、立派な兩親の家へ歸されず、此樣貧乏の爺樣婆樣の所へ置れては。と言へば、婆樣も點頭て、其なら如何したら宜らうねへ？だからよ、予も如何したら宜らう歟と思ッて、前刻から種々工夫して居るが、如何も好工夫も出ねへのよ、と萎れ返れば、婆樣も打萎れて考へて居たが、やがて又貌をふり揚て、だが之は當人次第だね、當人が返りたいと言へば返すし、當人が

此方に居たいと言へば返さない、當人次第にすれば宜やね。之を聞た爺様は、手を打て喜び、左様だなあ、成程甘い所へ氣が附た、當人次第にすれば宜なあ、是は左様だ。と言て考へて居たが暫くして又失望した様に、否、無益だ、當人次第にすれば、其はお前親の方へ行度に定て居らあ、言はずと知れた事だと。言へば、婆様は頭をふッて、否左様とも定らないよ。だッてね、前刻も私と此處で當りながら、今に予は立派な人になつて、お爺様やお婆様に樂をさせるよ、と言て居たよ。爺様は此一言を聞て、眞から嬉しさうに莞爾として、左様歟、彼様頑是なくッても、其でも予達を其程に思ッてくれるかなあ！有難い、可愛い奴だ！と嬉し泣きにぼろり〱と涙を膝に落して居ます。若い時は鬼の様な男でも、老ては其丈に人情も深ければ、是は其筈で有ませう。婆様も又涙を溢しながら、其様可愛い事をいふのだもの、如何してお前さん、是が手離せますもの歟ね、と彼一句是一句、二人は種々の事言ひ續けて、暫く涙の雨に泣て居たが、やがて爺様は笑ひ出して、え丶馬鹿々々しい、小太の事といふと、い丶年をして何時でも泣たり笑ッたりだ。何も是、今親が知れて明日でも伴て行と云ふのではなし、知れた曉にはといふ事だのに、今からさう心配する事もねへ、と家では老夫婦が泣たり笑ッたりして居るのに、ハテ我小太坊はまあ何をして居るのでせう？

小太坊は目籠を脊負て裏山の森へゆき、焚附を拾て歸て來る、と小兒は何れも寒いのに

は平氣、村の小兒七八人、畑中の小道に遊んで居たが、小太坊を見て、一人が、おい小太ちやん、何處へ往ッたの？　と近づけば、他の子も打伴て傍へ寄て來ます。其中年重の意地惡者、此邊での餓鬼大將、嘲る樣に小太坊を小突て、やい小太公、手前此焚附を何處から盜んで來た？　予の所の山からちやねへ歟？　小太坊は驚て盜んで來やアしねへよ、拾て來たのだ、祐天寺の山から。何だ？　盜んでは來ねへも宜出來た。拾ッて來たッて、他の山の物を拾て來るのは盜むのと同じだぞ、若し左樣でねへと言ふなら、手前予の所の坐敷にある物を持ち出して往て、其で盜んだのでねへ、拾ッたのだといふの歟？　此盜賊野郎奴！　祐天寺の山からでは有るめへ、予の所の山からだらう　手前の家は貧乏だものだから。他の家の焚附を盜むのだ。盜賊してやッと飯を食て居るのだらう？　返せ、返しやがれ！　と言ひながら咄嗟に籠へ手を掛て、中の焚附を引出さうとしました。小太坊は最前からじり／＼と腹が立て、堪忍のなり難い所であるが、利口者丈に心の中で、此奴は名代の餓鬼大將、殊に此奴の親父には、爺樣婆樣が世話になるし、又喧嘩をしたッて勝ないから、とじッと辛坊して堪へて居たが、切角寒いのを我慢して、やう／＼拾て來た焚附を、何の容謝もなく握み出して、打棄るのを見るや、堪忍なり難く、前後の思慮も忘れたは小兒のこと、怒り心頭に燃え揚ると、可愛らしい拳をふッて、不意に相手の目と鼻の間をぱかり、火花目から出て件の小兒は

少しひるんだが、何しおふ餓鬼大將、何條小太坊如きの一擊に屈すべき、足を踏み直すと、予れ！咄嗟小太坊を引捕へました。小太坊負まじと爭ッたが、何しろ彼は、體より大きい目籠へ充溢、澤山の焚附を背負て居るので、働き大に自由ならず、忽ちづでんどうと倒されました。無念！起上らうとする間もなく、敵手は彼の上へ乘しかゝッて拳の雨ばら〳〵〳〵、打れながらも小太坊は、下から惡童の貌をかきむしッての防禦、今や大變の場合です。他の小兒は唯立たまゝ見て居る斗、然も皆強きに味方をしさうな風、無念、畜生奴！

折しも通りかゝッた往來の人、大きな聲で叱ッたので、小兒等は皆散々に逃てしまひました。小太坊は早くも起直ッて、逃ゆく小兒等の後姿を口惜しさうに見送ッて居る、と往來の人は傍へ差寄り、あゝ亂暴な奴等だ、何處歟痛めはしなかッたかへ？と案じてくれる有難さ、小太坊は頭をふッて否、痛めはしない、如何も爲はしない。さう歟、其は宜かッた、と落散て居る枯枝を拾て籠の中へ入れてくれる其信切、小太坊身にしみて嬉しく、伯父樣有難うよ、あゝ痛かッた、と額際を押へて苦笑をするに、其人も安心して見返り〳〵往て仕舞ひました。後で小太坊は目籠を其處へ投出し、切株へどッかと腰をすへて、聲を忍んでさめ〳〵と泣て居たが、やがて涙を拂ッて、あゝだから父樣や母樣に遇ひたいなあ！太い溜息をほッと斗に吐て、ヂッと前面を眺めて居ました。此時

彼の目前には、廣々とした畑を隔て、目黒不動の森霞み、左には或家の梅林續て、繋る枝の網の目洩れて農家の屋根が見えたり、かくれたり、右には庄屋の屋敷から裏庭の端を、暮煙が朧に立籠めて居るが、何處も同じ冬の夕暮です。彼は今之を見て居るのでせう歟？否、さうで有ません、彼の目は一ッ所を見詰て居ます、とんと今の喧嘩の事は忘れた如く、靜り返ッて、何事を歟深く考へて居る樣です。そも何事を？兩親の事でせう歟？

餘程時も經ました。サッと吹おろす風、散り殘ッた梢の枯葉を拂ッて、耳根をかすむる其寒さ、小太坊覺えずぶる〳〵と身をふるはして、恰も眠から覺たもの丶如く、四方をきよろきよろ見まはしたが、やがて立揚ると、又甲斐々々しく目籠を背負あげ、家路をさして歸りかけました。行こと四五十間、庄屋樣の門前を通る時しも、其處の飼犬のむくといふむく〳〵太ッた大犬が、小太坊の姿を見るや否や、尻尾をふつて飛んで來ました。此の犬は小太坊の朋友です。小太坊は足を止めて其頭を撫てやれば、むくは愈喜んで其躰をすり附ます。然し小太坊はもう犬の方はろく〳〵に見もやらず、頻りに門内を伺ふ樣子です。是は多分、彼が母樣の如く戀ひしがる庄屋の御新造が、若しも見えはせぬかと思ふからでせう！あら嬉しや！折しも庄屋の御新造は、ふと窓から其やさしい貌をさし出しました、あれ雪でも降はせぬ歟と案じる樣に、天を眺めて居ます。其姿を

又小太坊が、如何程懐しさうに眺めて居ますでせう歟?嬉しや、其人は此方を見ました。あら、小太坊を見附て小手招をします。小太坊は嬉しさうに、重さうな目籠を背負ッた儘、あへぎ〳〵走寄ります。あら笑止や!むくも一所になッて、尾をふりながら、小太より先にかけ寄ります。小太は低くお辭儀をして、懐しさうに其人を見れば、其人は莞爾やかに、小太坊、お前何處へ往たの?よや焚附を採にかへ?寒かッたらうにねへ、よくねへ。待てお居でよ、今御褒美に御菓子をあげるから。言ひ捨て往て仕舞ひました。小太坊は窓の下に立て其人の再び出て來るのを待て居る、と誰とは知らず、不意に小太坊の頭を、むづと寸握む人があります。禁裡守護の渡邊黨、箕田の源次綱が羅城門の昔はいざ知らず、征夷大將軍の御膝下近くへ、白晝鬼の出る所以もなし、誰であらう?小太坊ふり仰向て見れば、庄屋の一個娘、今年十三のお稲孃が、殘の雪を欺く素き手で、自分の頭をつかんで居ます。小太坊其手を拂ひ退て、あゝ吃驚した。莞爾笑へば、お稲孃もほゝえみて、驚たかへ?勘忍しておくれよ、ホヽヽ、と二人顔を見合せて笑て居る所へ、孃の母親は窓の月を澤山、紙にくるんで持ち來り、其をいざとて小太坊にやりました。小太坊は嬉しさうに一寸戴き、御新造様、明日遊びに來ても宜かへ?あゝ宜とも、お出でよ。左様、其では左様なら。今日は家で待て居るから。と挨拶をして此處を出で、君に別れて松原行けば、松の露やら涙やら。といふ流行歌を歌ひながら、

我家をさして歸りました。
歸て我家の前迄來て見れば、家にはもう燈火が點て居ます。小太坊は表から、お婆樣！一句に慕しさを呼んで入れば、おゝ小太坊歟、大壯遲かッたのう？如何した？今爺樣と案じて居た所だ。さう予は庄屋樣へ寄て居た。左樣歟、寒かッたらう？早く上れよ。あゝ、寒かッたよ。と言ひながら目籠を其處へ置き、急いで上へあがります。室は寢るにも起るにも、四疊半の一間切、其に三尺の地爐が切て有るから、狹い上にも愈狹い。爺樣は地爐の前に箕踞をかき、腮を撫撫鬚を扱て居ると、婆樣は其向ふに坐ッて、火箸で爐の火をかいげて居ます。火爐には自在が降て居て、其に鍋がかけて有が、粥でも煮て居るものと見えて、蓋の隙から白い煙が立昇て居ます。室の眞中には古暗燈の、去年張替た儘のが置てあるが、其障子には、婆樣が夜鍋仕事の針の穴が、行列の樣にあいて居ます。暗燈は四角な影を天井裏にうつして、ぼんやり室内の物を照して居るが、其光の朦朧たる爲めに、四下何となく陰氣に見えます。一方の隅の棚には、小さな佛壇が載てあるが、之に先祖代々の位牌を飾ッて、燈明の光薄暗く、ひゞだらけの香爐には、一袋四文の線香が、哀にも二三本立てあります。香の煙は糸條を曳て立昇り、佛壇の中を舞ひ廻はッて居るが、やがて其簷を舐めて室内へすべり出づると、其處に煙の靄を形造り、更に焚火の煙と一致して、愈室内を暗くして居ます。又彼方の一隅には、

破れかけた一ッの古葛籠が、古屏風の影から半身を現はして居るが、其屏風の張交の光氏の君は、年頃の煤にふすぶり返ッて、此家の貧苦をかこち貌です。此他には室内雜物なし、誠に田舍貧家の有樣、見るから哀の限で有ます。

爺樣婆樣は、今上ッて來た小太坊の貌を見るや否や、二人等しく、さも可愛しさうに、如何樣に歟彼の貌を見るのが樂しさうに、さあ小太坊、此方へ來て溫んな、といふ其愛の深さわい！小太坊は何方で溫らう歟と立ッたまゝで眺めて居ると、爺樣は笑ひながら、何を立て見て居るのだ、早く來て溫れよ、といふに小太坊其傍へゆけば、爺樣は彼を抱へあげ、火爐の方へ向て溫らせます。小太坊兩足を爐の端へ落し、兩手をかざして當りかければ、爺樣は彼を抱き締て、髭だらけの頰をふく〳〵とした小太の頰にぽり〳〵と押當て、如何だ、爺樣は溫かいんべい？うむ溫けへよ。溫けへけれど、えらく酒ッくせえなあ。爺樣は高く笑ひながら、左樣歟、予は今夜庄屋樣で酒を飮んで來たから。さう歟、予は又庄屋の御新造に窓の月を貰ッて來た。と言ひながら、懷を探て之を取出し、さあ、お爺樣にもあげやう、とさし出せば、爺樣は笑ひながら、まあ宜や、予は、予は酒を吞んで來たから。宜やな酒を吞んだッて、其では一ッ、ね、一ッお喫な、さあ一ッ。とさし出すに、爺樣は元より左利、甘味は餘り好まぬ方だが、孫の孝心の嬉しさに、左樣歟、其ではと無精にも口で承取り、むしやり〳〵と食ひかけます。其貌を小太

坊は嬉しさうに見て、更に三ッ程取出して、さあ、お婆樣にもあげやう、お婆樣は酒を呑まないから澤山あげやう。婆樣も笑ひながら、まあ宜よ私も、また明日たべなよ仕舞て置て、と言へば、小太坊はだゝをこねて、厭だ、皆が其樣事言ッて、皆と喫るのが甘いのだからさあ、おたべよう！といま／＼しさうに言へば、泣子と地頭には勝れぬが世の習慣、婆樣も負て、左樣歟、其では一ッ喫よう歟のう。請取れば、小太は嬉しく、自分も取出して之を喫る、貧家の家庭にも、自ら一種の快樂は有ます。

斯て其中に粥も煮て晩飯も濟めば、食後は小太坊又爺樣に抱かれて火爐の傍、婆樣は繼掛の古足袋を取出して、暗燈の前で針仕事です。折から雪は果して颯々と降出して來たが、小太坊はもう平氣です。腹の中は粥で温るし、後からは酒氣で熱する爺樣の躰温で温るし、前からは爐の火で温るし、其好心持と言たら。爺樣は又、小太が歸ッたので安心はするし、晝の仕事で疲はあるし、酒には醉て居るし、其上育ち盛の小太の躰と、火爐の火氣とで、温められるので、頻に眠氣ざして來たので、こくり／＼と睡を始めました。折から雪は愈盛で、道踏み分て行人もなければ、世間は森と物寂しいのに、家の中の寂しさは尙一層、聞えるものは折々臺所で騷ぐ鼠の音計、其も靜まッては、後は茶釜のたぎる音がちん／＼と單調の音を發する計。小太坊は目も放たず、おさな心の物好に、焚火の影を見て居る、と釜底で弱々とふすぶッて居る火が、折々隙間洩る風に煽られて

は、ぱッと燃揚て釜底を舐、蛇の舌の如く、ちよろ〳〵と釜傍へ燃昇るが、其度に、室内ぱッと明るくなりて、押入の戸に婆様の影を怪物の如くに寫します。然し其も瞬間、消へては又薄暗くなつて、後は寂しさが天地を領して居ます。小太坊は見るともなしに、焚火の働きをヂッと見て居たが、ふと又何事を思ひ出して歟？深き物思に沈む樣でした。然し何と言ても小兒です、何時歟又ねむくなッたものと見えて、爺樣に抱かれたまゝ、うつら〳〵と眠て仕舞ひました。

斯て翌日は降しきッた雪があがりて、天は一點の雲もなく晴渡りました。小太坊は庄屋のむく犬と一所に、隣村の方へ遊びにゆきました。而してとある小山陰の大きな家の前へ出た時、其家から四十前後の上品の女が、立派な裝をして出て來たが、むくは之を見ると、馴染の人で、も有る歟？一散に飛んで行から、小太坊もむくを呼びながら其後へ附てゆきました。彼婦人は小太坊を見るや否や、駒下駄の音せわしく其傍へ寄て來て、これ小太坊や、お前まあよく尋て來ておくれだねへ。お前が山王樣の祭禮の日に居なくなッたので、母樣は如何樣に心配した歟知れないよ。と言ひながら自分を抱へあげる、其手より傳はる愛の温さ。目元には、母親たるの愛情溢れて、露僞のない風だから、小太坊少しも疑はず、是が戀しい、ゆかしい、母樣歟と思へば、嬉しさ胸に込上てひしと取すがれば、母は抱上た儘、其立派な家へ這入ッてゆきました。其間小太坊は殆んど夢中

で居たが、座敷へおろされた時見れば、其人は母ではなく、まがふ方なき庄屋の御新造、はッと斗に驚て母樣！母樣！と叫べば、これ小太や、如何した？これ小太や！呼ぶ聲は女の聲でなく、常に聞なれた爺樣の聲です。驚て目を開けば、是は如何に？自分は爺樣に抱かれたまゝ、宵の如く火爐に當て居ました。彼の前には立派の家の坐敷もなく、戀しい母樣も居ず、昔の儘の堂守の一室、火爐の火は前の如く、依然としてふす／＼とふすぶッて居ります、恰も小太坊の身の上を嘲る歟の如く。小太坊は其夜臥床に入ッてからも、永い間眠に就きませんでした、稚子はたわいなく眠るのが常なるに。小やかな彼の腦髓をめぐる思は、あゝ父樣母樣は何處に如何して？思へば彼の運命の哀さよ！

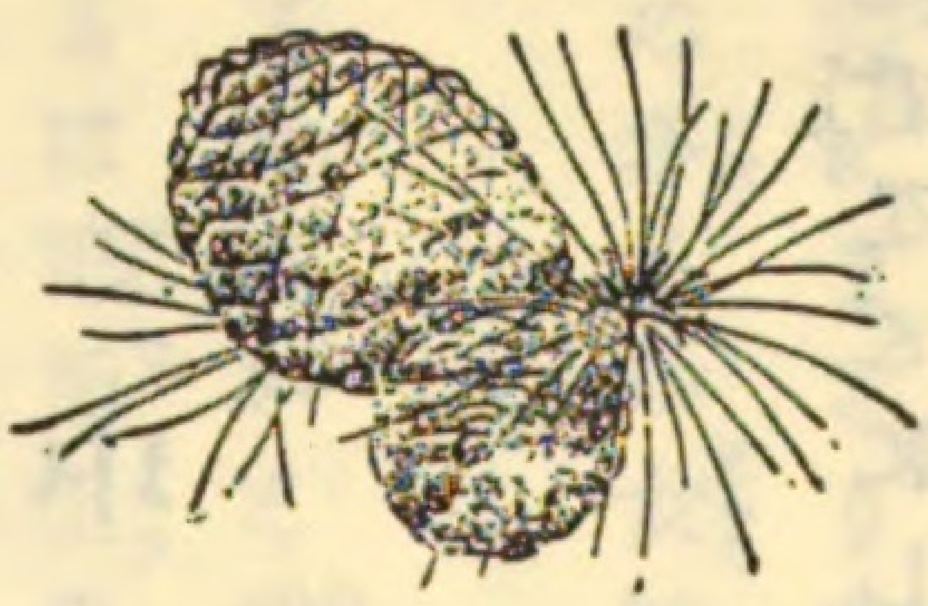
斯て此年も明れば、世は新玉の春を迎へて、小太坊八歳となりました。此年も別に變はッた事なく、正月、初午、桃の節句、菖蒲の節句、天皇祭、と光陰矢の如く過ぎて其年の夏、折しも盆前の熱い盛とて、婆樣は朝の中、皆が着改の虫干を爲し、尙天氣も好からとて洗濯をして居れば、小太は盆前で手習も休みなれば、家に遊んで居る所へ、表にあんぱつの籠をおろさせ、中より出たのは四十五六の品の好女、多分下町邊の大家の御新造と婆樣の鑑定間違ひなし、小太坊の家へ這入て來て、一寸お花を一ッ賣て下さいまし。へい／＼と婆樣は濡手をふき／＼出來り、花をいふまゝに賣渡してやれば、彼婦人

は玉銀一ッを取出して、之で取て下されといふに、婆樣は火鉢の引出から巾着を取出し、錢を突て勘定して居る間、彼婦人は其處に腰打掛け、都人の鄙珍らしさうに、頻りに室內を見舞はして居たが、ふと虫干の中に、小太が迷子の時の衣服を見附て、おやと言ッて大層吃驚した樣子でした。小太は目早く其風を見て、ヂッと婦人の貌を見詰むれば、婦人も物問ひたさうに、小太と衣服とを見比べて居たが、やがて釣錢を持ちて婆樣が出て來た時、婦人は釣錢には目もかけず、少し小膝を進ませて、若しお婆樣、つかん事を伺ふ樣でござんすが、彼處に見える小供衆の衣服、あれは如何して貴宅の所にあるのでござんすへ？　婆樣も之を聞き吃驚した風で、彼衣服に就ては海山お話もござんすが、して彼衣服の事をお尋ねなさるあなたはえ？　尋ね返せば彼婦人は愈々其と悟りて歟、目には早持つ涙の玉、袖でこすりて小膝を進め、お話し申せば永い事、五年以前の夏の事、山王樣の祭禮の日、小太郎と申す子を伴て、祭見物に出掛た所、喧嘩噪ぎて迷子にさせて、と事情を委しく物語れば、最前から耳を引立て聞て居た小太郎、覺えず其處へ走り寄ッて、母樣かいと言つた丈、すがり附て泣出せば、母親も、小太坊かい、よくまあ無事で……と言ッた料、ひしと抱締て泣出す母子不思議の對面、嗚呼其時の小太坊の喜び！　年頃ゆかしくなつかしく、何處に如何してお居でなさる歟と御慕ひ申した母樣、年頃眞の母樣に向て、唯一言母樣や言ひたいと望んで居た其母樣に、今不思議

にもめぐり遇た其喜び、まあ如何樣で有ましたらう！　此所讀者の想像に任せて、私は此處で此物語の筆を洗ひます。何處にと尋ねた小太坊の母親も、今はからず見當りましたから。

然し是より以後、我小太坊は如何しましたらう歟？　彼が養育の爺樣婆樣は如何しましたらう歟？　彼が眞の親達は如何しましたらう歟？　人生漠々として其消息を傳へません。思ふに彼等は、其生れた時の靜に何人にも知られざるが如く、其世にある時も靜に、其死する時も又靜に何人にも知られず、空しく古墳一基の主となつて仕舞たのであんませう！

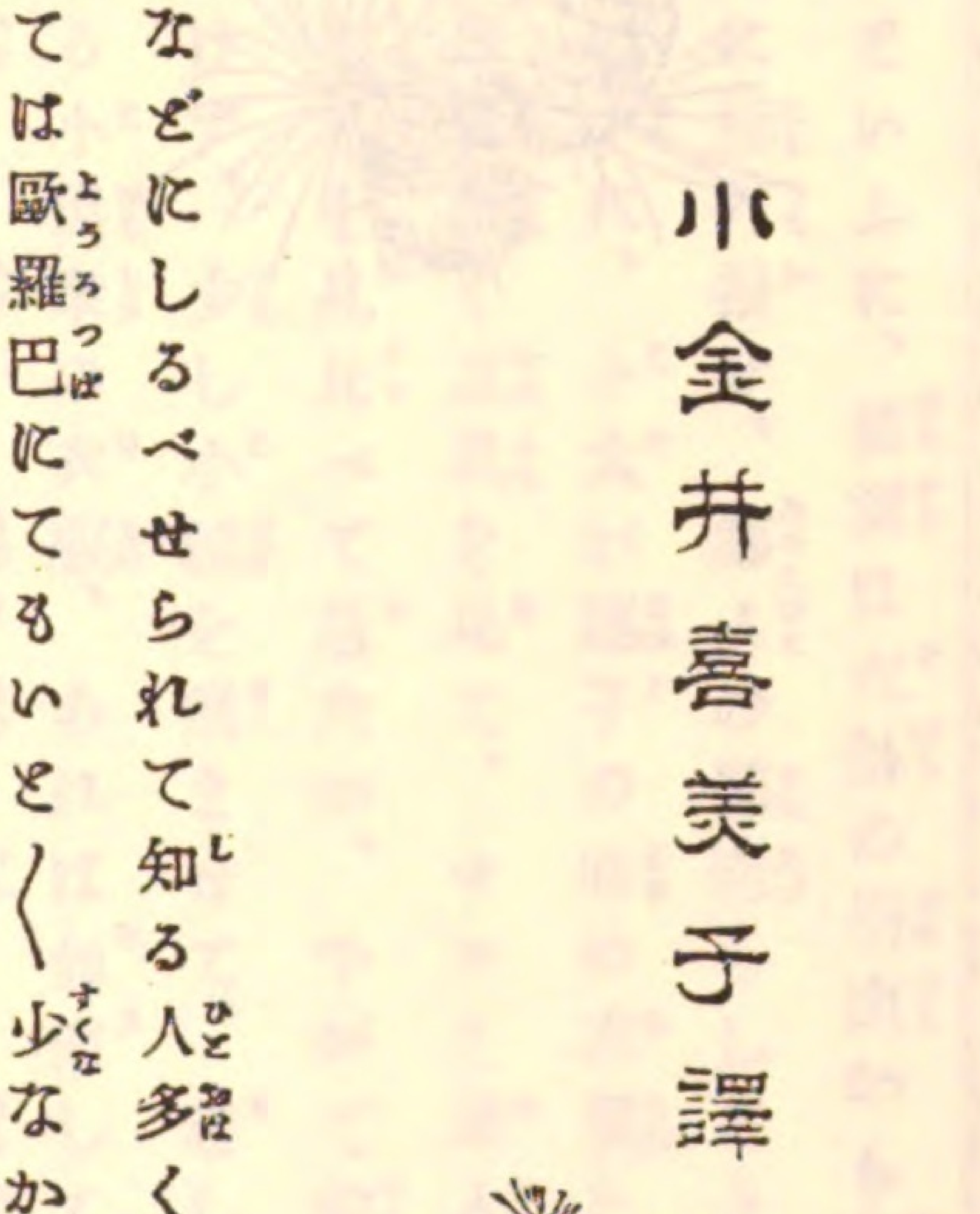
（終）





女子の言葉

小金井喜美子譯



ジャン、ポオルといふ名は内田遠湖君などにしるべせられて知る人多くなりにたれどそが文よむ人は今の世にては歐羅巴にてもいと〳〵少なかるべし我兄鷗外漁史ジャン、ポオルが小說のいみじうをかしきよしをほめたゝふるまゝにそをよむたつきを得こたび此文つゞることを得しも皆眞あつき惠なりこゝに抄譯志たるは「ジイベンケエス」と題したる小說の中にはさみしたはれ文なりすべて女の言葉多きはいつの世いづれの國がらを問はずいとかたはらいたきものなればこを抄譯したるも我戒となさばやとてなりもしよまん人さへ是によりて戒むるところあらばそは又こよなき幸なりとやいはまし

婚姻論をかきし人の言葉に物いはぬ女は恐ものなりといふことあり此言葉よこを稱へんは易くこれに從はんことはいと難かるべしその性さかしき女の女どちのむれにありてい

と言葉少きあり又極めて愚に極めて鈍き性なる女子にても男子の群に入りて言葉多きと又さならぬとあり或る人男の言葉につきて言ひおけることありすべて言葉多きは考ふること少きしるしなり鳴きさわぐ蛙も池の汀についまつをさし出すときは必ずなきやむものなりといひき

そが上女子の言葉多きは坐りていろ〳〵の業するよりや来るならん坐りて業とる男子はよしなき事を思ひ又多く物いふことと女子と異ならず細工人したてや靴つくりむしろ織なと皆さなり

女子の手わざすなる小机は誠によしなしことと思ふ爲の碁盤なり編ものゝ針は一間を夢の満たる怪しき島となす魔杖なりされば戀に曇りし女子の心を晴さんには一巻のふみ一ひらの消息のうた其あめる四足の靴足袋にまさりたり未開の國の人は猿の物いはぬはしごとせざらん爲なりといへり思ふに世の多くの女は手わざするために物いふこと常よりもまさるらん

女子の言葉多きはいかなる目的ありてなるかと我そをつら〳〵思ひしとあり初めは天の女子に同じ事を操りかへし言はしむるは形而上の眞理をみいださんが爲ならんと考へぬいかにといふにヤコオビーとカンドとによればデモンストレエションとは同じ文章をくりかへしてなす進歩なりといふ女はいつも同じものより同じものに進み行けば即ち絶間

なきデモンストレエションなるべしされどこれよりも大なりとおぼゆる物こそあれまなこ銳き自然學者はこの葉の風もなきに斷えずそよぐを見出しぬかく絶間なく空氣を鞭うちてよく淨むるなりその力そよ吹風に近きものとぞいふなる女の舌は其木の葉にもまして七十路の命のあらん限り斷えずそよぐ物なれば天よりかほどの事を何のことわりもなくてなさん樣もなし其目的はいとたしかにありそはこの葉のそよぐと同じ目的にて天は空氣の汚るゝを防がんとて女子の舌もてこれをふるひこれをゆるものなるべし月にはゆりて淨むべき水の海ありとぞ女子の面にはゆりて淨むべき風の海のあるにやあらんされば世の中の女子皆ピサゴラス流の行ひをいと久しく學びたらんには天が下には疫行はれ又尼寺は避病院の樣にやならんされば開けゆく國にては傳染病の少きもかゝる國には物いふ人の多きにもとゐするにや女子の物いふは大なる都に多く又冬に多く又間の中に多きはかゝる時かゝる處にては空氣の中に「フロヂストン」(昔の化學説にて汚れたる空氣中に生ずるもの)多く生ずるものなればこれをゆること多からんをねがひて天のなせる業にやあらん天は此目的を達せんとて人智のさゝはりを破ることいとおごそかなり亞米利加の女は物いはざらん爲に水を口に啣むといふにならひて歐羅巴の女子は咖啡茶などを口にふくめどそは言葉を少くはせでかへりて多くすことも天の言葉少きを恐れてなすわざなるべし

我はかく論ずれどもかの胸せばき目的論者の様に大なる星のその道めぐるにさへいろいろなるうら道さま〴〵の下心ある様にいふにあらずかゝる論者ならましかはかの空氣を淨むる大なる目的ある女子の舌のそよぎをも世にありてたましひあるものゝその心あらはさんとてそよがしむる様にいふならん譬ば女子といふものゝ心をその舌にてあらはすなどいふなるべしされどかゝる論をなさんは我にはいと恥かしカントはある時うべなふ事も又いなむ事もならぬ事ありといひしがかゝる論はその一つならん我はそれとはうらうへにて心といふものの動き止むとき舌は始めて動き出すならんと思ふよしなきにあらず善き粉ひき塲には知らせの鐘といふものありそは碾くへき穀物なくなりたる時鳴りそむるものなり又妻ある人は皆知るべし女子の頭に正しからぬ事あるまじき事ある時その舌鳴り初むることありこはミュルレルといふ人の作りし算術の器械に同じその中に正しからぬ算題さらずば誤りたる事ある時に少き鐘ありてなるものなり我論の當れるやいなやつばらに考へ究めんは今より後の理學者の大なるつとめなるべし





歐洲美談　七歳になる小兒の廉直な感念

無名氏

ジヤツクと呼ぶ一人の善良村人がありましたが隣家の人に若干の負債がありましたので自分が飼ツて置く數羽の牝鷄を以て債務を果たしたいと申入れましたところ先方では異儀なく承知致しました偖愈相談が纏まりましたので牝鷄共は舊主人の手元を離れて隣家に棲替へるとになりましたが別段閉籠めないで放飼してありましたので翌日牝鷄共が卵を生む時刻が來ましたら牝鷄共は舊主人ジヤツクの家にある舊の鷄塒へ參ツて卵を生落としました

折柄丁度ジヤツク夫婦の者は不在にて家には當年七歳になるフ井リツプと云ふジヤツクの悴が只一人留守番をして居りましたが鷄塒の方に當りて日頃馴染の牝鷄共の鳴聲がしたのでフ井リツプは駈出して鷄塒へ遣ツて參り鷄塒の中に敷ひてある藁を搔分けました

ら數個の玉子が出ましたフヰリップは獨語「オヤ〳〵坊が大好物の生玉子だよ阿母チャンが歸ッて來たら無お喜びだらう阿母チャンに煑ンにして貰らッて一緒に喫べようや」暫時ありて「ダガ待てよコノ玉子〳〵を此方へ取ッといて宜イかしら坊達の彼の憐れな牝鷄共の樣に失ッ張りコノ玉子〳〵もお隣家の叔父さんの所有ちやないのかしら坊は先日學校で何か拾物をしたときに其遺失主が分ッたら直に其遺失主に返へさんではならぬものだと先生から敎はッたッけオ、左樣だ〳〵阿爺チャンや阿母チャンの歸宅を待たないでコノ玉子〳〵をお隣家の叔父さんへ届けて進げようや」斯く思ひ付くや否や小兒は直に玉子を持ッて隣家へ遣ッて參りまして叔父さんコレ御覽なさい叔父さん許の牝鷄が坊ン許の鷄塒へ來て玉子〳〵を生ンだから持ッて來ましたよ」隣家の人「誰が吩附て坊を此方へ寄越したの」「フヰリップ「誰も吩附ヤしません」「何とお言ひだ誰からも吩附られないで坊は一人でコノ玉子〳〵を持ッてお入來か」「左樣ですとも坊の阿母チャンや阿爺チャン達は家に居ませんもの坊は若し阿母チャンや阿爺チャン達が家に居たら屹度此樣しろと言ふに相違ないから一人で來たのです保證です間違はありません」「何故坊は阿母チャンや阿爺チャン達のお歸家を待たないでお入來かへ」「だッて阿爺チャンや阿母チャン達はお正午にならなくッちや歸ッて來ませんもの叔父さんの物品と分ッた上は今ッからお正午迄叔父さんの物品を坊の許へ取ッて置く筋がありませんもの」

己の運命に滿足せる少年

マルセルレンと呼べる一人の少年の牧羊者が或る山へ羊の群を連れて參りましたが一頭の牝羊が群にハグレたのでマルセルレンは一叢茂れる森の中へ搜索に這入りましたところが谿の樣に凹ンで居る山と山との間に行當てましたがマルセルレンはコノ森の中の荊棘の下に打臥して居る一人の男を發見けました看ればコノ男は餘程惱み疲れた容態で漸ッと呼吸が通ッて居りましたがマルセルレンを見て件の男は談話の端緒を切りました「コレハ／＼お若イ牧羊者さん私は空腹イのと咽喉が渇くので死にさうです實は私は昨日獵を爲樣と思ッてコノ深山へ分入ッたところ何が偖山道に踏迷ッて昨晩は到頭森の中で夜を徹しました」

マルセルレンは己が肩に擔イで居る籠を下ろし其中から麵麭と乾酪を取出し「サア此れを上げるからお喫べなさい而して其を喫べて了ッたら私の後に尾イてお入來なさい或る處に樫の古木がありますが其木與に始終水がありますから其處へお連れ申しましやう」

件の猫夫は麵麭と乾酪を喫べて漸く飢を凌ぎましたがマルセルレンの後に尾イて參り甘露の樣な結構な水を飲みました夫れからマルセルレンは前に立つて獵夫を麓の方へ導きました

時に獵夫は牧羊童に打向ひまして「偖て私は優しい和郎さんのお世話で生命拾をしました若しも和郎さんが來合はさないで彼の儘で最ウ一時間も經過たら私は往生して了ひましたらうよ和郎さんのお陰で危イ一命を助かッたから其恩返へしを仕度イと思ふから私と一緒に市中へお入來なさい私は金滿家です而して和郎さんが市中へ來から私の實子の樣に可愛がッて進げるよ」

少年は頭を掉り「否私は貴郎と一緒に市中へ往くとは御免を蒙りましまう私には貧しい生活をして居る兩親がムイます成程貧亡をして居るには相違ありませんが私は兩親が最愛うムイます縱令貴郎が王にお成りなさッても私の阿爺さんを貴郎に見替へ阿爺さんの手許を離れて貴郎のお側へ行く氣はムイません」

獵夫「左樣お言ひだが和郎さんはむさくるしい茅葺小屋に住ッてお在だ私なンぞは大理石で飾り立て立派な柱で四方を取捲イて居る御殿に住ッて居るよ和郎さんが市中へ來れば私は和郎さんに水晶の盞で醇ひお酒を飮ませるし銀の皿に結搆な料理を盛ッて御馳走して進げますよ」

マルセルレン「私共の家は貴郎が思ひなさる通り左樣ナニムサクルシくはムイません私共の家は四方を柱で取捲イて居りませんでも菓物の成る樹や葡萄蔓で取捲イて居ります私共は近傍の泉から純粹清水を汲ンで來て飮みます私共は働らイて私共に要用な質素な食

物を獲ます私共の家に銀だの水晶だの大理石などはムイませんでも私共の家には花卉に不足はムイません

獵夫「左樣ナとを言はないで私と一緒に市中へお入來よ市中にだッて種々な樹木や花卉がありますよ私の家には一直線になッて房々として居る並樹道だの珍奇しイ花卉を一面に植へてある花壇があります而して庭園の中央には見事な噴水器があります和郎さんは未だ彼樣ナ綺麗なものを見たとはあるまい水は噴水器から把の樣になッて噴出で白の大理石で出來て居る泉水に泡沫になッて落る樣は實に見事なものだ」

少年「私共は私共の方の森の中で結構幸福でムイます蔚々と生茂ッて居る私共の許の森蔭は少なくとも和郎さんとこの立派な並樹道と匹敵ふ丈け貴ふムイます私共の許の青々とした野原には千種萬樣の花が一面に咲イて居ります夫ればかりでなく私共の小さな家の周圍にも薔薇だの桔梗だの百合花だの菫が咲イて居ります貴郎は私共の許の泉は貴郎の許の噴水器程見事でないと思ひなさいますか巖の割れ目からブッ〱言ッて流れ出で又は小山の頂上から落ちて花の咲イて居る原野に逶迤として流れて往く其見事さ！」

獵夫「和郎さんは理由もなく私の言ふとを刎付けるが市中には澤山結構な學校があるから其處へ和郎さんを學校で種々な問問を爲して進げましやう市中には亦立派な劇場があッて其處には巧者な音樂家が居て面白イ合奏をして和郎さんの耳を樂しませるし亦市中に

は結構な坐敷に立派な祝賀があるが其處へお和郞さんは行けるよ」

少年「否々私は貴郞と御一緒に市中へは參りますまいよ私は村の學校で私に要用な丈のとを敎はりますが其學校では取別けて上帝を讃め父母を敬ひ而して其德に傚ふ樣に敎へます私は此上識り度ィとはムイません貴郞の許の音樂家か鶯だの白鳩鳥よりも宜く謠ひますのですか私共の許にだッて音樂會や祝祭がムイます日曜日には家內寄集り潺湲と流れる小川の岸邊にある森の樹蔭に坐を占める時の愉快さ！私の姉妹が謠ふ唱歌に連れて私は笛を吹きます私共の唱歌は遠方まで響きます私共が唱歌する尾に付て山彥は私共の唱歌を繰替します而して私共の阿母さんや阿爺さん達は私共の唱歌を聽くのを樂み慈愛の微笑を面に形はして私共を御覽なさいます否々私は貴郞と御一緒に市中へ參る譯には參りません」

偖ても獵夫は何樣に言ひ聞かせて少年を市中に伴ひ行くとの出來がたきとを見て取りしかば「ヂヤア如何して和郞さんに恩報じをしたら宜イかしらん此樣仕やうコノ蝦蟇口に金銀が一杯這入ッて居るがコレを進げるから取ッて下さい

少年「コノお金を頂ィて何に爲ましやうに成程私共は貧亡には相違ありませんが別に不自由も致しません若しもコノお金を頂きますれば何ソのとはない私が貴郞に爲て進げた少許のお世話を賣る樣なものですし夫れでは惡ふムイます私がコノお金を頂く樣なとがあ

りましては夫れこそ阿母さんに叱言を喰ひます阿母さんは毎々難儀して居る人があッたら世話して進げろ、又世話をするには慾心を離れて仕なければならぬと仰ッしやいました」

獵夫「コレは如何も優しい少年ではあるヂヤ何を進げたら宜ィかしらん何卒何か一ッ受納ッて下さい後生だから左樣でなくッては如何も私の氣が濟まないから」

少年「デハ此樣仕ましやう貴郎の腰の回りに着ィて居る罎を頂きましやう其罎の表面には數疋の獵犬が一頭の鹿を追ッてる畫が鐫ッてありますね」

其處で獵夫は少年の望に任せて件の罎を與へましたところ少年は宛然小羊が跳回る樣に欣々として飛ンで行きました」

少年の近侍

一日普魯西王佛得力二世が呼鈴を鳴らして近侍の者を呼びましたが返事がムィません其處で王は席を起ッて次の室の戸を開けましたところ侍童が椅子の上に白河夜舟の最中でムィました王は侍童を起こしに往かうとしまして侍童の衣嚢から何やら紙に書ィたものがハミ出して居るのを發見ました王は何物だらうと思ひ珍らしさうに其紙を展べて見ましたところがコレハ侍重の母親から寄越した書簡で吾子が金子を送ッて貢ィで呉れたのを謝する一片の禮狀でありましたが王は吾給料を吾身に着けないで母親に仕送りする侍童の優しい心懸に感心いたしまして金貨の捲棒を一個取ッて參り少年の衣嚢の中に舊の

通り書簡と一緒に右の金貨の捲棒を挿入れ何喰はぬ顔をして居られましたが王は頓て呼鈴の索を引鳴らしましたので侍童は眼を覺まして慌てゝ王の御前へ參りました其時王は侍童に向はれまして「其方は眠ッて居ッたか」と尋ねられましたが侍童は種々謝罪ました而して何ンだか衣嚢が毎もよりも重もい樣ですから何ンの氣なしに衣嚢へ手を挿入れましたら金貨の捲棒が出ました侍童はコレを手に取上げまして顔の色は眞青に變りブル／＼慄へて口が利けませんから「如何致した」と王は尋ねました少年「ア、陛下何者だか臣を失敗らせやうと致します臣は如何してコノ金貨が臣の衣嚢に這入ッて居りましたか一向に存じません」其時王が申されますには「一躰財寶は眠ッて居る中に這入ッて來るものではないのか志らん何の心配のヿはないからコノ金額を其方の母親に送ッて宜ろしく言ッて遣るが宜イ夫れに亦其言達母子の面倒を見て遣るから安心するが宜いぞ」

氷の下の小兒

茲に説出します説話は西暦千七百八十年頃のヿでムイましたが佛國の都巴里のヴェルサイユと云ふ所の片傍にある池に張詰めた氷の上に三人の小兒が面白さうに餘念もなく遊ンで居りましたが小兒の身躰の重量に壓されて氷は何時かミリ／＼と破れたので三人の小兒は氷の下に引込まれましたが脆ろい氷の表面を冒して小兒等と一緒に溺れるヿを怖れて誰一人として小兒等を救助に趨く者はムイませんでしたが是時十四才になる一人の

少年は進出で大膽にも池の樣子を見て居りましたが頓て地上に跪き兩手を指上げて上帝の冥助を祈りましたがコノ祈禱を楯にいたし心丈夫になりまして直樣池へ躍入り一面に張詰めた池の氷の中央を打摧ィて一條の道を通じ其如からモグリ込ンで氷の下になッて踠き苦しンで居る三人の小兒を一人ヅヽ陸上へ引上げ少年は滿足致し嬉し氣に三人の小兒を打眺め寒氣に凍へて居る小兒等の身躰を温める抔種々世話致しましたが程なく小兒等は慈母達の手に交付されました

五才になる小兒の賢いと

玆に述べますお話は兒心にも一片の孝心より己れの食慾を割きました然かもコノ孝行心は五才になる兒心より起りたるを想へば憐れにも亦最とゞ感ずべきのヿであります佛國ランス近傍に住ンで居る一人の僧侶さんが一日衣服の丈を取らせんとて極難澁をして居る檀家の許の三人の小兒を吾方に呼寄せました折から冬のヿでありましたが別けて此日は寒氣が嚴しィので三人の小兒はガタ〳〵慄へて居りましたが善ィ坊さんは爐の傍に小兒等を呼近付けて温暖を取らせ而して麵麭と少許の牛肉を取寄せて三人の小兒に名々に分けて遣りましたが長の二人は甘まさうに舌皷ちして喫べて了ひましたが當年漸ッと五才になる三番目の小兒は嬉しさうに自分の分を眺めて居りましたが偖て手を付け樣とも致しません其處で坊さんは「オヤ〳〵坊ヤは喫べないのかい」小兒「ハイ喫べません坊は家

に病氣が惡るくッて寢ンねして居る阿母チャンに坊が頂イた麵麭と牛肉を持ッテ、進げるの」

斯く言ひ終りて小兒は淚ぐみました其時坊さんは小兒に向ひまして「坊の阿母チャンには別に進げるから坊はコレをお喫べよボン／＼が空イてるだらうに」

小兒「ハイ坊はボン／＼が空イてるけれど阿母チャンが病氣が惡るいから」坊さんは別に牛肉と麵麭を取出しまして「ム、左樣か／＼チヤコノ麵麭と牛肉を進げるから阿母チャンに持ッてヽお進げよ其替り叔父さんが坊に進げたのをお喫べよ」小兒「チャ坊は麵麭丈け喫べて牛肉は阿母チャンのに取ッときます」

慈母の秘藏物

名高き羅馬の將官シピオンの娘コルチリー女は最も豪らい價値のある婦人でありましたが貴婦人達の集會の席にて相互に寶石だの裝飾品を見せ合ッて自慢して居りましたがコルチリー女に向ひまして「貴婦の寶石や裝飾品を拜見致し度うムいます」と申入れました其時コルチリー女は自分が注意て此上もなく大切に養育て居る自公の小兒を呼寄せ貴婦人達に引合はして「コレが妾の秘藏品でムいます裝飾品でムいます」と申しました

少女のマリー

今は昔十六世紀の頃のことでありましたが佛蘭西のウズールの街衢に通ずる道路をば進

歩輕げに疾く行過ぎる十五才の少女が厶りましたが名をマリーと呼びましてコノ少女は近い內に村內て祭典が厶いますから其時着飾らうと豫て樂しみにして居ました衣類を少女が平素儉約して積溜めたお金で買はふと思ひ足を宙にして市街を指して參りましたが胸の裡は悅喜で一杯になッて居ります少女の綺麗な裝飾に出合ッては少女の娘仲間の裝飾は光輝を消されて仕舞ひましやう偖コノ少女は貧しき葡萄培養者の娘マリーで厶いましたが今しもマリーは娛しき幻想を胸の裡に畵きッヽ欣々として來懸る行方より身には襤褸を纏ひ涙堂には悲哀の露を湛えたる餘所の見る眼も憫れなる一人の老爺にハタと邂逅しましたがマリーは運歩を停め老爺の薄命な物語に耳を澄まして俱に貰ひ泣きを致しました少女は不憫なと云ふ心を起こしました少女は最早晴衣も不必要樣に思ひました一片の慈悲心は少女の狹い胸の裡に芽出して裝飾の念に打勝ちました少女は自分の晴衣の代が還入ッて居る小さな巾着を老爺に與へました而して少女が施こしたる慈善の行爲は綺羅びやかなる晴衣を得たよりもマリーの身に取りて幸福である樣に感じ初めました

スタンスの學校の幼年生徒

德操と才幹とを以て音に名高きペスタローヂは少年の敎育に一身を献げました時は丁度西歷紀元千七百九十九年の頃普魯西は瑞西を征服へんとて兵隊を差向け瑞西に攻入りましたので戰爭のために兩親には離れ世に親戚便りもなき貧兒等の一團躰をなせる瑞西の

小さき市なるスタンスの學校の管理方を擔任けて居りましたがコノ校舎は政府の補助と少年等の勞作則ち麗らかなる日には耒耜を把ッて菜園を耕し寒き冬の日には機を織り乃至は糸を紡ぎ杯し其收入高を以て校舎を維持ィで居りまして漸ッと今日を支へると云ふ極切詰めた生計を致して居りましたが折柄スタンスと隣合ッて居るアルトルフと云ふ小さな市が兵燹に罹りて滿市灰燼となッたとの飛報がムイました其時ペスタロッジーは生徒を集め一同に向ッて申します樣「偖て諸君アルトルフの市は兵燹に罹り破壞されて了ひましたので着る着物もなく住ふ家もなく食ふ食物もなく路頭に彷徨ッて居る少年が多分百名以上あると推察致しますそこで難儀して居る少年の中二十名丈私共の許へ引取らうと思ひますからコノ事件を政府へ請願しては如何なものでしやう」と協議致しましたところ少年等は師の言葉を聽きまして異口同音に「然り然り」と答へました時にペスタロッジーは少年等の言葉を遮ッて申します樣「併し諸君コノ事件に付ィては能く勘考へて御覽なさい目下私共の手許に在る資金は大層乏いのです而して新入生のために政府で補助金を殖して呉れる如何だか的になりません此樣ナ次第でありますからアルトルフの少年等を引取るとすれば諸君の生計を立て教育を經續せんがためには勢ひ諸君は從來より一層の勞作を爲し恐らくは諸君は諸君の食物や衣服を割ィて新入生に與へねばなりますまい去れば若し諸君が諸君の調度を割くがために他日後悔する樣な恐れがあると懸念するならば寧ろ

アルトルフの少年等を引取らんと言はざる方宜ろしとて校長ペスタロヂーは生徒に向ツて是等の障碍を幾度も反覆し自分の言ふところが少年等の腑に落ちたかと云ふことを確めるために諄々と說聞かせましたが少年等は其の優にやさしき決心を眞實籠めて貫かんといたし「アルトルフの少年等は私共の方に引取りましやう何に當方へ來ましても毫も故障はムイません縱令校長の仰ツしやるが如き場合に立至りましても毫も遺憾には存じません私共は喜ンで私共の調度を割イて彼等と苦樂を倶に致しますと主張ましたがアルトルフの少年等は到頭スタンスの學校へ參ることになりましたが彼等は兩手を開イて迎へられ兄弟の樣に待遇はれました

十三歲の水兵

徃昔佛蘭西帝ナポレヲン一世が向ふところ前なく旭日の勢を以て歐羅巴の諸洲を馬蹄に蹴散らしました頃のとでありましたが獨眼の將軍海上の覇王英吉利の水師提督子ルソンが佛蘭西の艦隊を埃及海に襲撃ち致しましたので佛の艦隊は散々に打惱まされました時に佛の海軍少將カザビヤンカの一子當年漸く十三才でありましたが父に從ひまして海軍少尉候補生の資格にて佛の軍艦東洋號に乘組ンで居りましたが風腥く血の雨を降らしましたる埃及海アブーキールにて苦戰の當日十三才の少年が大人にも眞似の出來ない健氣な振舞は一點の申分もムイませんでした其勇ましきとと危急に臨ンで泰然として山の如

く動かざりしとは戰塲に馴れたる老功の水兵等をして感涙を絞らせました
今戰爭の眞最中佛の軍艦東洋號は敵より射懸けたる砲彈のために不意に火を出し和江に錨を卸る最中にて消止めん手段もなく火は看る〳〵内に全艦に燃擴らんとする勢ひにて今は匆々に砲臺に在りて敵の矢表に立ッ兵士もなく只少年の隻影を甲板に認むるのみでありました「父上兒は佛國の國旗を汚すとなくして兒の守衛線を撤てるとが出來ますか」と少年は叫びました然るに少將カザビヤンは重傷を負ひ死に瀕ッて居ましたので吾兒の叫聲を聞取らん樣もありませんでしたが斯くとも知らぬ少年は吾音聲の父の鼓膜に通じたるとと一圖に思ッて只管ら父の答を待ッて居りましたが頓て年老ひたる一人の水兵は少年の傍に駈來り「お悼しやお尊父樣には重傷を蒙り玉ひ最早御存命覺束なく依て若樣には私とゴ一緒に敵陣へ降り生命を存らへよと御尊父樣の御命令を蒙りまして伺ひましてムイます」と演べましたが之を聞くと等しく少年は狂氣の如くになり父の少將が氣息も奄々くにて仆れ臥したる一室へ驀地に走り行きヒタと父に取付イて絶入らんばかりに打歎き斷然として父の傍を去らざるべしと決心致しましたので疾く此處を立去りて難を遁れよとの父の懇請も命令も其詮がムイませんで可惜蕾の少年を救はんとせる老の諄言も其甲斐がムイませんでした「兒は死にます兒は父上と倶に死にます」と貴むべき少年は叫びました其時年老ひたる水兵は歎息致しまして「噫是非もなきとである最早一刻も猶豫する塲合でな

く私は漸ッと一身を脱れるとが出來る位でムィます然らば是れにて御暇申し上ますと言ひて老の眼に涙を浮べて少將父子に訣別れたかと思ふ程もなく猛火ば早くも火藥に移りましたので無慘にも佛の軍艦東洋號は己が五躰を以て父の五躰を庇ッて居りました少年の勇者を乘せたる儘百雷の一時に落ちたるが如く鳴渡る響と共に微塵に碎けましたコレぞ則ち年老ひたる水兵が歴山港に上陸せる後ち說出したる一塲の物語でムィました



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行（電話十八番）

明治廿五年九月十四日遞信省認可